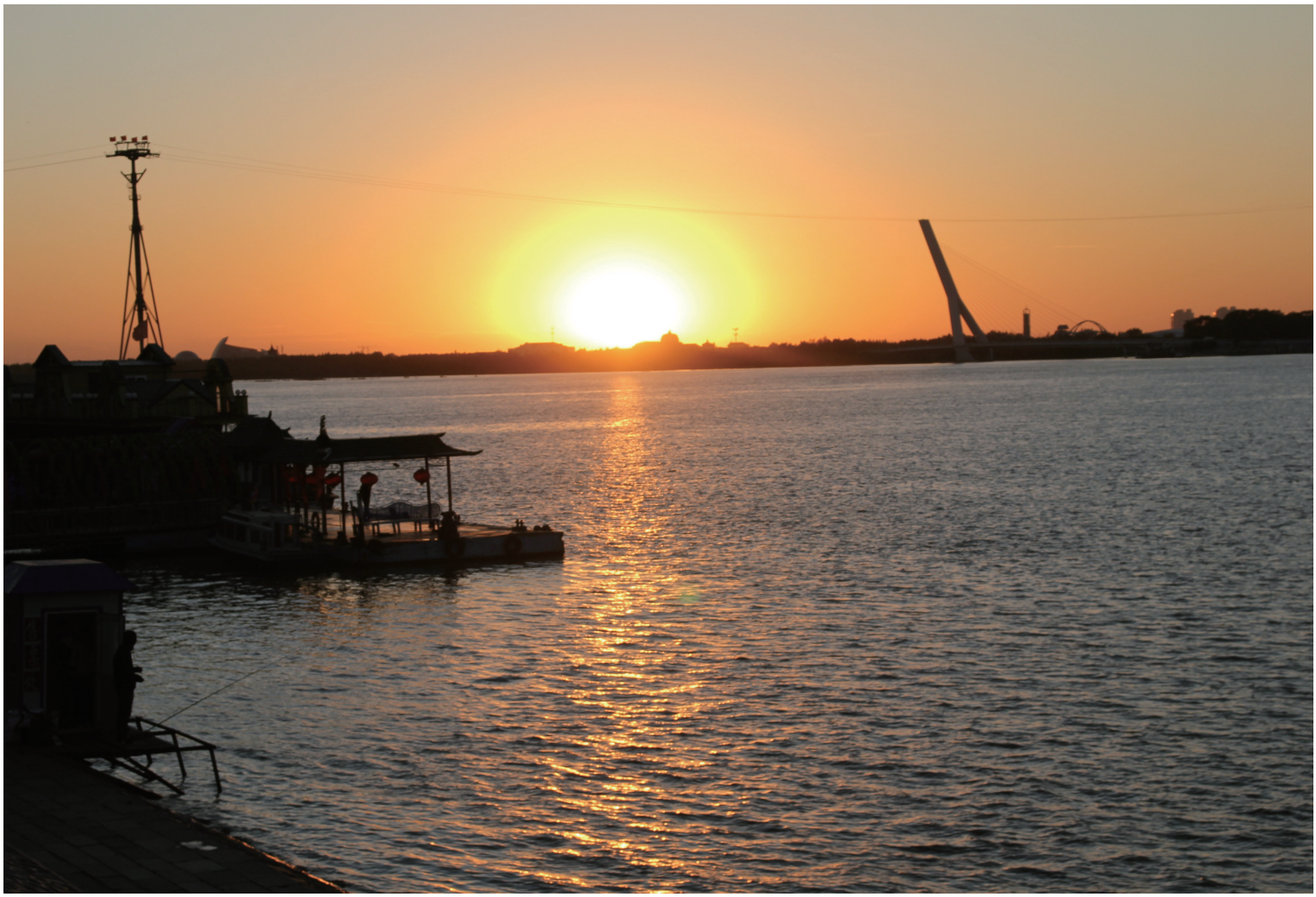
方正友好交流の会　会報 29 号　2019 年 12 月刊

星火方正

～燎原の火は方正から～

日本国家の棄民体質を問う　河合 弘之
—中国残留孤児問題とフィリピン残留日本人問題に携わって思う—
方正日本人公墓と日中関係　丹羽 宇一郎
一殺多生—その身を命にかえて　エイミ ツジモト
—「黒川開拓団」にみる女性たちの悲劇
満蒙開拓平和祈念館「セミナー棟」完成の報告と御礼　寺沢 秀文
雲南にある日本軍兵士の墓　古島 琴子
なぜ私はスカートをはくようになったのか？　ブリアーノ ルッセル



松花江に沈む太陽。松花江はハルピン市街区のすぐ北を流れている。旧満州時代のハルピンにはロシア人も多く、日本人たちは松花江をスンガリー（ロシア語、満州語起源という）とも呼んでいた。対岸はハルピン市の太陽島である。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第29号、2019年12月刊）　～燎原の火は方正から～

目　次

日本国家の棄民体質を問う
　　―中国残留孤児問題とフィリピン残留日本人問題に携わって思う―　河合 弘之　1

『日本人の忘れもの　フィリピンと中国の残留邦人』
　　の映画監督として　小原　浩靖　6

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

方正日本人公墓と日中関係　丹羽　宇一郎　10

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一殺多生―その身を命にかえて　エィミ ツジモト　21
　　―「黒川開拓団」にみる女性たちの悲劇―

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

満蒙開拓平和記念館「セミナー棟」完成の報告と御礼　寺沢　秀文　26

満蒙の歴史忘れず 平和の種まきに　中日新聞　29

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

胡暁慧名誉会長一行来日　編集部　30

残留孤児 養父母の思いは　育てた記憶を証言 若者が撮影　朝日新聞　31

残留孤児養父母の愛　子育ての記憶 証言をサイトに　読売新聞　32

黒竜江省ハルピン市方正県の「中日友好園林」の紹介　石 金諧　33

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『満州に渡った朝鮮人たち』を読んで　李 香花　35

旧満州の朝鮮人　苦難の足跡　移民２世が記録集を発刊　東京新聞　36

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

雲南にある日本軍兵士の墓　古島 琴子　37

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

舞鶴港　柳生 じゅん子　39

母の夕陽　〃　40

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

日本敗戦後の方正での生活を振り返って　中島　茂　42

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

方正日本人公墓を訪ねて　堀内 博史　45

ノモンハンへの旅　野田 尚道　47

日中友好協会福岡連合会「東北三省をめぐる平和の旅」　星野 信　50

満蒙の地「方正」のうた　千秋 昌弘　56
開拓団逃避行の歌　国は違えど同じ犠牲者

中国の日本人墓地の歴史　週刊うたごえ　65

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『日中未来遺産』を上梓して
―藤原長作氏の「記憶」を日中の未来に向けた「遺産」に―　岡田　実　66

創作書簡集『11 通の手紙』を上梓して　及川 淳子　69

『不条理を生き貫いて　34 人の中国残留婦人たち』
を上梓して　藤沼 敏子　71

『忘れえぬ人たち　「残留婦人」との出会いから』を上梓して　神田 さち子　77

残留孤児二世の移住と定着に関する博士論文を書き終えて	張 龍龍	79
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		
戦争体験の継承　羽田澄子さん　吉田裕さん	朝日新聞	82
満州 奪われたピアノ　秋吉敏子さん　89 歳 苦難の証言収録	読売新聞	83
旧満州から引き揚げ　迫るソ連兵　「自決しか」	東京新聞	84
満蒙開拓団「死の谷」伝える	読売新聞	85
澤地久枝さんに聞く　国に捨てられた 敗戦時の苦難が原点	東京新聞	86
中国残留孤児二世・汪楠さん　刑務所へ本の差し入れ活動	日本と中国	88
開拓民も日本軍国主義の犠牲者　丸井健太郎さん	週刊金曜日	89
初のエスペラント訳『蟹工船』を出版　堀泰雄さん	しんぶん 赤旗	89
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		
なぜ私はスカートをはくようになったのか？	エスペラント原文原稿	90
〃	ブリアーノ ルッセル	91
ブリアーノさんとの出会いと彼の原稿について	大類 善啓	92
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		
――「方正友好交流の会」へのお誘い――	方正友好交流の会	94
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		
報告／編集後記		95

日本国家の棄民体質を問う

―中国残留孤児問題とフィリピン残留日本人問題に携わって思う―

河合　弘之

私は１９４４年４月１８日に満州の新京で生まれました。１９４６年に家族全員で帰国する際、年子の弟は引き揚げ船の中で飢え死にをしています。日本に着くとすぐに病院に連れて行かれ、「この子もあと１日遅れていたら亡くなっていましたね」と医者に言われたそうです。

そういうことがあり、中国残留孤児のことはずっと気になっていました。今から３０数年前に一人の女性が、日本に帰ってきたが実は父親と名乗り出た人は赤の他人で、危うく強制送還かという報道を読んで、「そんな馬鹿な話があるか、私が戸籍を取るからやらせてくれ」と支援を申し出て、就籍という手続で戸籍を取ったのが私の中国残留孤児支援の第１号の話です。それ以後、中国残留孤児の国籍取得の仕事を本業の傍ら３０年以上続けています。その数は約 1250 人になりました。

フィリピンにもいる残留日本人

また、そのことを聞きつけてフィリピン残留日本人（フィリピン日系人ともいいます。以下同じ）の人たちから自分達の国籍問題も解決してほしいという依頼が 10 数年前にあり、彼らの要望に応えて国籍取得運動をしています。

フィリピンには、明治時代から移民が多く渡っており、彼等は刻苦勉励して、豊かな日系人社会を形成していました。そしてフィリピン女性と結婚し、多くの混血の子がいました。しかし戦争により成年男子は戦死するか強制送還されたため日系人社会は崩壊し、混血の子らは残され、迫害と差別の苦難の人生を強いられています。それがフィリピン残留日本人問題です。

行動する弁護士、河合弘之さん

フィリピン日系人問題と中国残留孤児問題の異同について簡単に説明をします。

まず国策で移住したかどうかですが、中国残留孤児は明らかに国策（満蒙開拓団、満州農業移民百万戸移住計画）として移住しました。それに比べてフィリピン日系人は任意の移民です。この、国策として行ったか、任意の移民として行ったかは、その後の日本政府の保護の強さ

にそのまま影響してくるということになります。

全体のスケール感としては、中国残留孤児は全体で約 4000 人、うち存命なのが約 2500 人、フィリピン日系人は１世（移民）が 1176 人、２世が 3818 人、うち存命かつ無国籍扱いは 1069 人です。平均年齢は 80 歳になり、次々と亡くなっています。そのことが何を意味するというかというと、非常に時間が重要だということです。このまま遅々として進まないと、問題を解決する前に皆死に絶えてしまいます。問題の解決ではなく、問題の消滅という悲劇を招きかねません。

戦後国交があったかどうかですが、フィリピンとは戦後割と早く国交が回復しました（1956 年）。中国とは、当時の田中角栄首相が国交正常化を成し遂げるまでありませんでした（1972 年）。「中国残留孤児の場合は国交がなかった、だから国交が回復するまで日本政府は手が出せず、残留孤児の呼び戻し、支援策が遅れたのは仕方ない」と、政府は支援が疎かになった正当理由にしています。

フィリピン日系人については、「国交はあるのに帰らなかったのは彼らの勝手だ」と日本国政府としては、国として、政策として保護・支援する必要はないことの理由にしています。

電気もない極貧の環境で息を潜めて暮らしている中で、自分でお金を用意して飛行機や船で日本に帰国できたでしょうか。仮に帰国しても、どこに誰を頼ったらよいのか分からない状況ですから、実際に任意の帰国は出来なかったのです。国の政策には、国交があったらあったことをサボタージュの理由とし、なかったらなかったことをサボタージュの理由とするダブルスタンダード的なところがあります。

日本政府の対応は？

日本政府は帰国支援や国籍付与に熱心だったかというと、中国残留孤児については不十分かつ遅ればせながら一応熱心にやってくれました。遅れに遅れましたが、民間ボランティアの努力と朝日新聞が大々的に報道してくれたが故に、世論が動き、世論が厚生労働省を動かして全面的・抜本的な救済策に至った経緯があります。

フィリピン日系人についてはほとんど支援をしてくれていないといっても差し支えない状態です。しかし、平和で豊かだったフィリピン日系人社会を戦争、侵略によって叩きつぶしたのは日本政府と軍隊です。国に責任があるという意味では、中国残留孤児と同じです。一方だけを助け、他方を助けないというのは片手落ちです。

法的保護があるかどうかということについて言うと、中国残留孤児は１９９４年に中国残留邦人等帰国促進・支援法ができました。その法律的根拠に基づき帰国支援、帰国後の支援がなされています。ただ、この法律には基本的な欠陥があります。最大のものは両親が日本人の海外邦人についてのみ適用になるという条文になっていることです。それが、厚生労働省がフィリピン日系人の支援をしない理由として使われています。

彼らは父親だけが日本人なので適用が無い、行政は法律の基礎があってはじめて仕事ができる、その基礎の法律が違うということで仕方がないと支援をほとんどしません。法律を改正すべく、行政として提案をすればよいのですが、それをしようとしません。ただ、少し保護もあります。フィリピン日系人二世であること、その子ども・孫であることを条件として在留資格が緩和され、来日した際は職種が制限されることなく自由に働くことができます。フィリピンは出稼ぎ社会です。彼らが生活を立て直すには、日本で一生懸命働いて、本国に残る家族へ送金するしかありません。こうして子や孫が日本で働くことによって生活を立て直してきている家族もあります。

日本国籍取得の容易さについて、中国残留孤児でいうと初めの頃は大変苦労しましたが、５～６年経ち、中国残留孤児名簿を日本の政府（厚生労働省）と中国の政府（公安）が協力して、中国に残る全部の中国残留孤児とおぼしき人たちを洗い出し、間違いない（偽物でない）と厳しく認定した上で、作成してくれるようになりました。その名簿に記載されると、家庭裁判所での就籍手続がスムーズに早く許可になるというシステムが出来上がりました。ところが、フィリピン日系人についてはそうではありません。非常に困難です。そもそも日本政府は本腰を入れてくれていないので、孤児名簿のようなものは全くありません。父が日本人であるということの証拠集めが非常に困難です。なぜならば、父がいなくなり、母と子で逃げ回っている途中で、父の証拠（父の名が刻まれた道具や遺品等）を無くしたり、戸籍上でいうと、役場には結婚証明書、教会には子の出生・洗礼証明書があったのですが、フィリピンでは非常に熾烈な地上戦、市街戦があり、役場や教会が建物ごと消失してしまったからです。

これからどうすべきか

今後の展望としては、中国残留孤児には倖せな余生を送ってもらうことしかないと考えています。中国残留孤児は言葉の壁があるので社会に入っていくことがなかなかできない。それなら、中国残留孤児同士で肩寄せ合って励まし合いながら、いつでもあそこに行けばみんなに会えるという恒設的な場所が大事なのではないか考え、今から１０年前に東京に「中国残留孤児の家」を設立しようと皆に呼びかけて、実現しました。現在は御徒町にあります。

二世は父母の苦労を見ているので、非常に頑張る人が多く、成功している人もかなりいます。しかし、心ならずも 20 歳頃に親に連れてこられ、社会に適合できず、中国に帰りたいと思いながらも帰れない人もいます。そういう二世・三世たちも含めて日本の社会での存在感を出し、日中友好の架け橋になってもらうことを期待しています。一方フィリピン日系人は、生存していてまだ戸籍が取れていない二世が 1069 人います。いくら戸籍を取るのが早くなったといっても 1 年間に 20 人程が精一杯で、このペースですと、あと 50 年もかかってしまいます。

何とかしなければと暗中模索していたところ、国連が世界中の無国籍者をゼロにする政

策を立ててくれました。国連難民高等弁務官事務所（ＵＮＨＣＲ）が担当をしてくれます。ＵＮＨＣＲのミッションは、国籍がはっきりしていても本国から迫害されて逃げ出した難民の保護、本来はある国に属すべきはずなのに自国民とみなされない無国籍者の保護、そういった人々をゼロにすることです。

無国籍者と認められると若干の保護と、無国籍者が本来帰属するべき国が勧告され、その国は手続を取らなければいけない運びになります。フィリピンは人権について非常に敏感で大事にする国です。そこで、フィリピン日系人達の無国籍認定申請をＵＮＨＣＲとフィリピン政府にして、大量に無国籍認定をもらい、その人達の認定書を日本に持って行き、国連が認めている無国籍者で日本に属すべき人と認められているので、早く日本国籍を与えてほしいという流れで、国籍認定をしてもらえるようにする方法が開けてきています。

うまくいけば２～３年で問題が解決するかもしれないと期待しています。この問題は、フィリピンの外務大臣も熱心で、近いうちに全面展開ができるのではないかというところまできています。

日本国家の棄民体質！

私が中国残留孤児問題とフィリピン日系人問題に約30年取り組んできた中での感想ですが、日本は国が国民に対して忠誠を求めることに極めて急でありますが、それに対応して国民が窮地に陥ったときに、国が助けるということについては、非常に冷淡なところがあると思っています。使いたくない言葉ですが、日本には「棄民体質」があると言えるかと思います。

国民が国に尽くす（戦中の兵役の義務、納税の義務、教育を受ける義務等）のは、国がいざという時に自分を助けてくれると考えるからです。しかし、日本という国は歴史の中でそういう立ち振る舞いをしてきたかというと問題があると言えます。特に敗戦直前の８月１４日に各大使館に送った電報は、「居留民ハ出来ウル限リ定着ノ方針ヲ執ル」でした。それは、国は助けに行かないよという表明です。

敗戦直後の８月２６日に、まだ武装解除されていない大本営が「満鮮に土着する者は日本国籍を離るるも支障なきものとす」と外電を送っていました。「勝手に中国人、朝鮮人になりなさい」という意味です。私はそれを知り、血が逆流するのを覚えました。なんということを言うのだと思い、「棄民体質」という言葉を使いました。それに対して戦後移民史の研究者・加藤聖文先生は「そういう単純なものではなく、当時の日本は迎えに行く国力も船もないし、内地にいる日本人自体が食うや食わずの状態だったのだから、単純に棄民体質とは言えないのだよ」と言われました。

私のような運動家と彼のような研究者は見方が違う、冷静だなと反省しましたが、新しいドキュメンタリー映画「日本人の忘れもの」の制作のために取材を進めていくうちに、だったら敗戦後すぐは無理でも、１０年後に迎えにいけばいいじゃないか、やっぱりおかしいと思いました。こういう日本の体質は欧米と違う気がします。学術的な裏付けはないですが、アメリカは、ベトナム戦争の際にアメリカ人兵士と現地女性との間にできた子ど

もを集めた孤児院を作り、敗戦・撤退の際にはヘリコプターで孤児を強引に救出し、アメリカに移送して養子に出し、その孤児達は倖せな生涯を送ったというドキュメンタリーをテレビで見ました。

自国民は絶対に保護するという強固な国家意思の表れです。欧米の兵隊は仲間が負傷したら、二次被害を恐れずに介抱・救出をする。一方、日本兵には攻撃力が弱るのを避けるために助けてもいけないし、助けを求めてもいけないという日本軍独特の倫理がありました。世界的にみて違うということを知るべきでないかと思います。最近、葛根廟事件のドキュメンタリーを見ました。事実を知って一番ショックだったのが、犠牲になった日本人避難民千人強のうち、ソ連軍に殺された人よりも、集団自決で亡くなった人が多かったということです。日本人は個人の生命に執着する度合いが弱いのではないかと思いました。先ほど述べた戦中の兵士の倫理も含め、日本人の心象風景を見たような気がします。３０年に及ぶ私の国籍取得運動を通じて、私は色々なことを考えさせられました。少しは私を思慮深くさせてくれたように思います。

私としては、中国残留孤児については“落葉帰根”という目的を持って倖せに暮らしてもらうこと、フィリピン日系人に関しては、一人ずつでは時間がかかるので何とか全員を一斉に救済すること、を目標に更に歩み続けたいと思います。

（かわい・ひろゆき：弁護士活動の傍ら、脱原発運動に携わり、その運動の一環として『日本と原発』という記録映画を制作し上映活動を展開する。2012 年 6 月に開催した本会の第 8 回総会後の記念講演会では安冨歩氏とともに講演を行った。脱原発弁護団全国連絡会代表）

『日本人の忘れもの
フィリピンと中国の残留邦人』
の映画監督として

小原 浩靖

終戦７５年目の２０２０年初夏に劇場公開される「日本人の忘れもの　フィリピンと中国の残留邦人」で脚本・監督を務めた小原浩靖と申します。

この映画は、中国残留孤児の身元未判明者の国籍取得を支援してきた河合弘之弁護士がプロデュースしたドキュメンタリーです。私が河合弁護士から中国とフィリピン、この２つの国の残留者問題をテーマとした１本の作品を作れないか？との依頼を受けたのは２０１８年の初めなので、２年の制作期間を費やした作品となりました。

河合弁護士がフィリピン残留日本人の国籍取得を手がけ始めたのは、２００２年が終わる頃。ちょうど中国残留孤児のみなさんが国家賠償訴訟を起こした時期と重なります。フィリピンの問題は、今もほとんど知られていない残留者問題であり、日本政府からの具体的な支援が未だもって講ぜられていない戦後未処理問題です。

フィリピン残留日本人問題を説明します。明治時代末期からフィリピンには日本からの移民が始まっていました。農家の次男以降の男性が経済的自立を求めて、米国の植民地に渡ったというケースです。当初は、米軍の保養地となるバギオ（ルソン島の北）での道路建設の労働者だった移民たちは、船舶用のロープの材料であるマニラ麻の栽培・加工で世界的成功を遂げ、フィリピン各地には学校や病院、デパートまでを持つ日本人街が点在し、太平洋戦争が始まる前には３万人を擁する豊かな移民社会を形成していました。

多くの男性は、フィリピン人女性と家庭を築き、生まれた子どもたちには日本の名前を授けて日本人として育てました。当時の日本人学校の運動会などの写真を見ると、日の丸、星条旗、フィリピン国旗が仲良く並んでいる様子が印象的です。

しかし、戦争が始まり、日本軍が米国からフィリピンを奪うと、成人男性は日本軍に軍人、軍属として徴用されます。軍政一色となったことからフィリピン人には反日感情が高まり、1944年から始まった米軍のフィリピン奪回作戦には30万人ものフィリピンゲリラが参戦しました。

移民の子ども達は、迫害を避けるために父親が日本人であることを隠して山奥や離島に逃げ込み、終戦を迎えました。そして、父親を亡くし、または日本へ強制送還されたことによって日本との血のつながりを証明できない日系２世、戦争孤児とも言えるフィリピン残留日本人達が生まれたのです。彼らの本来の国籍は、父の国である日本ですが日本の名前を捨て、父の写真や身元を証明する書類を捨てて逃げたことから、それを証明できず、教育も受けられず、貧困のまま終戦７５年目を迎えようとしています。今、生きているフィリピン残留日本人の数は、およそ1100人。平均年齢は８０歳を超えています。彼らの望みは父親との血の繋がりを認められ、日本国籍を得ることなのです。

戦前の日本人学校　日米比の国旗が印象的

フィリピン残留日本人２世　ヤマモト・ホセフィーナさんと猪俣典弘氏
終戦時２歳だったホセフィーナさんの父は、地域で愛された大工だった

この映画制作を請け負った時点では、私はどちらの残留問題にも、ほぼ無知の状態でした。1964年生まれの私は、特に歴史に興味を持つタイプではなかったため、80年代初頭の中国残留孤児の訪日調査の様子を自分とは関係のない出来事としてテレビで見た記憶がある程度、フィリピン残留日本人問題は、河合弁護士と出会った2012年頃に、その存在を初めて知ったという程度でした。

先ずは、歴史を知ることからと、勉強を始めましたが２つの残留問題をどのように１本の映画で表現すれば良いのか？　机の上で得た知識だけでは見えてきませんでした。

映画のテーマ自体を模索しながら撮影に入りました。中国残留孤児問題は、東京板橋区にある中国帰国者２世の庄司正美さんが経営する介護施設・一笑苑（旧・長寿楽園）を撮ることから始めました。

そこでは、利用者である孤児の方々、その配偶者、また２世の方々が中国語で語り合い、八角の香りがする中国東北部のお昼ご飯を美味しそうに食べ、職員である２世、３世の方、また中国から留学で来ているヘルパーが家族のように暖かく対応する様が見られました。私は、この施設での孤児のみなさんを見て、普段の生活の孤独を感じました。「ここに毎日来たい」。「ここには本当の家族がいる」。とおっしゃるみなさんが、いかに苦難の人生を歩み、そして言葉と文化の壁によって日本の社会に溶け込めずにいるかを感じました。ご自宅でのインタビューに応じてくださった方々は皆、惜しみなくご自身の人生を語ってくださいました。中国の養父母に愛されたことを語る方、反対に農家の労働力として引き取られては貧困によってまた別の農家に売られたことを語る方、お一人お一人が、この人生を伝えたいという思いが堰を切ったように言葉になって溢れたのだと思います。

暖かい雰囲気に包まれた介護施設　一笑苑・板橋

フィリピン残留問題の撮影は、河合弁護士が代表理事を務める国籍取得支援団体、NPO法人・フィリピン日系人リーガルサポートセンターの事務局長、猪俣典弘さんの残留日本人２世の現地調査に同行する旅から始まりました。話には聞いていた、本で読んだ残留者の現実を目の当たりにする日々でした。日本人の父の子であることを隠して逃げ込んだジャングルで、漁師でさえ行くことを拒む小島で、そのまま教育も受けられずに貧しく人生を歩んで来た７５年間。只々、父との暖かい思い出と家族に支えられて生き延びて来た７５年間。「私のお父さんは日本人だから、私も日本人です」と訴える彼らの思いを私はカメラに収めるだけで精一杯でした。

日本政府が彼らに支援の手を差し伸べない理由は、大きくは３つ挙げられます。１つ目は中国残留孤児と違い、彼らは日本とフィリピンの混血であること。２つ目は、満蒙開拓団のような国策移民ではなく自由移民の子であること。そして、３つ目は、国交断絶していた中国と違い、国交のあったフィリピンから日本へ来て戸籍の確認や就籍（新たに戸籍を作ること）が可能だったということです。

日本政府が挙げるこれらの理由は、残留者たちの歴史や現状を学ぼうとしないことを現しています。戦争の犠牲者を国が助けない理由を挙げることは、国家としての暴挙です。

撮影を進めて行く過程で、フィリピン政府は残留者たちへの支援を開始しました。フィリピンにも日本にも国籍を持たない彼らを無国籍者として認定し、無国籍者に講ぜられる支援策を得られるようにするプロジェクトです。また、テオドロ・ロクシン外務大臣は、この残留問題をフィリピンと日本の２国間で解決できるよう働きかける約束をしました。

撮影を進めるにつれ、映画のテーマは決まりました。『２つの国の残留問題の“今”を描くことで、日本という国家の今を顕す。』当初、漠然と考えていた、日本の今を描けないか？という思い。これが映画のテーマとなったのです。

中国残留孤児問題では、国家賠償訴訟の顛末をNPO法人日中友好の会・理事長の池田澄江さん、弁護士の小野寺利孝さん、安原幸彦さん、朝日新聞の大久保真紀さんの証言を織り交ぜて描きました。日本国が自ら戦後処理を率先して行って来なかったことは、このシーンで顕され、それがフィリピン残留問題にも通じるように表現しています。

フィリピン問題は、この原稿を書いている今、大きな展開を迎えています。日本政府へ支援を申し出る“最期の陳情”を目的に８０歳を超えた残留日本人２世の代表団が訪日し、国会議員たちへ署名と請願書を提出しました。映画は、フィリピン政府の動き、日本政府の受け止め方を捉えてドキュメンタリーならではの興奮を持って問題の本質を伝えます。

制作開始当初、無知であった私は、映画が完成する間近の今（２０１９年１０月末）も、まだまだ無知のままのような気がしています。撮影で触れ合った方々の気持ちを分かることは私には、到底不可能だということを知ったからです。

しかし、苦難の人生を歩んだ方々の気持を分かることとは別に、この問題を映画という手段で伝えるための“芯”。伝えるための本質的な心は、私の中に生まれて育っていると感じます。

生まれながらにして、または物心がつく前に“人生のダメージ”を受けてしまった方々の現実を。

再び戦争へと向かいかねない日本国が、７５年を経ても残留者という国民に強いる冷ややかな行いを。

この映画で是非、若い人たちに伝えたいと考え制作しています。

劇場公開は、２０２０年初夏。

東京の映画館、ポレポレ東中野から全国へと広めてゆきます。

（おばら・ひろやす：映画『日本人の忘れもの　フィリピンと中国の残留邦人』の脚本・監督。TVCMなどの映像広告やTVドキュメンタリーなどを手がける。本作は、劇場映画第一作目となる）

方正日本人公墓と日中関係

丹羽 宇一郎

《解説》

本講演は今年、2019 年 6 月 9 日（日）、第 15 回方正友好交流の会総会後の記念講演の採録である。丹羽さんのプロフィールについては冒頭、司会をした森一彦が紹介しているのでここでは省略する。

丹羽さんについては、中国大使に就任後すぐに『星火方正』を北京の日本大使館に送ったところ、一か月ほど経った頃だったか、北京から返事をいただいた。大使という大変忙しい業務をぬって返事をいただいたことに驚くとともに感激した。またとても律儀な方だと思った。便箋に書かれた手紙には、我々の会へのねぎらいの言葉と、中国の東北へ行ったら必ず方正公墓に参拝しますと書かれてあった。その言葉通り、厳しい状況にあった日中関係の中での公墓参拝だったのである。（大類善啓）

（司会）それでは講演会を始めたいと思います。本日は、丹羽宇一郎様にお越し頂きました（拍手）。ご紹介するまでもございませんが、丹羽様は 1939 年愛知県に生まれて名古屋大学法学部を卒業後伊藤忠商事に入社、取締役社長・会長を経て、2010 年 6 月、民間からは初めての中国大使に就任されました。その後、2012 年 12 月に帰任される直前の 11 月に、方正日本人公墓に参拝されました。私たちの会報『星火方正』17 号（2013 年 12 月刊）でもご紹介させていただきました。本日はお忙しいなかお越しいただきました。

本日のご講演は、「方正日本人公墓と日中関係」というテーマでお話をいただきます。それでは、丹羽宇一郎様よろしくお願いいたします（拍手）。

≪丹羽宇一郎≫　　方正訪問時は最悪の時期だった

皆さん、こんにちわ。方正については皆さんの方がお詳しい方も多いと思います。日中関係というのは時に政治情勢によってなかなかリスクが大きいところもあります。

さて、方正日本人公墓は、なかなか日本の方でもお出掛けになっていない所です。ハルピンから車で3時間かかりますので、そういうことを考えますと関係者以外はほとんどの方は訪問されていないのではないでしょうか。

その辺の話を少し申し上げると同時に、当時日中で起きた色々なことがあり、そのあたりについてもお話したいと思います。戦争の残り火が今も色々なところで影響しています。依然として小さな炎を出しているというような、感慨を覚える出来事もたくさんございます。皆さん、それぞれの事柄についてはご関心もあるし、私以上に関係が深い方がいらっしゃると思います。

今日お話しするのは、方正日本人公墓の話、あるいは日本人の遺骨ですが、アジア全体の問題もございます。 また、遺棄化学兵器の処理問題にも触れます。私は中国の東北へ行くたびに、戦後は終わっていないのではないかと思います。それは、日本人の大部分の方はご関心をお持ちではないかもしれませんが、化学兵器の問題です。それから日本人の遺骨です。アジアにどれくらい残っているのか。米国は年間55億円、遺骨の収集に使っています。

日本はその点、予算がありません。個人個人は遺骨に対して世界のいろいろな国に比べても心の中で考えている方がたくさんおられるわけですけれども、国全体として見ると日本は世界的に見ても実に冷淡と言いますか、自分の親族以外の遺骨についてはほとんど関心がない。そういうところを今日はお話ししたいと思ってまいりました。

今日、とりわけ方正と日中関係というテーマであれば、最初に私が申し上げたいのは方正を訪ねた経緯です。大使として帰国が決まった後です。方正公墓の話は知っておりましたし、日本大使として行くべきだと思いました。中国の外交部に、私はこれから帰国するのでどうしても方正にお参りしてその上で帰国したいと申しました。おそらくもう二度と方正に行く機会はないと思うので、最後だと思って行きたい。

しかし中国側は、お断りしたいと言いました。今は政治環境が悪い。2012年、日中関係が最も悪い時期でした。そのやはり1年くらい前に、尖閣諸島の問題も含めて、反日デモが起こり、中国の若い方々が方正にある中日友好園林に行き、日本人公墓の隣に建てられた石碑にペンキをかけるという事件がありました。

私は中国側に、もし何かあっても責任を持ってくれとは言わない、自分で責任持つから、私は自分で車も手配し運転させて行きますからと言いました。ま、当然本省に言えば、止めた方がいいんじゃないかというような雰囲気でございました。

しかし、理屈から言いましても4500名ほどの日本人が、若い人を含めて眠っている。その公墓があるわけですから、これはお参りしたいということで出掛けたのです。就任以来の大使秘書1人だけ連れて、外務省は関係なく、両政府の関係者は誰もついて来ないし、案内も来ないし、果たして場所に入れるかどうかも分からない。そうしてまぁ方正に着いたのだけれども、どうやって墓地まで行くのか分からない。

方正と言っても、この会場の御茶ノ水に行くようなわけではありませんから、さあどっちに行くのかが分からない。方正と言ってもたくさんあります。そこで、とにかく方正の入り口へ行けと言いました。

私はだいたい楽観主義者ですからなんとかなるだろうと思いました。しかし、方正に着いても、非常に冷たい目で見るわけです、日本人を。その前の段階で尖閣の問題も含めて反日感情が高まっていますから。

以前には、日本の料理屋は日本語で広告を出せと言われていた街ですけれども、それが一挙に禁止になった。方正公墓も愛国教育として利用しようという流れになっていた時ですから、私が訪れた時は最悪の時期だったわけです。

そうしましたら男性が二人待っていてくれました。地元の役人が二人いるわけです。 大使が行くのだから、いくら面倒はみないと言っても、もし何かあったらということで、待っていました。鍵を持ってきて開けてくれたわけです。中日友好園林と言うところですけれども、鍵を開けてくれました。中には日本人公墓、中国養父母公墓、そして寒冷地の水稲のお米の技術を伝えた藤原長作さんを記念した碑が横に立っています。

お花は途中で買って行きました。それでお参りしました。変な話ですがトイレに行きたいのですがトイレもない。女性はいなかったので、その辺でという話になり、雪の中で用を足しました。かき氷に甘い蜜をかけたような状態です。立小便なんて中学のとき以来だなと思いました。

そうしてお参りして、帰ろうと思ったのですが、大雪が降って来まして、風も強い。案の定 、道のあちらこちらで大型トラックが立ち往生している。これは通行止めになるのではないか。小さな車でしたから、トラックとトラックの合間を縫って、走ることができました。3 時間半から 4 時間くらいかかりましたが、朝から夜まで、8 時間労働みたいなものですね。そうして帰ってきました。

方正の歴史は、皆さんご存知の通りです。1963 年に周恩来が方正周辺の遺骨の収集、合葬を命じて、公墓を建立しました。72 年の国交正常化の 10 年ほど前です。日中友好の動きが水面下で始まっていた時代です。残留日本人の帰国支援は、それから 16、7 年経ってから、1980 年くらいに始まり、残留邦人の方々が帰国しました。それから 14、5 年経って、中国から日本に帰った人が、中国の里親に大変世話になったので中国養父母公墓を建てるというような動きも出てきました。養父母のお墓を建てて里親に感謝したいと。

その後 10 年ほどして、在日華人のネットワークもあり、中国側が方正への投資を呼び掛けて、日中友好を進めようという動きもありましたが、2010 年頃に尖閣諸島の問題が起こりました。先ほど申し上げたように、方正の公墓が破壊されかねないということで、愛国教育に使う方向になっていった。

ちょうどその頃に私が行きましたので、また日本人が来るのか、これはけしからんという空気もありました。黒竜江省の農業開発局は非常に力のあるお役所です。農業開発局の車は独自ナンバーをつけていて、警察以上の力を持っています。私は民間時代からその局長を知っていました。その局長に電話したんです。「今来てるよ」と。そうしたらすごく喜んでくれて、一杯やろうと言われたのですが、私はもう時間がなかった。そんな経緯もありましたが、私としては何とか、自分の思いは実行できたということです。

その後、色々と調べてみると、皆さんご存知のように、満州への入植者は 27 万人ぐらいいた。ソ連が侵攻するということで、逃げたのだけれど 1 万人くらいの日本人が残った。

その内の数千人が死亡している。残留した方々が、その後帰国もされたし、残っている方もいる。現地の中国の方も戦争と言うのは彼らがやった訳ではない。現地の人は関係がない。戦争は忘れてもいる。日本の料理屋といっても朝鮮族の経営が多く、大部分は本物の日本食ではない。

ともかく私は、方正について、特に旧「満州」について、ずっと関心を持っていました。

平頂山事件

方正についてお話しましたが、もう一つ、「満州」というと、平頂山事件という大事件が撫順の炭鉱で起きています。1932 年です。遼寧省の北に撫順の炭鉱がありまして、32 年の 3 月に満州国の建国宣言がありました。そこでにわかに抗日運動が起こります。ゲリラが撫順の炭鉱を襲った。日本軍の撫順の守備隊が、32 年 9 月 16 日にゲリラ掃討をした。ここの集落の 1400 人を全員崖下に集めて、全員射殺した。中国では 3000 人という話もありますが、日本側は 400 人〜800 人しか殺していないとしている。集落の人口は 1600 人です。これは正確な数は分かりません。平頂山で生きながらえた方が 4、5 人いらっしゃる。お父さんお母さんの死体に守られ、その下で、生き延びていた。日本軍は射撃した後、生き残してはいけないと、銃剣で刺してまわったんです。本当に死んでいるかと。

ところがこの銃剣を逃れた子供がいた。この方々が、戦後に裁判を起こして、炭鉱長とか、ほとんどが死刑になった。その関係者が日比谷の公会堂に集まり、平頂山の関係者が来ているので、「大使ご出席ください」と要請された。ところが日本側は、平頂山って何だということになりました。撫順の炭鉱での出来事が伝わっていないのです。数年前まで、90 歳くらいの方が最後は 1、2 名が出席されていました。私も 2 回ほど出席しました。会津の方が作られた福島の「べこ乳」の創始者の方の長女が、「満州」で栄養失調により亡くなっているのです。こういう方々も参加されていました。この平頂山も、我々としては関心がある事柄です。

それを考えると民間人も 11 名くらい死刑判決を受けていますが、今申し上げた生々しい話です。中国人のイメージとしては非常に残虐な日本人ということで、世界にも報道されている。

化学兵器処理の問題

もう一つですね、私が申し上げたいのは遺棄化学兵器処理の問題です。これは若い方は知らない方が多いし、お年寄りの方にもあまり知られていません。ご存知の方は中国にかなり関心の高い方だと思います。

ハルバ嶺という地区に集中的に化学兵器が集まっています。その他は、広がってどこに存在しているのか分からない。書類を全部消却して慌てて逃げていますから、どこにどのくらいの化学兵器があるのか分からない。吉林省敦化市にあるハルバ嶺地区には、推定で最低約 20 万発の日本軍の化学兵器が埋設されていると言われています。それで爆発が現実に起きて、現地の中国の庶民の方が毒ガスにやられて、若い女性が顔に火傷を負ったとんでもない写真があるわけです。日本の化学兵器です。その兵器はどこにあるのかが分からない。

今度は広州の川の中で見つかった。なぜ広州にあるのか。本当に日本製なのか、ソ連製なのか。中国側は日本製だと言う。北は黒竜江省から南は広東省に至るまでの中国各地に、旧日本軍の化学兵器は残存しています。1999 年になってようやく、中国と日本で化学兵器廃棄の覚書が結ばれ、翌年から実際の処理作業が開始されました。戦後 50 年経ってできたのです。それまで何をしていたのかということです。

世界的にも、化学兵器の問題について、覚書は国際的にできています。イタリアですとか、パナマですとか。ですから日本だけではないのですが、日本の中国での問題が圧倒的に大きな規模です。南京はほぼ処理が終わりました。一日に処理できるのは 1 発か 2 発です。20 万発といったらとんでもない数です。2022 年までにこれをゼロにするという目標を掲げた。できるわけがないと思いますが、目標としてやろうとなっています。私も吉林省のハルバ嶺地区に行って来ました。ところが日本人は、自分たちが褒められないような場所には、誰も行かないのです。これは非常に無責任です。皆さん方も関心が薄いのではないでしょうか。もし日本にそんな爆弾があったらどうですか。しかも、どこにどれだけあるかもよく分からない。

終わっていない戦後処理問題

遺骨の問題も、化学兵器の問題もそうですが、日本人は個人のことは非常にきちんとやる民族なのですが、他人のこと、公共のこと、全体のことになると、まったくと言っていいほど、冷酷ですね。日本人は無責任です。そう思わざるを得ないです。私は非難しているのではないのです。自己中心的と言いますか、そういう人々が日本人には圧倒的に多い。中国に行ってみたらわかりますが、大変な作業です。自分の住んでいる土地だったら、自分の山だったら、湖だったらと、想像してみてください。しかも普通の爆弾ではない。化学兵器で爆発もする。爆弾が見つかったら、中国では地域の住民は避難します。どういう毒ガスが出てくるか分からない。被害にあったら一生台無しになるような事態になります。皆さん方の娘さんがそういう目に遭ったらどうしますか。やったのは誰だと。中国人の気持になったらどうでしょう。戦争は終わっていないんです。いったい何なんだ、ということになってしまいます。

戦争の後始末は、気が付いたときからでもしなければならない。当たり前の話で、私は日本の政府がどうこうではなくて、常識的に言っているのです。もちろん日本だけではありませんが、少なくとも日本にはそうした誠意が欠けている。日本の国民が、そういう気持を持たないといけないと思います。国の予算がなければ民間の寄付でもいい、何らかの形で日本人の気持をあらわす必要があるのではないでしょうか。化学兵器を見つけて撤去する作業は、とてつもなく大変な作業です。戦争というものの後始末は、終わっていないと感じました。

遺骨問題について

もう一つ、日本人の遺骨についてお話しします。海外で戦死した軍人・民間人等約 240 万人のうち、日本に帰還した遺体は約半数の約 125 万。100 万人以上の遺骨が、海外で散乱している。戦後 7、80 年経ってもまだ散乱しています。

先ほど申し上げましたが、米国は55億円、遺骨収集に予算を使っています。自分たちの国民の遺骨です。日本はなぜそこまで放っておくのか、分かりません。前の天皇の上皇・上皇后様が時々アジアの島へ行っては黙とうを捧げておられました。その横で、風雪にさらされた骨が誰のものかも分からないまま残っています。テレビでみると収集されているように見えますが、全然収集されていないです。もう予算もない。フィリピンで問題になりました。遺骨の場所を知っているから、1つの骨にいくら払えと言われ、調べてみたら日本人の遺骨ではなかった。ここまでくると、簡単には収集もできないです。遺族の方は遺骨もない。髪の毛や帽子があればいい、ある人は空の箱です。そうなってしまっている。

そう考えますと、化学兵器のばらまき、撫順・方正の問題も残っている。しかし、皆さんもそうですが、だんだん戦争を忘れていくのです。方正も語り継ぐ人がいなくなります。皆さん方のお孫さんも、方正って何ですか、第二次大戦、それ何ですか、となる。

戦争？　戦争ってカッコいいじゃない！　こういう時代にどんどんなって来ている。日本全体がどちらに進んでいるのか、右か左かは別としても、戦争というものに不感症になり、戦争がゲームのような感覚になっている。米軍基地ではソファに座ってリラックスして、ゲームをしている感覚で、無人爆撃機を遠隔操作して地球の裏側で人を殺している。そこで死んだ人が、日本人と同じような経験をされているのです。ですから、日中関係だけではなくて、戦争というものの残虐さが忘れ去られていく。第二次大戦で皆さんのご両親や皆さんがどれだけ苦労されたか。軍人以上に民間人も苦労した。どんどん忘れていきます。人間とはそういうものです。なかなかその人の立場には立てない。痛みはその本人にしか分からない。他人事です。

あと10年も経てば、方正のこともどんどん忘れていきます。父親母親が死んでも、10年も経てば墓参りにも行かなくなります。お寺が困っています。まだ我々の年代は、少しは墓参りしようと思いますが、そのうちにお墓も皆なくなる。誰も骨を拾ってくれなくなる。お骨を宇宙のロケットで撒いたら2、3百万円かかります。ロケットだろうと川だろうと撒くのは一緒で、それは気持の問題だと思いますが。私は冷ややかに見ています。誰もが自分に降りかかってくる問題です。

私がここで言いたいのは、方正の問題、撫順の問題、遺棄化学兵器の問題、遺骨の問題、どれも同じです。そういう眼で見ないと、どんどん姿は消すでしょう。私が長々と申し上げましたが、戦争を忘れないで欲しい。こうやって語り継いでいく以外に、方法はないんです。

本に書いてあったって、本なんか読みませんよ。簡単な文章なら読むかもしれませんが、面白くもなんともない。そうすると、せめて語り継いでいくという努力をしないと、残念ながら消滅します。

あるいは、これからの日中関係は少し良くなると私は思いますが、今日お話ししたようなことは、間違いなく忘却の彼方へいくでしょう。残念ですね、歴史が消える。そうして間違った歴史のままで時代が動いていく。

歴史とは私に言わせれば、権力者が作る叙事詩です。自分に都合のいいデータだけを集めさせて、歴史を描くんです。米国のジョージ・ワシントンの歴史もいいことしか書いていない。多くの有名人の「私の履歴書」もそうです。あちこちにいいことしか書いてない(笑)。それは当然なんです。自分のやった悪いことを、自らこうやりましたとは書かない。そういう人がいたとしても、自分のことを素っ裸にして全部書く人はいない。人間はそんな動物です。私も書かない。喜んで書きませんよ。そうすると、日本国の歴史も、どの国の歴史も、共産党の歴史も、スターリンの歴史も、中国の歴史も、明の歴史も、清の歴史も、楊貴妃なんて本当はどうだったのか、本当はどうなんだろうと思う。

日本の歴史もそうです。今でもそうです。一所懸命公文書に墨を塗って、墨のないところだけが歴史になっていく、どうなのでしょう。皆さんや皆さんのご親族、関係者が経験した真実の姿を、事実を、伝えていって欲しいんです。

真実を後世に伝えよう

今日私が一番お伝えしたかったのは、これです。できるだけ真実を伝えていきましょう。できる限りやりましょう。これだけです。

撫順も南京も、真実はどこにあるのか。都合の悪いことは消しているのか、分かりません。我々の時代の昭和の歴史もそうです。本当の歴史は、皆さん各々が伝えておかなければならない。また、皆さんが思っていることは真実とは限りません。野口秀世だって、ものすごい女好きだった。彼がもらった賞金は、ぜんぶ女性に使ってしまった。〇〇偉人伝、眉唾物です。そんな立派な人が人間でいるわけがないだろうと思うのは当然の事です。

最近、千円札や1万円札に色々な方が出てきますが、なにか聞かれたくないことをやっているのではないか、と思ってしまうんです。真実は誰かが残しておかないと、きれいごとになってしまう。

日中関係もそうです。現在、非常に難しい問題になっています。トランプさん、彼は正直な人ですが、小中学校のレベルです。米国でもトランプさんが使っている単語は、小中学生レベルだと言われています。好きだ、嫌いだ、バカだ、損だ、得だ、勝ちだ、負けだ、そんな言葉が多い。たまには哲学的な言葉も使って欲しい(笑)。オバマさんがやったことは全部否定している。全否定です。お前は何をやったのか、否定しただけだ。何かやろうと大風呂敷広げても、議会がOKしなければ何もできない。米国の予算は下院議員が握っていますから。その中で、政府は赤字が増えてきている。移民を阻止する壁を作るお金もなくなってきている。メキシコとの貿易も本当はやりたいんです。

最近の米中貿易戦争、このまま行くと、残りの3000億も高関税になりますが、米国の国民の生活物資です。アップルもいずれ対象です。3000億ドル、米国の国民に被害が及びます。非常に難しくなるでしょう。G20の後、米中首脳会談の後です。非常に難しくなります。

それに引き換え、日中には非常に穏やかな風が吹いている。でも、日米の結束が固くなればなるほど、東西冷戦と一緒です、中国は日本と話すよりも、直接米国と話した方がいい。どうせ日本と話しても、日本はトランプさんの所へ行くんでしょう。話しても無駄だ。そうすると、日本には誰も味方がいなくなって行きます。中国とロシアは、基本的には仲

良くできません。5500～5600㎞も国境を接していますから。どこかで必ず問題が起きます。隣同士はダメなのです。インドとパキスタンもそうです。イランとイラクもそう。シリアもそう。陸続きはダメです。独仏は何とかうまくやろうと理性的ですが、独語を話しているところに仏領があり、仏語を話しているところに独領があり、歴史のねじれは抱えたままです。戦争と言うものが作り上げる悲劇です。米中戦争でもつまびらかになるでしょう。

私は習近平さんとは何度も会っていますが、隣国とは住所変更できない、いくら嫌いでも何百年と付き合わなければならない。皆さんも気持ちは分かりますか。隣同士で殺人事件などもありますが、しょっちゅう一緒にいるから嫌になるんです。親子も夫婦も、舅や姑と嫁とか、近くに一緒にいるから嫌になる。いつもニコニコ仲良くなんていきません。「コノ野郎！」となる。たまにしか会わなければいいのですが。人間ってそういうものです。

難しい隣国関係

隣国との関係、韓国、中国、日本。これ、仲良くできないんです。他人は自分の鏡です。「どうも韓国は嫌いだ」と言っていると、向こうも「どうも日本は嫌いだ」と言っている。ニコニコしていれば、あの人はいい人だとなる。すぐバレるような笑顔もありますが、たいていは顔に出ます。中国人が嫌いだという日本人は、向こうも嫌いですよ。中国人が好きだという日本人は、向こうも好きです。

皆さんは中国人とお付き合いされている方が多いと思いますが、きっと中国の方々は皆さんを信用し、信頼していると思います。長い目で見れば、日米をどうするかよりも、日中、日韓をどうするかが重要です。米中の争いもありますが、私が見たところ、中国人は欧米人よりもやっぱり日本人としっくり合うんです。ただ、文化や習慣の違いはあります。靴を脱ぐのか脱がないのかもありますが、遺骨の問題もそうです。

マレーシアで、オーストラリア人の遺骨があった場所には、碑が立っていて、オーストラリアの観光客も来る。日本人の遺骨は野晒し、何年もそのままでも日本人は見向きもしない。遺骨への冷酷さ、全体としての冷酷さは、これはもう文化としか言いようがない。急に冷酷になった訳ではなくて、昔から受け継がれてきたものなんです。

韓国人は、先祖を大事にします。先祖を汚すようなことは、絶対に許さない。夫婦喧嘩もそうです。日本の夫婦喧嘩は近所に聞こえないようにする。「そんな大きな声出して隣に聞こえるでしょ」と。中国人は、アパートの下に降りて来て、私が正しいと、見ず知らずの人に訴えます。大声で、夫婦喧嘩は皆に聞こえるようにやる(笑)。ぼくらの感覚だと、自分たちの夫婦喧嘩は知られたくないでしょう、犬も食わない夫婦喧嘩だから。でも、彼らはそう思っていない。だから大変です。中国人女性と付き合って、別れる時には大騒ぎになります。文化の違いをよく承知した上で、恋愛するなり結婚しないといけません。そういう違いを承知の上で付き合っていく。そうすると、なるほど、これは仕方がないなと分かります。

中国語で米国のことを「美国」、美しい国と書きますが、中国人は米国をいい国だと思っていた。英国や日本は中国を食い物にしたけれど、米国はいい。中国人にとってはやは

り隣国が煩わしい。韓国もそうです。話し合いで耐え難きを耐えて、理解し合わないとならない。北朝鮮のあの方も色々と言われていますが、何が本当かは分かりません。

米中の貿易戦争と言われていますが、40 年前の日米の貿易戦争は今どころではなかった。自動車はハンマーで壊され、ひっくり返されて、あれだけ騒いだのに、米国の自動車産業の今のていたらく。自由貿易をなくして、人為的に関税をかけて、それで産業に競争力がついて強くなるなんて、経済的にあり得ない。

トランプさんが一番心配しているのは、米国の技術が中国に追い抜かれること。米国ではこれは文明の衝突だと言われている。東西冷戦以上に根が深い。白人が、白人以外の民族と、国の存亡をかけて争うのは初めてだ、という言い方も出ている。ということは、米国は絶対に引けない。中国が潰れるまでひけない、そう考える米国の人が増えています。一部の政治家の話ではなくなってきている。非常に危険です。長期的に見ると、通常の貿易の話ではない。本格的に潰すか潰されるか、100 か 0 かで、50 と 50 はないということです。

さあ、それではどうしますか。中国には今 166 万人の科学者がいる。米国は 140 万人、日本は 60 万ほど。つまり、2005 年以降、中国が№1 です。科学者を育てるには 20 年かかる。これから 20 万人以上の差を縮めようとしたら、どれだけ時間を要するのか。米国の覇権が壊れるかも知れない。科学的にも、物理的にも、金融的にも。ただ、金融は圧倒的に米国が強い。ドルと元と、信用・信頼が圧倒的に違う。元はいつ切り下げられるか、いつ中国政府が外国人が作った工場を徴収するか分からない。そういうリスクがある。中国の元は圧倒的にドルに負ける。お金はドルでくださいと言われる。できるだけ中国の国内で需給を完結させれば問題はないと習近平さんは考えている。他の国は困ってしまう。さあ、どうする。これは非常に大きな問題です。

さあ、日本はどうするか

日中関係にも大きな影響をもたらします。もし、米中が真剣になって話をしたら、日本は蚊帳の外です。日本は相手にされなくなります。さあ、日本はどうしますか。

これからの世界は、競争と協調。どちらかではダメです。グローバリゼーションは、競争しながら協調する。競争と協調、これがこれからの世界のキーワードです。

日本と中国も、競争と協調で行かなければならない。米国の真似をして競争ばかりしてはダメです。日本は中国に一方的に負けます。「戦争」してはダメです。先ほどの技術者の数も、160 万人対 60 万人。飛行機の数、戦闘機の数、ビールの消費量、大豆の輸出入量、あらゆるものが負けます。一年の出生者の数、中国は 1500 万人くらいでしょうか、日本は 90 万人。どうやって勝つんですか？日本人はどうしようもない動物だと思うんです。人間の数が減って、経済が成長する訳がないじゃないですか。日本では団塊の世代の人たちがこれから死んでいきます。皆さんごめんなさい、事実です(笑)。量では勝負にならない。では何か？　日本にしかできないことがあるでしょう。アタマです。

米国に勝てるもの。品格とか品性、儒教の精神、平和を愛する心、こういうもので勝つしかない。世界唯一の平和国家。武器は捨てて、殺すなら殺してみろ。思い切ってそこま

でやらないとダメです。力と力で、核爆弾の落とし合いをしたら、地球は滅びます。日本は米国について行かなくて結構。皆で覚悟を決める。

日本は是々非々。競争と協調。平和とアタマで勝負しましょう。役に立たないものに投資しないで、お子さん、お孫さんのアタマに投資しましょう。

私の話は以上とします（拍手）。ご質問ありますか？

（質問）

お話ありがとうございました。隣の人とはうまく行かない。ではドイツはどうだったのか？　なぜ天皇は謝って戦争責任を取らなかったのか？　どう思われますか？

≪丹羽宇一郎≫

非常に長期的な視野で日本と言う国を考えた時に、「象徴天皇」という形をとった。今にして思えば、当時としてはベストウエイだったのではないかと思います。日本が二分割される可能性もあった中での、判断だったと思います。私は上皇陛下に二度お会いしていますが、良く勉強されています。戦争に対して最も反省し、心配しておられるのは平成の天皇です。令和の天皇も、それを見習ってやっていかれると思います。昭和天皇も、平成天皇も、今上天皇も、必ず「平和」という言葉を使います。世界の平和、国民の平和、日本の平和、一番言いたい大事な言葉なのだと思います。

私は時々思いますが、政治家のトップよりも、国民のことを本当に考え、申し訳なかったという気持ちが表れている、非常に立派な方だと思います。美智子さまの影響もあるかも知れません。お二人は非常に平和というものに真剣に向き合われていると思います。これからの日本も、そういう方向へ行って欲しいですね。もう戦争の時代ではない。戦争をやるかやらないか等という議論はやめなさい。平和と自由を求めて、これしかないよと、日本が生きてゆくには。そして、お金は頭脳に使うべきです。軍備に使っても意味がないです。役に立たない。考え方を抜本的に改めて、隣国とも話をしていって欲しい。力ではなく、話し合いです（拍手）。

（質問）

貴重なお話をありがとうございます。トランプさんは中国の共産党が潰れるまでやると言っているそうですが、どうなって行くのでしょうか？　見通しがあればご教授ください。

≪丹羽宇一郎≫

難しい問題ですが、それでは共産党を壊してどうするのか。あの 14 億の民を国としてどうまとめて行くのか。人類史上、誰もやったことがない試みです。何百万、何千万の民を治めて行くのはそれほど難しくはないでしょう。ところが、2 億、3 億でも、EU や米国ですが、難しい。じゃあ 14 億となったら、どう治めて行くのか。どう統治して行けるのか。民主主義で行けるのか。1 億 2 千万の日本でも国会はなかなか進まない。英国のメイさんもジョンソンさんも何千万かの国をどうするかで苦労している。中国の共産党をぶっ潰すって言うけど、それじゃあその後どうするのか？　みんなどこかに逃げたらどうしますか？

14 億の民が米国に押し寄せたら、トランプさんの言う移民どころの騒ぎではなくなります。じゃあどうすればいいのか、を誰も言わない。

中国共産党は独裁でけしからん。じゃあ、どうしろと言うんですか。14 億で貧富の差があって、いいひとも悪い人も、日本の十倍います。どうやってやれと言うのですか。人類史上初の実験です。これがうまく行けば、インドもうまく行きます。米国と EU が一つの国になっても、うまく行くかも知れない。でも今のような状況では、人間の叡智はまだそこまで到達していません。デモクラシーという政治体制は、果たして 14 億に耐えられるのか。6 カ国くらいに分割するしかないかも知れません。本社は北京に置いて、6 つの子会社を作る。経済界でやっている持ち株会社のように。「ユナイテッド・ステイツ・オブ・チャイナ」です。それが恐らく唯一の道でしょう。きっと彼らはやると思います。貧富の差が縮まってこないとできないです。

韓国と北朝鮮は統一できるのか、北朝鮮の GDP は韓国の 2%しかない。人口は約 2 分の 1 です。韓国が 100 を作るのに、北朝鮮は 2 しかできない。これが一緒になったら、韓国人は今日から給料は半分の 50 だと、北朝鮮の人も 50 だと。そうしなかったら一緒に働けないでしょう。そんなことになったら韓国の人はどうなりますか。中国もそうです。少なくても東西ドイツくらいの差じゃないと難しい。東西が統一されて 20 年経ちますが、まだ西と東は 10 対 7 くらいなんです。20～30 年かけて、貧富の差を縮めるまだ作業中です。仕方がないから我慢してくれ、そう言えるようにならないと、14 億は統治できないと思います。

（質問）

私は中国人です。四川省出身です。私は秋葉原で自営しています。日本のゲーム会社から受託して作業を行っています。著作権の問題に巻き込まれて、賠償の話になったのですが、日本の友人から、「とにかく謝れ、芝居でもいいから泣きながら謝れ、相手が納得するまでずっと謝れ」、とアドバイスをもらいました。

戦争の問題も考えてしまうのですが、日本はずっと謝って、いつまで謝るのかと。中国はいつまで謝らせるのかと。丹羽様はどう思われますか？

≪丹羽宇一郎≫

謝ればいいという問題ではないですね。謝れば済む問題ではない。両国の間で、企業同士で、信用と信頼をどう作れるかということが大事です。嘘をつかない、騙さない、約束を守る、ということは、1 年 2 年ではなくて 5 年 10 年かかっても、本当に信頼できる相手と手を組んで仕事をしなさい。我々日本の企業も、中国へ行って業績を残すためには、中国の人々の信頼を得なければダメです。中国の企業が日本で商売する場合も同様です。お金で買えないものは、信用・信頼です。中国と日本も、信用・信頼が築けなければうまく行かない。国も企業も同じです（拍手）。

一殺多生―その身を命にかえて

―「黒川開拓団」にみる女性たちの悲劇―

エィミ ツジモト

2018 年初頭、わたくしは、独自の宗教観を信条に、希望に胸を膨らませて満州に入植した開拓団の敗戦後の悲惨な道行を描いたルポルタージュを上梓した。完成まで相当の歳月を要したが、調査・取材の過程で、敗戦後の満蒙開拓団におけるおぞましい実態、特に女性たちのおかれた劣悪な環境が次々と浮き彫りになって、驚愕した。

「性接待役」に差し出された未婚女性たち

開拓団が敗戦を知ったのち「満州人」からの攻撃に恐れをなし、あるいは８月９日に始まるソ連兵の侵攻に対し女性として「その身」を守るべく死に追い込まれていった事実である。いうまでもなく、ソ連兵の暴行は許しがたい。なかでも、今も心を揺さぶられるのが、岐阜県で編成された「黒川開拓団」における女性たちの悲劇である。

同開拓団は 1941 年 4 月から 600 人近くが吉林省・陶頼昭（とうらいしょう）の駅近くの開拓地に入植していた。だが、敗戦によって状況は暗転。帰国のめども立たず、食料も尽きる最悪の環境のなか、暴徒と化した「満州人」の逆襲に怯える日々。さらには（陶頼昭）駅付近にまで進駐してきたソ連軍の兵士たちが夜な夜な「女性」を求め、性暴力を繰り返すようになる。その現実になす術もないまま途方にくれた開拓団幹部たち。そこへ、追い討ちをかけるかのように悲劇的な一報がもたらされた。30 キロ以上離れている隣の熊本県来民(くたみ)開拓団 270 名余り集団自決の報である。唯一の生存者・宮本貞喜さんは団長の命令によって来民開拓団の最期を知らせる役割を担った。満州人の襲撃をかろうじてかわし、瀕死の重傷を負いながら奇跡的に黒川開拓団までたどり着いたのだった。

彼らの惨状を聞かされた黒川開拓団の幹部男性たちは、ついに苦渋の決断をする。ロシア語に通じる日本人の仲介を通して、帰国の日まで暴徒や一般ソ連兵の性暴力から守り、さらには食糧難からの救済をソ連軍側に要請したのである。ただしその見返りに開拓団の女性たちを「性接待役」として差し出す、という異例の申し出だった。しかも「未婚の女性」たちを、である。「既婚女性」たちを差し出さない理由は、彼女たちの夫は応召され、国に仕えているという、ある意味国民としての義務をすでに遂行しているという観点からである。男性幹部たちによって選出された「接待役」は 18 歳以上だったともいわれ、それより若い女性は「接待」後の洗浄係やその助手を担っている。若い女性たちを「防波堤」に開拓団が生き延びる手段を模索した結果の対策であった。

黒川村で聞いたこと

わたくしは2019年の初秋、黒川村を訪れた。彼女たちを待ち受けた非業の日々をなんとしても聞き届けておきたかったのだ。かつて、ソ連兵たちの「慰安」を強いられた女性たち。敗戦の翌年、無事に帰国を果たして故郷の黒川村に帰還した。現在存命の女性はわずかに2名。しかも、黒川村在住ではない。だが、会っておきたい人がいた。当時、性行為のあとの洗浄を手助けした女性の一人、安江さんである。インタビューの一部をここに記す。

「８月に入ってまもなくだったと思うの。正確なことはわからないのだけど、母が、まもなく集団自決をするから覚悟しておきなさいって。私は五人兄弟の一番上だったのでね。そうしたら、数日たって今度はいきなり、お前はお風呂を炊きなさいって言い出したの」

安江さんは、てっきり自分たちが入浴できるものだと喜んだ。だがそんな彼女を母は厳しく諌めた。

「娘さんたちが、私たちを助けてくれるの。だから彼女たちが入る風呂なんだよ」

性接待を強いられた後、女性たちは医務室のような部屋で、かつて軍医が開拓団に残した「医薬品」のなかから兵隊用のうがい薬を薄めて瓶に入れて上から吊るし、ホースを通して「膣」を洗浄するのだった。

―軍医がされたのですか？

「いいえ、犠牲になられる娘さんたちの一歩手前の17歳の娘さん二人がされていたんです。それからお風呂に入られるんです。なかにはコンドームを使う兵隊さんもいて、接待の娘さんはそれがなんだかわからないんですね。洗浄するときになって初めて気づいたりして。でも、ソ連の兵隊さんが守ってくれたおかげで助かりましたよ」

安江さんは、風呂たきの仕事に追われていた。わずか11、２歳であったが、しばしば彼女たちの姿や洗浄の光景を目にしたという。

それまでは外に出ることも許されなかったが、ソ連軍の護衛が開始されるようになったおかげで外出できるようになって、開拓団員は感謝していたという。命を守るために、貢物として若い女性を差し出すことで、開拓団を守ろうとした幹部たち。

「なんとしてでも、集団自決を避けるためにですよ」

若い子を差し出す発想が、開拓団のリーダーの中から出てくる状況。そうなれば、性暴力ではなく『性奴隷』さながらの最悪な状況である。一時的にせよ、命を守るため、集団自決を選択肢に入れないためには已むを得ず、としたのだった。

「集団自決かあるいは500人の命を守るか、この二つに揺れる幹部たちに激しい葛藤はあったはずです。だが差し出した……のです」

―そうなるとこれは、性暴力ではなく、『性奴隷』ですね。

「そう、そういうことです」

安江さんは、強くうなずき同意した。

国策に翻弄された人々

国の政策によって、開拓民たちは移民として送り出された。しかし、敗戦によって想像すらしなかった彼らの末路。同じ村から移住した人々と共に生きて母国に帰るため、『性奴隷』という選択肢以外に、彼らに道はなかった。

仏教の世界では、「方便教」という教えがある。

その昔、釈尊が悟りを開く前の「菩薩」の身であったとき、彼は船乗りの長であったと言われる。自らの「勘」で、船内に一人の泥棒が潜んでいることを察知する。そして、その泥棒と思しき人物は、乗客が寝静まる深夜に全員を殺して彼らの所持品を奪おうと企んでいた。船長たる釈尊はこの難局にいかに対処すべきか苦慮した。見過ごせば乗客の命はない。同時に彼自身が罪を背負うことになる。逆に、泥棒の存在を乗客に告げたとすれば、乗客たちは「泥棒」を殺してしまうに違いない。その結果、乗客もまた「殺人」の罪を負う羽目になる。この難局を前に、乗客や泥棒に対する慈悲心の配慮として、釈尊は自ら「泥棒」の命を奪う決意をする。そして、自ら殺人の罪を背負ったのである。こうした出来事から、やがて凝縮された形で「一殺多生」という概念が生まれてきたのである。

これは単に仏教者としての捉え方であると思われがちだが、実はそうではなく、この内側に普遍的な人間の本質が潜んでいるのである。

人が危機に瀕した際、「全員」を救いたくとも「状況」がそれを許さないほどの極限に追いやられたとき、指導者たちはいかなる行動に出るのか。ここが焦点となる。生きて辱めを受けてはならずと「全員自決」を迫られ。まさにこれを実践したのが、黒川に悲劇を伝えた熊本「来民開拓団」であり、「黒川開拓団」幹部たち３名（安江さんの証言）の決断であった。

今にして思えば、苦渋の決断を下した幹部たちの姿勢、つまりいかに「女性」を軽んじたかの事実は批判して余りあるだろう。しかし当時の切迫した情勢から、決してたやすい決断ではなかったことは十二分にうなずける。頼みの関東軍に置き去りにされた多くの開拓団責任者たちが、母国へ帰るために苦慮のなかから若い女性たちを「防波堤」にして難局を乗り切り、無事に帰還した例はある。だが、旧「黒川開拓団」の女性たちに再び「苦難」の日々が待ち受けているなど誰が予想したであろうか。

再び苦難の日々

ようやく『性奴隷』という地獄から自由の身になり、安堵して故郷の村へ戻っていった彼女たちを待ち受けたのは、過酷にも、村人たちの指弾の目であり、屈辱にさらされつづけた戦後を生き抜かねばならなかったことであった。満州では若さゆえに「性奴隷」を強いられ、帰還してのちは開拓団員を通して知らされた事実に臆した村人たちによる村八分的な「二重差別」は、戦前戦後の日本がいかに「女性」の立場を軽んじていたかを証明するに余りある。

さらに驚くのは、戦争終結後もなお、先に指摘した「一殺多生」の概念が国をあげての策略となっていくことである。再び女性たちがその「犠牲」となったのだ。占領軍のアメリカ兵が日本に上陸するその以前から、日本政府および当時の警察隊は「性接待所」を設立し、「新日本女性」という美名の下、敗戦によって日々の生活に追い詰められた地方の若い女性たちを中心に集めていった。多くの日本女性たちの貞操を守るには「防波堤」が不可欠であるという当事者たちの弁明は奢りも甚だしい。それゆえに少数の女性たちが犠牲を強いられていったのである。これは、まさしくかつて旧満州での「黒川開拓団」の拡大版と言っていいだろう。なお、アメリカ軍進駐ののち、本土のアメリカではこのような「性接待所」の存在が明るみに出て、本国の家族たちが激しく抗議して、やむなく閉所へと追い込まれている。しかしながら、次には「闇」の接待所が多く見られるようになっていった。

仏教による「方便教」によって、やがて「一殺多生」という思想が生み出されてきたことは先に述べた。これは先の戦争において、日本軍が中国大陸に侵攻した際には大いに生かされてきた。その証拠として次の声明文が存在する。

これは 1937 年 7 月 28 日、超宗派組織「明和会」によって発表されたものである。

「東亜永遠の平和を確立せむが為に、仏教の大慈大悲、発しては摂受となり。又折伏となる。已むに已むを得ずるの大悲折伏一殺多生、これ大乗仏教の厳粛に容認する処である。＜中略＞従来、白人本位人類不平等の人類史に一代転機を与へ、世界史の進行中、邪道よく正道に転向せしめて、新文明建設、真の平和人類の幸寧を表現すべきである。如上優大なる世界観に立って真実なる日支親善を実現することこそ、大乗仏教徒の使命であり、責任である（注１）。＜中略＞大体に、如何なる理由があっても絶対に戦争を避けるのが仏教の道であると観てゐるのが支那の仏教徒であり、理由のある戦争は進んでやってこそ仏教の大慈大悲に叶ふ所以であるといふのが日本の仏教徒である（注２）」

これは当時日本の「国体」にかなうように、「戦争と仏教」の関わりを教理として正当化させ、国民に理解を求めたものである。だが、その張本人たちは、理由ある戦争の犠牲者となった旧満州の開拓団員、特に凄惨な戦後をおくらねばならなかった女性たちには何ら責任のありかを示そうとはしていない。

仏教の指導者たちが言う「理由ある戦争」によって命を差し出したのは、戦場で戦った男たちだけではない。女性や子供たちにも大きな犠牲を強いた。中でも、満州の開拓団で国策に励んだ女性たちが被った大惨禍、その悲劇性は類を見ない。さらに、胸に迫るのは敗戦直前ソ連軍の侵攻によって何千という女性や子供たちが「集団自決」に追いやられていったこと、である。日本国内では敗戦の色が濃くなるにつれ敵国の「鬼畜米英」といったデマゴギーはエスカレートの一途をたどり、その恐怖感が国民を「一億火だるま」の覚悟へと駆り立てようとしていた。

彼らは、ともに寄り添い、やがて「死」への道行きに心を一つに合わせていく。なんと、痛ましいことか。戦争で追いつめられるのは、いつだって女性たちなのである。そうしたなか、極めて特殊な「悲劇」が隠されていた旧「黒川開拓団」に着目した。

一方、「如何なる理由があっても絶対に戦争を避けるのが仏教の道」とする中国の仏教者たちがいた。残留孤児たちに寄せた長年の姿勢を見るにつけ、その実践性が証明されている。

決して忘れてはならない歴史

旧「黒川開拓団」の史実が明白となったのは、ここ数年のことである。

改めて思うのは、彼らが戦後タブーにしてきた事実の背景には、戦争中の出来事であったこと、誰もがあのときは正常でなかった、だからああする以外なかったのだという功罪相半ばする弁明、は満州を出るまでは許されてよいであろう。しかしながら、晴れて帰国してのち、命を救われたはずの者たちが、生きて帰った「彼女たち」を社会の隅に追いやり、『性奴隷』として防波堤になった彼女たちを、帰国が実現してのちまで「無力化」させた罪は大きい。だからこそ、その身を捧げた 12 名から 15 名と推測される女性たちの犠牲を「性接待」などと位置づけることを許してはならない。少数の女性たちを生贄に多くが生き延びた―これぞまさに「一殺多生」。

日本と旧満州のはざまで翻弄された若い女性たちの「純潔」が、「歴史」の中で忘れ去られることはあってはならないし、「記憶」から単なる「記録」になっていくことなど決して許してはならない。

間違ったことに声を上げるという姿勢は、母国日本においては今なお根づいていないようである。こうした男たちの振る舞いは、ささやかな権力を盾にして品性のかけらもないほどの「恥辱」である。しかも、戦争が終わり平常時に戻ってなお、彼女たちを「二重差別」に追いやったその心根は、人間の愚かさや冷酷さが生み出した悲惨な戦争の現実とはいえ、現在に通じるものがある。なぜならば、戦争に見られるように人が極限状況におかれること自体が問題の始まりであって、わたくしたちは、二度とこのような状況を生み出さない社会を形成しなければならない。そのような新たな社会が到来することによって、自らの「貞操」を投げ出し、開拓団の命を守り抜いた「乙女たち」の潔さが、後の世まで伝えられていくであろう。わたくしたち女性は（心ある男性も）、この義務を果たす責任があるといっても過言ではない。

注（１）（2）「林屋友次郎・島影盟『仏教の戦争観』大東出版社 1937 年、Ｐ４、Ｐ７」

（エィミ ツジモト：国際ジャーナリスト。アメリカ・ワシントン州出身の米国日系４世。世界各地に在住した日系移民の歴史などを執筆。著書『消えた遺骨−フェザーストン捕虜収容所暴動事件の真実』、『満州天理村「生琉里の記憶−天理教と７３１部隊」、共著に『漂流するトモダチ−アメリカの被ばく裁判』などがある）

満蒙開拓平和記念館「セミナー棟」完成の報告と御礼

寺沢 秀文

日頃は当誌読者の皆様方を始め多くの皆様方より満蒙開拓平和記念館への心温まるご支援、励まし等頂いておりますことに対し厚く御礼申し上げます。

さて、この度、当記念館としても開館以来の念願であった新たな「セミナー棟」が完成いたしました。セミナー棟の実現に向けて尊い浄財をお寄せ頂いた皆様を始めご支援、ご協力、ご尽力頂きました全ての皆様方に厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

２０１３年（平成２３年）４月の開館以来既に６年半を経る当館ですが、開館時からの課題として館内が狭く、特に団体の皆様にはご不便をおかけする等してきました。また、若い皆さんにも満蒙開拓の史実を通じて戦争の悲惨さ、平和の尊さを学び、明日の平和のための教訓としていって頂くための拠点としたいという当館趣旨からも、地元等学校関係の平和学習授業、あるいは県外からの修学旅行の受け入れ等のためにも一定の人数を収容出来る館内スペースの確保の必要性は開館以来の課題でもありました。これまでも４０人以上での団体や県外からの修学旅行等が来られても、少し離れた阿智村公民館をお借りしたり等とご不便をおかけしてきました。そのようなこともあり、開館５周年を迎えた昨年春にセミナー棟の建設事業に取りかかることを決断、以来、建設資金の確保等に向けて募金活動を展開したり、クラウド・ファンディングの導入等も実施してまいりました。

民間運営施設でもあり、「時期尚早ではないか」、「背伸びし過ぎではないか」等のお声もありましたが、しかし、若い皆さん等にも平和を発信していくことの重要性等からしてもセミナー棟の建設は必須との思いから敢えて取り組んだこの増築事業でした。そして、記念館を支援して下さる多くの皆様方よりの多くのご寄付等をお寄せ頂く中で建設の見通しもつき、今年４月に着工、半年間の工期を経て、９月末にはほぼ完成させることが出来ました。セミナー棟は床面積２９７．４５㎡(８９．９７坪)、館と同じく木造平家建にて、１２０人収容可能なセミナールームを中核に、映像上映室(約４０人可能)、ミニギャラリーホール、トイレ等が供えられています。設計は本館と同じく新井優一級建築士、施工も同じく地元の吉川建設株式会社に担って頂きました。本館と一体感ある木造建築の良さを活かした建物で、多くの皆様から「良いものが出来たね」と言って頂いています。

去る１０月１９日には竣工式が質素な中にも厳かに執り行われ、ご関係の皆様等にセミナー棟の完成を共に祝って頂くことが出来ました。また同日午後にはセミナー棟竣工記念イベントとして、ドイツからのゲストの皆さん等をお招きして「ドイツにおける移民・引き揚げ」等についてのシンポジウムも開催しました。また竣工とほぼ同時にセミナー棟の利用も始まり、竣工式の一週間前には県外からの修学旅行の利用第一弾として、毎年来て下さる大阪府の寝屋川第５小学校の皆さん約１２０人が来館してくれる等してセミナー棟完成に花を添えてくれました。以降、多くの団体の皆さんにご利用頂いています。

ご心配頂いた建設資金については、開館以来、節約に節約を重ねて内部留保してきた自己資金をベースとし、これに多くの皆様方からの尊いご浄財をお寄せ頂きました。更には今回は行政からの公的補助は仰がないつもりでおりましたが、「行政としても是非支援し

てあげたい」と言う有り難い長野県、地元の阿智村等からの公的助成も頂けることとなり、これら等を含めて建設費約９千万円を確保することが出来ました。本当にありがとうございました。

こうして皆様の温かいご支援、ご尽力等によりセミナー棟を無事完成させることが出来ました。しかし、竣工式での館長挨拶の際にも申し上げたことですが、６年前の開館時と同様に、こういった施設建物の完成自体が目的、そしてゴールではなく、ここから何を発信していくかこそが大切であることは言うまでもありません。セミナー棟も出来上がり、当記念館のまた新たなスタートとなります。満蒙開拓という歴史は明日の平和を学ぶための大切な地域の歴史財産であり、官民協力し、地域一丸となって取り組んでいくべき歴史伝承でもあると思います。

２０１３年の開館以来、様々な形で満蒙開拓の史実の語り継ぎ、調査研究等に励んでまいりましたが、その中で改めて「満蒙開拓」の史実の学びを通じて得ることの出来る明日の平和のための教訓の多さを痛感すると共に、それにも関わらず如何に戦後この歴史の振り返り、取り組みが閉ざされてきたかということでした。開館以来、多くのご来館者の皆様方に接して頂きましたが、中高年の皆さんも含めて「こんな歴史知らなかった」、「こんなこと学校では教えてくれなかった」と言われる方の多さに改めて驚きました。国策として押し進められ、結果として多くの犠牲を出してしまった「満蒙開拓」と言う歴史、そして日本側の「被害」だけでなく現地の人々等への「加害」等も含めて、向き合うことの難しい歴史でもあった「満蒙開拓」の歴史に向き合うことは、二度と同じ犠牲を出さないためにもきちんと向き合っていかなくてはならない歴史なのだと言う思いも更に深まりました。そして、「満蒙開拓」に関わって亡くなられた多くの犠牲者の皆さんのためにもこの歴史からしっかりと学び、明日の平和のために活かしていかなくてはならない。その道のりは決して楽ではありませんが、しかし、困難の繰り返しの中で明日の平和を開拓していく、私たちもまた明日への平和を耕すための「平和の種まき」を続ける新たな「開拓者」自身でもあるのだと改めて思います。

今回のセミナー棟の完成を機に、更に当記念館を満蒙開拓の歴史を若い皆さんと共に学ぶ「次世代との学び」の場、未来に向けての「平和の種まき」の拠点として充実させていきたいものと願っています。これからも伊那谷から世界に向けて平和を発信する「小さくともキラリと光る記念館」を目指して、地域の皆様と共にその維持運営に励んでまいりたいものと思います。

今後とも当記念館へのご支援ご協力の程、どうか宜しくお願い申し上げます。遠隔地ではありますが、皆様方におかれましても是非とも新たなセミナー棟を見に来て頂ければ幸甚です。

最後に今一度厚く御礼を申し上げ、誌上にて誠に恐縮ながらセミナー棟完成の報告と御礼とさせて頂きたいと思います。本当にありがとうございました。

令和元年１１月吉日

（てらさわ・ひでふみ： 1953年生まれ。満蒙開拓平和記念館・館長。不動産鑑定士の傍ら館長業務に奔走。元開拓団跡地などを訪ね歩き、両親が暮らした吉林省水曲柳などを20数回訪れる。現在、長野県松川町在住。）

［ 完成した「セミナー棟」（手前）］（2019. 11. 4撮影）

［ 「セミナー棟」の内部（１２０人収容可能のセミナールーム）］（2019. 11. 4 撮影）

中日新聞（2019年10月20日付朝刊）より転載

満蒙の歴史忘れず 平和の種まきに

阿智 記念館にセミナー棟竣工

竣工式であいさつする寺沢館長＝いずれも阿智村の満蒙開拓平和記念館で

満蒙開拓の歴史を伝える満蒙開拓平和記念館（阿智村）の新館セミナー棟竣工式が十九日、同所で開かれた。同館でガイドを務める松川高校ボランティア部の生徒らも参加。新たな平和教育の拠点として歩みを進めていくことを再確認した。

セミナー棟は、修学旅行生や平和教育授業などの受け入れ態勢を強化するため四月に工事着工。百二十席のセミナールームと四十二席の映像ルームの二つがあり、床面積は約二百九十七平方㍍。総事業費は九千二百五十万円。

寺沢秀文館長（六七）は式典で「施設の完成がゴールではない。ここから何を発信するか、満蒙の歴史を忘れずに平和の種まきをすることが大切」とあいさつ。松川高ボランティア部の大平一真部長（一七）は「平和の種をまくメッセンジャーとして、使命と誇りをもって活動を続けていきたいと、身の引き締まる思いを新たにいたしました」と述べた。

式典後、記念館で語り部を務める原千代さん（八七）は「満州があったことくらいは子どもたちには知っていてほしい。松川高の生徒たちが記念館に関わってくれることは、うれしくて胸がいっぱいになる」と語った。

独の引揚者訴え シンポ開催

戦争 二度と起こさない信念を

元開拓団員らと握手するヘルガさん（右）

この日はセミナー棟完成を記念したシンポジウム「日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後」も同館セミナールームで開かれた。上智大の木村護郎クリストフ教授らを招き、東欧からのドイツ人追放・避難の歴史と満蒙開拓について、各国がどのように向き合っているかなど意見交換した。

ドイツ人が東欧から追放・避難を余儀なくされた歴史的背景を木村教授が説明。その後、チェコからの引き揚げ者ヘルガ・エングスフーバーさん（八四）らが自身の体験を語った。

ヘルガさんは一九三五（昭和十）年、ドイツ生まれ。三九年にチェコに移住した。終戦となり、ソ連軍の監視の下、四歳と六歳の幼いきょうだい二人とともに、毎日約十五キロを歩いて国境を目指したという。

ヘルガさんは「戦争はあってはならない。二度と起こさないためには信念を持つこと。感傷的に聞こえるかもしれないが、自分自身をささげるほどの覚悟が必要」と、強いまなざしで若い世代へ訴えた。

（二神花帆）

下段のシンポジウムに招かれた木村護郎クリストフさんはエスペランティストであり、本誌によって満蒙開拓平和記念館の存在を知られた。本誌にも何度も寄稿されていることは会員、読者ならご承知かと思う。

胡暁慧名誉会長一行来日

ハルピン市日本人残留孤児養父母連絡会名誉会長の胡暁慧名誉会長を団長とする訪日団が来日し、2019 年 10 月 10 日、方正友好交流の会と日中科学技術文化センターへの表敬訪問があり、大類と社団顧問の凌星光が応対した。一行の来日に関しては、日中の草の根交流の推進のため当社団が招聘状を発行した。胡さんら一行には、黒竜江出版集団・副総経理で黒竜江省出版協会会長の丁一平女史、また徐士蘭さんの孫、また未認定の残留孤児、白凱躍氏らも参加された。一行はその後、中国帰国者・日中友好の会の理事長・池田澄江さんらを訪問して帰国した。

また次頁の朝日新聞、読売新聞の記事は、養父母を取材して記録を残そうとする活動について朝日の平井良和さん、また読売の東慶一郎さんが書かれた記事である。お二人とも瀋陽支局長として活躍され、方正の会の事務局に私を訪ねていただいたこともある。今回はハルピンに出向き、胡さんも取材されて書かれたのである。（大類）

胡さんから感謝状をもらう。胡さんを挟んで（右）凌星光センター顧問、（左）大類

後列左端が丁女史、二人おいて右が石さん、その右隣りが白さん

朝日新聞（2019年8月27日付朝刊）より転載

世界発 2019

残留孤児 養父母の思いは

育てた記憶を証言 若者が撮影

終戦の混乱期に旧満州（現在の中国東北部）で肉親と別れ、孤児となった日本人を引き取った養父母たちの思いを、電子記録や動画に残して後世に伝える取り組みが中国・黒竜江省で進められている。戦後74年が経ち、関係者の高齢化が進む中、若い世代が記憶をつなぐ役割を担おうとしている。

（ハルビン＝平井良和）

「自分が産んだ子と同じ」

「道ばたに遺体がたくさん重なっていて。そばにいた4～5歳くらいの子を抱えて医者にみせたら『飢えだ』って。置いていくことなんてできなかったよ」

動画のなかで、90歳を超える女性が、自らが育て、後に日本へ帰国した孤児の記憶を語る。

「ご飯を食べさせて服もつくってあげた。どこへ行くのもいつも一緒だった」と話す。別の養母は、「会いたいですか」と問われると「会いたくないわけがないよ。自分が産んだ子と同じだから」と答えた。

動画は昨年10月から、ハルビン市にある出版社「黒竜江東北デジタル出版伝媒」が、ホームページ「中国養父母記憶館」で公開している。残留日本人孤児の養父母の思いを伝えようと、社員が中国各地で取材した。

作業を担うのは、20～30代の若手社員だ。撮影は時に1時間を超えるが、公開用には数分程度に編集する。中心になって取り組む李政さん(32)は「短い動画の方が若者にも見てもらいやすい。思いを肉声で伝える動画には、文献資料とは違った人の心を打つ力がある」と話す。

戦後70年の2015年、社員らが、訪中した残留孤児たちの話を聞く機会を持ったのがきっかけ。孤児と養父母の思いを伝える活動に、会社として取り組むことになった。

戦後、多くの残留孤児が育てられたハルビン市では、若い世代にも存在は知られている。ただ、養父母の気持ちに触れたことがある人は少ない。

李さん自身も、この活動に関わってから初めて養父母の話を聞き、衝撃を受けた。「（敵国だった）日本の子を育てる決意をし、育てた子は日本へ戻ってしまった。それでも、悔やんだ人はいない。戦争が大きな傷をもたらした中で、国境を超える愛を持つ人がいたことをもっと広く伝えたい」

ホームページでは、日中双方で記憶を共有したいと日本語のページ（http://www.chinayfmz.com/index.html）も設けている。

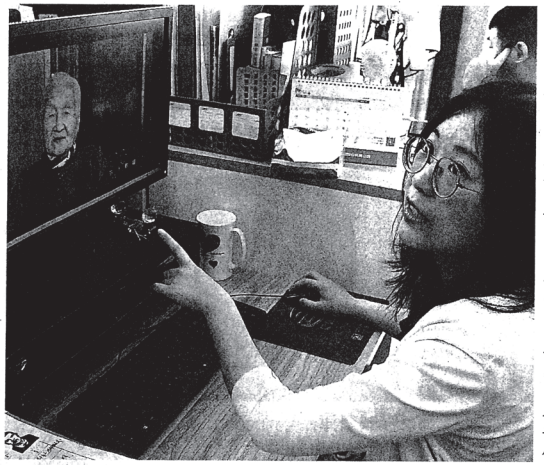
課題は時間との闘いだ。養父母の多くが90歳を超える。これまでに4人の養母と会ったが、高齢で話ができなかった人もいた。会いに行こうとしている間に訃報が届いたこともある。

李さんらに養父母を紹介している「残留孤児・養父母連絡会」の胡暁慧会長(75)は「彼らの声は、歴史から消えていく危機にある」と話す。

残留孤児は日本政府による認定者だけで2800人以上。養父母は5千人を超えるとみられるが、公開された統計はない。亡くなった人も多く、養父母の生活支援に取り組む同会でも、連絡がとれる人は20人ほどにとどまる。

李さんらは、同会が30年以上かけて集めながら、資金不足などで書籍化できていない養父母や残留孤児らの資料を電子化し、保存する作業も進めている。

作業に加わる曲暁輝さん(28)は「若い自分には、デジタル技術を使ってできることがある。次の世代に伝えていくための力になりたい」と話している。



養父母の思いを伝えるホームページの編集を担う曲暁輝さん＝7月、中国・ハルビン市

現地と交流 次世代受け継ぐ

帰国した残留孤児の中にも、養父母の思いを伝える役割や、現地との交流を次世代に託す動きがある。

6月半ば、ハルビン市などを訪れた神奈川県在住の残留孤児らでつくる「中国・養父母謝恩の会」の訪問団は、参加者のおよそ半数が孤児の2世だった。

17年にも訪れたが、その時は1世だけ。今回、2世代に参加を呼びかけた菅原幸子さん(74)は「私たちに代わり、助けてくれた人たちへの感謝の気持ちを伝える役割を担ってほしい」と話す。同会の1世の平均年齢は77歳になる。

参加者は養母や支援者らとの交流会で感謝を伝える歌や踊りを披露し、黒竜江省方正県にある養父母たちの公墓を訪れた。

2年前に参加した残留孤児の父親の後を継ぐ形で訪問団に加わった華末紀さん(42)は、公墓がたつ森で孤児や養父母の歴史を改めて聞き、涙があふれた。

華さんが生まれた時には、父を育てた養父母はもう亡くなっていた。自身のルーツである残留孤児については本や映画で学んでいたつもりだったが、今回、別の孤児を育てた養母と会ったことで、「私たちの命は養母がくれたものだ」と強く実感したという。

公墓に手を合わせた華さんは「父に代わって感謝を伝えた。私には伝える使命がある。自分の子どもたちも必ずここに連れてくる」と話した。

読売新聞（2019年9月1日付朝刊）より転載

子育ての記憶 証言をサイトに

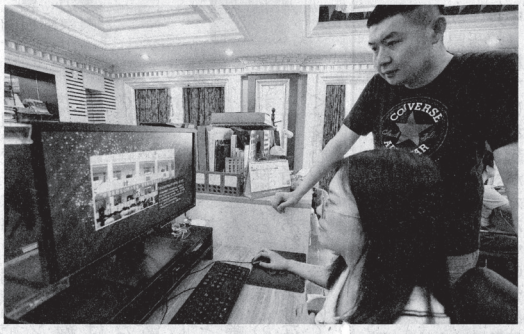
残留孤児 養父母の愛

中国の出版社 取材・制作

中国黒竜江省の出版社が、「中国養父母記憶館」と題するホームページの制作を進めている。終戦後に満州（現中国東北部）などに取り残された中国残留孤児[1]を育てた養父母のインタビューを動画などで紹介するものだ。戦後74年がたち、当事者の話を聞ける機会が少なくなる中、編集者たちは「可能な限り取材を続け、貴重な証言を残したい」との思いで取り組んでいる。

（黒竜江省ハルビン　東慶一郎）

中国人養母にインタビュー取材をする李政さん（右）＝提供写真



ホームページの更新作業を進める李政さん（右）と曲暁輝さん（7月、黒竜江省ハルビンで）＝東慶一郎撮影

■苦にならなかった インタビュー動画に登場

する養母の一人は、長年の苦労を物語る深いしわが刻まれた顔を記者に向け、飢えて動けなくなっていた4、5歳の孤児を連れて帰った当時を振り返った。

「育てるのは全く苦にならなかった。この子を入れて子どもは全部で8人いた。食べ物があれば皆で一緒に食べて過ごしてきた」と表情を緩めた。

ホームページを制作しているのは黒竜江省ハルビンの出版社「黒竜江東北デジタル出版メディア」。

戦後70年の節目だった2015年、それまで文字の資料が主だった養父母の証言について、表情や声色も含んだ動画の記録を残そうとの声が社内で上がったのをきっかけに、プロジェクトを始めた。会社は書籍のデジタル化を主な事業としているが、記憶館は完全に非営利目的だという。

■90歳超え

17年5月からこれまで、黒竜江省、吉林省、北京などに取材班を派遣し、6人の養母にインタビューした。いずれの家庭でも養父はすでに他界していたという。養母も全員90歳を超えており、家族に証言の内容を補足説明してもらいながらインタビューを進めるケースもあった。

取材に当たった出版部主任の李政（リーチョン）さん(32)は、「養母の多くは、大切に育てた子どもを日本に帰国させた時のつらい思い出を涙ながらに語っていた。こうした養父母についても中日両国の人たちに知ってほしい」と話す。

ハルビンで養父母の支援活動を行っている胡暁慧（フーシャオフイ）さん(75)は、「養父母たちは、自分たちの食料も不足する中、当然のように日本人孤児を育てた。こうした歴史的な記憶を保存する重要な取り組みだ」と評価する。ホームページには、先の大戦を巡る歴史認識で、日本側が中国へのしょく罪の気持ちを忘れないようにさせる目的もある。

■健在11人のみ

昨年10月以降、編集を終えた3人分の動画が公開された。日本に帰国した残留孤児やその2世のインタビュー動画も掲載されている。動画のほか、中国東北部への日本人の入植や敗戦後の日本人収容所に関する歴史や残留孤児についての日中の報道なども、日本語と中国語で紹介している。今年7月下旬にはデザインを刷新し、スマートフォンでも見やすくした。

最大の課題は、残された時間が多くないことだ。

各地の養父母支援団体によると、養父母はすでに多くが鬼籍に入った。今年3月にも1人が他界し、健在な養父母は11人となった。李さんとともに編集作業に当たる曲暁輝（チューシャオフイ）さん(28)は「養父母を直接取材できる時間は限られており、証言を残す作業は今しかできない」と危機感を感じている。

記憶館のURLはhttp://www.chinayfmz.com/

[1] **中国残留孤児**　1945年8月の旧ソ連の満州（現中国東北部）侵攻などによる混乱の中、家族と離ればなれになり、取り残された日本人の子どもを指す。厚生労働省によって認定された人数は2818人に上る。中国の養父母の下で育ったが、72年の日中国交正常化を受け、80年代から日本への帰国が進んだ。今では9割以上が永住帰国している。

中国黒竜江省方正県の「中日友好園林」の紹介

石　金楷

「中日友好園林」は中国における唯一の国際的園林である。その園林は「北方の華僑の故郷」と呼ばれる方正県にある。園林の南は風景が綺麗な砲台山にあり、北は川の水が奔流している松花江にある。中国の国内だけでなく、海外でも著名な旅行の観光地である。

「中日友好園林」の前身は「方正地区日本人公墓」であり、敬愛なる周恩来総理の許可によって 1963 年につくられたものである。日中国交正常化の後、特に 1980 年代以降、日本の「水稲栽培の王」とも呼ばれる藤原長作先生が黒竜江省科学委員会の要請で方正県に行って寒冷地での稲作技術を伝達した。これは日本政府と民間団体が方正県との友好往来の歴史の始まりとなった。そのあと、日本政府と民間から 20 個以上の団体が方正県へ友好訪問し、旅行観光や墓参りをした。

1990 年代以降、方正県と日本政府や日本の民間との交流の発展拡大に伴い、方正県人民政府は「方正地区日本人公墓」の建設に関する資金を拡大し、その管理も強化した。日本政府や日本の一部の民間団体も「方正地区日本人公墓」の関連建設を支持し、資金も提供した。1995 年、方正県は「方正県地区日本人公墓」を「中日友好園林」に改称することを批准した。

「中日友好園林」は日中両国の人民の友情の象徴であり、方正県と黒竜江省の対外交流の架け橋であり、日本の植民地侵略の証であり、中国と日本の両国の人民に「歴史をしっかりと覚え、平和を大切に」という考えを教育する重要な基地である。

方正県地区日本人公墓

1945 年 8 月 15 日、日本の敗戦後、中国の東北地方にいた日本の開拓団の老人、女性、子どもは団体で移動し、日本帰国の道を探した。佳木斯に近い樺南、樺川と湯原県などの開拓団は連日、山を越え河を渡り移動し、林口と依蘭県の開拓団と合流し、方正県を経て珠河県（現在の尚志市）に行って、ハルビン市から日本帰国をめざした。彼らは方正県伊漢通郷開拓団本部（現在伊漢通郷吉興村）と和興農合作社（現在の方正県総合高等学校）で集結した。当時、晩秋で、15000 人以上の人数がいた。開拓団の人々は長距離の移動のため、体力が消耗され、寒い冬に入り、服も食糧も不足していた。また、伝染病もあったため、多くの開拓民は亡くなった。生き残った女性と子どもは方正県の人民に救助され扶養された。

1963 年 5 月 4 月、方正県人民政府は砲台山の東側に土木構造の日本人公墓を造った。1973 年、紅旗ダムが造られた時、その墓地が水没される可能性があったため、砲台山の北側に移動した。黒竜江省の資金で砂、砂利、水などをセメントで凝固させた硬化物で造りなおした。墓は円形で、直径 3 メートル、高さ 1.5 メートル、内部は穹窿形で、セメントの地面である。北に向かって高さ３メートルの花崗岩の石碑が建てられ、「方正地区日本人公墓」と書かれた。墓の中では、5000 人以上の開拓団の人々の遺骨が納められている。

「方正地区日本人公墓」の東側にもう一つの「麻山地区日本人公墓」が造られた。その形や構造、材料、規模は「方正地区日本人公墓」と同様である。その中に、鶏西市麻山地区開拓団の約 500 人の女性と児童の遺骨が納められている。1984 年 10 月にこの墓地に移され埋葬された。

中国養父母公墓

中国養父母公墓は 1974 年、方正県から日本に帰国した日本人孤児である、東京東商株式会社理事長・遠藤勇が 1995 年 7 月に、出資して造られた墓である。中国養父母公墓の面積は 624 平方メートルであり、墓は円形で直径 3 メートル、高さ 1.5 メートル、内部は穹窿形で、セメントの地面である。北に向かって高さ３メートルの花崗岩の石碑が建てられ、「中

国養父母公墓」と書かれてある。墓の内部は鉄筋とセメントでつくられ、五層にわけて遺灰の安置ができる。墓の正門には、「養育之恩、永世不忘」（養育の恩は永遠に忘れない）という 8 文字がはっきりと書かれてある。2018 年の末、23 名の中国人養父母の遺灰がここに安置された。

記念陳列館

記念陳列館は日本式の建築である。日本の埼玉県日中友好協会と岩手県沢内村の元村長であった太田祖電先生が出資し、1995 年に造られた。記念陳列館の建築面積は 200 平方メートルで、館内では歴史記憶、奮起した抗日戦争、友好往来という三つの項目で人々に日中戦争および方正県と日本との歴史のつながりと友好往来の歴史を紹介している。

和平友好記念物

和平友好記念物は 1995 年 6 月に造られた。記念物は球の形で、直径 1 メートル、漢白玉の素材で造られた物。台は黒色の大理石である。その大理石は横 1.0 メートル、縦 1.3 メートル、高さ 1.2 メートルである。球体の正面は長野県知事吉村午良先生が書いた「和平友好」という字である。台の裏面では、「長野県日中友好協会、開拓自興会、信濃教育会、中国黒竜江省ハルビン市方正県が建立した」と書かれてある。

中日友情植樹記念物

中日友情植樹記念物は日本秋田県遺族連合会会長であった佐々木満女史が提案し寄付して植樹したものである。1997 年 12 月に造られ、大理石と鉄筋とセメントを混合し造られたものである。中日友情植樹記念物の周りでは 4 本の松の木が植えられ、日中の永久の友情を象徴している。

中日友好往来記念物

中日友好往来記念物は日本山梨県広富士会が 1999 年 8 月寄付して造られたものである。記念物の正面にある「中日友好往来記念」という 8 つの大きい字は日本山梨県知事天野健先生が書いたものである。

「中日友好、世界平和」記念物

「中日友好、世界平和」記念物は日本の立正佼成会神戸教会が 2000 年 8 月に出資して造られたものである。「中日友好、世界平和」記念物の立地面積は 360 平方メートルで、記念物の主体は白色の大理石で装飾され、高さ 3 メートルの両手合掌の形である。背後には横 0.20 メートル、縦 7 メートル、高さ 1.7 メートルの黒色の大理石の壁を飾りとする。壁には「中日友好、世界平和」という 8 個の大きい字があり、立正佼成会長・庭野日鑛先生が書いたものである。

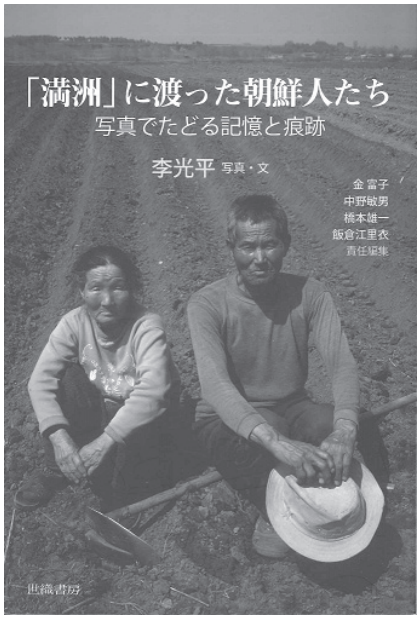
藤原長作記念碑

日本の水稲栽培の専門家であった藤原長作先生が方正県および中国全国で水稲栽培の技術を伝えたという重要な貢献を記念するため、中国外交部が批准し、方正県人民政府と日本の岩手県沢内村が共同出資し、2004 年 7 月に藤原長作記念碑が造られた。藤原長作記念碑の立地面積は 225 平方メートルで、石碑の高さは 2.74 メートルで、石碑は浅い紅色の大理石である。石碑の周りは漢白玉の欄干が設置された。石碑の正面には「藤原長作記念碑」の字が彫られ、石碑の裏面では彼の業績に関する碑文である。

（せき・きんかい：ハルピン出身。5 年ほど前から残留孤児だった夫人と共に日本に住む。現在も中国ハルピン市日本残留孤児養父母会事務局長として活動している。東京都在住）

『満州に渡った朝鮮人たち』を読んで

李 香花



今年６月に行われた李光平写真展をきっかけに、『「満洲」に渡った朝鮮人たち」写真でたどる記憶と痕跡』を手にすることができた。そこには、小さい頃目にしたことある風景が沢山載せられていた。

最も印象的だったのが伝統文化の写真だった。小さい頃、正月やお祝いことがあると家族全員が民族衣装（チマチョゴリ）を着て楽器（チャンダン）を鳴らしながら歌を唄い、踊りながらお祝いをしていた。親戚の多くは、今は中国国内の各地、日本、韓国、オーストラリア、アメリカで生活しており、親戚皆が集まるのが難しく、残念に思う。

海外に行ったのは、当時日本留学を選んだおじいちゃんの大きな後押しがあったからだった。おじいちゃんは旧満州時代日本人と一緒に生活したこともあり（詳細は覚えていない）、優しい方が多く仲良くしていたとのことだった。その日本人の友人から日本語も教わり、日本語で会話できるようになっていたようだ。

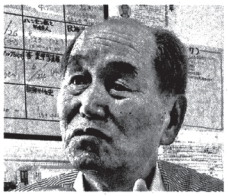
この本のコラムでも書いてあったように、なぜ私たちが朝鮮族であり、なぜ朝鮮族がその地で暮らし始めていたのか考えたこともなかった。学校の歴史授業でも触れることがなかった。そう思えば、小さい頃おじいちゃん、おばあちゃんの親戚が北朝鮮に暮らしていて、正月に手紙もらった覚えがある。その内容は食材と衣服支援の依頼だった。

北朝鮮ではご飯がないの？　何で親戚なのに遊びに行けないと素朴な質問をしたことある記憶がある。おじいちゃんは親戚ではあるが今は別々の国であり自由に行き来できないと説明してくれた。手紙の封筒を見せながら「ほら、開けられた跡があるでしょう？　手紙の内容も国に確認され、不適切な内容が書かれていると届けてくれないよ」と説明された。そのあとも難しいことを説明してくれたが、内容は覚えていない。その後も何回か手紙が届き、食材や洋服を送った覚えはある。

私たちが当たり前のように民族の文化、文学、文字、風習を学ぶことができるのも先祖たちの数え切れない苦労と戦いのおかげだと実感した。

（り・こうか：1980 年、中国東北の延辺で生まれる。2001 年来日し日本語を学習。大学卒業後日本の企業に就職し、現在は一般社団法人日中科学技術文化センターに勤めている）

東京新聞（2019年6月25日付朝刊）より転載



戦時中、朝鮮半島から旧満州（中国東北部）に渡った中国籍朝鮮族の人々約600人にインタビューした移民２世の李光平（リグァンピョン）さん(74)＝写真＝が、その研究を写真と文でつづる記録集を、日本で刊行した。故郷を追われた朝鮮人の苦難の背景には、植民地支配をした日本の集団移民政策がある。李さんは「二度と悲劇が起こらないよう、知られざる事実をありのまま伝え、日中朝の人々の努力で平和につなげたい」と願う。（安藤恭子）

旧満州の朝鮮人 苦難の足跡

植民地時代 土地追われ「だまされた」

移民２世が記録集

この記録集は「『満州』に渡った朝鮮人たち～写真でたどる記憶と痕跡」（世織書房）。李さんの研究のきっかけは、吉林省龍井市の文化館長を務めていた一九九九年。約千人が朝鮮から移住したという同省の集落を訪ねた。

「耕作できる良い土地という触れ込みで来たら、何もない荒れ地だった」「だまされた。朝鮮に帰りたくても帰れなかった」。九十歳を超えるお年寄りたちの証言に、李さんは衝撃を受けた。

李さんの祖父と両親も咸鏡（かんきょう）北道（ほくどう）（現在の北朝鮮）で農業を営んでいたが、一九三九年に日本軍の倉庫ができて土地を追われ、北に三百キロ離れた旧満州の龍井市に移住した。移民政策は朝鮮総督府と関東軍が主導しており、第二次大戦が終結した一九四五年、旧満州に暮らしていた朝鮮人は二百万人超に上ったという。

朝鮮からの移民は、現地の人々に「日本人の手先」と見なされた。移民たちは荒れ地の開拓のみならず、集落を囲う土塁を築くなどして、中国共産党の指導で組織された抗日集団「東北抗日聯軍」の襲撃から身を守る必要もあった。こうした複雑な立場から、戦後中国では朝鮮人移民の事実への関心が低く、記録もほとんど残っていない。中国では朝鮮族として扱われた。

1937年に旧満州に集団移民した男性。土塁を築く工事で腰を痛め、晩年は下半身不随になりながら畑を作った＝2003年、中国吉林省で（李光平さん撮影）

「朝鮮族は中国五十六の少数民族の中で、唯一の移住民族。自分たちの歴史は自分たちで守らなくては」。李さんは研究を自らの使命と思い定め、早期退職。自費を投じてオートバイと車で九十五の村を回り、十年余りかけて集団移民や日本軍の強制徴兵の体験者らにインタビューを重ねた。

氷雪の覆う無人の地にむしろのテントを立てて、すきを打ち込んだ開拓の苦労や、栄養失調と伝染病で家族が全滅した悲話を聞き、証言者と共に涙した。

移住初期の土塁を築く工事で腰を痛め、下半身不随となったお年寄り、日本軍が住民を殺害したトーチカ跡、朝鮮から持ち出した臼や陶器などの生活道具…。戦後も半島に戻らなかった朝鮮族の人々やその暮らしに着目し、何時間もカメラを向けた。

証言600人「日本人の手先」◆飢えと病で一家全滅

元慰安婦の女性を訪ねた当初は警戒され、にらまれた。李さんは「二度と同じ出来事が起きないように、協力してほしい」と説得。何度も通うちに女性は心を開くようになり、日本兵の接待を毎日させられた末、病気で慰安所を追い出されたと証言した。

記録集の編集にかかわった金富子（キムブジャ）・東京外国語大大学院教授（植民地朝鮮のジェンダー史）は「旧満州について日本の開拓団の話はよく知られているが、その場に日本人よりも多い朝鮮移民がいたという事実は、ほとんど伝わっていない。日本の植民地主義の遺産を知る上で、李さんの研究はとても貴重。統治した側の日本の市民が学ぶ意味も大きい」と評する。

記録集の刊行を記念し、李さんの講演会が二十九日午後二時から東京都新宿区の高麗博物館で開かれる。会費千円、定員九十人。事前申込制。問い合わせは同館＝電03（5272）3510＝へ。二十六日から七月七日までは写真展や関連イベントも行われる。七月一日は休館。

雲南にある日本軍兵士の墓

古島　琴子

雲南省南西部の騰冲（騰衝）に「倭塚」という墓がある。太平洋戦争末期、日本軍は戦死者の遺体を遺棄したまま敗走し、遺体は中國側の手で葬られた。写真（次頁の1）の「倭塚」は激戦地の一つであった騰沖にある中國軍戦死者墓苑の一隅に建てられ、「2万余の日本軍の眠る処」と説明されている。

1942 年5月、日本軍は中国遠征軍を追ってビルマ（現ミャンマー）から雲南に侵攻した。中国軍はサルウィン河上流の怒江にかかる橋を落として日本軍の侵攻を止めたが、怒江以西の地域は以来2年 8 ヶ月にわたって日本軍の占領下に置かれた。

44 年 5 月、中国軍の反撃が始まり、龍陵、騰越、松山等の激戦を経て 45年1月に日本軍は全滅した。雲南で「滇西抗日戦争」というこの戦争で日本軍の戦死者、捕虜は 21、057 人、中国軍の戦死、失踪者 64、256 人と記録されている。

戦争終結後の 1946 年、騰冲県城の郊外に戦没者の霊園が建設され、その一隅に日本軍戦死者の墓碑「倭塚」も建てられた。写真（次頁の2）は抗日戦勝利 50 周年の 1996 年に改修された墓苑で、中国の戦死者の墓石が林立している。

長い間雲南西部は外国人に開放されなかった。漸く開放された 1990 年春、少数民族の村を訪ねて昆明から空路芒市に行き、賓館に入ると初老の日本人の一団に出会った。かつてこの地で戦った元軍人や兵士で、遺棄した戦友の遺骨収集や慰霊を行いたいと訪れた人々であった。

しかし、中国側は元戦場への訪問は許しても遺骨の収集や慰霊の行為は許さなかった。中国で「老兵」と言われていたその人々は国のために戦ったのだという思いだけが強く、他国を侵略した加害者であったという認識が無かったからだったという。きびしい拒絶に会って初めてそのことに気づいたある元軍人は被害を蒙らせた村々を謝罪して歩き、漸く誠意を伝えることができたという話もあったが、元指揮官らしい人を団長として戦争中の階級も意識もそのままといった雰囲気の団に出会ったこともあった。倭冢についても「倭とは何だ」と怒った元軍人がいたというが、「倭」は古代から中国の民間で使ってきた呼称である。

2 年 8 ヶ月に及んだ雲南西部の日本軍占領地区では慰安所が建てられ、芒市の町にはその建物が残っていた。慰安所には日本、朝鮮、中国、インドなど多数の女性がいたという。日本軍が敗れると保護された朝鮮の女性は中国側の手で韓国に送り帰され、日本人女性は自決したと言われていたが朝鮮人女性と一緒に帰国した人もいたという。

1990 年代、度々訪ねたタイ族の村々では残虐行為などの話はあまり聞かなかった。日本軍は漢族と少数民族の分断政策を取り、漢族は殺したが少数民族は殺さなかったからでもあった。また、雲南省西部の低い山々と稲田という日本の農村に似た風土は、兵士たちに故郷を偲ばせることでもあったろう、日本兵は子どもを可愛がったという話もあった。しかし、米の買い付けに支払ったものか多額の日本軍の軍票が残っていて及ぼした被害の大きさを想像させた。

あるタイ族の村では逃げ遅れた日本兵を保護して村に住まわせた。村の娘と結婚して女の子が

生まれた後帰国し、その後訪ねてきた時には一人残されていた娘を娘と認めないで帰って行ったという。日本人に対する不信感など見せず、淡淡と語られた話であった。

別の村では日本軍に連れて行かれた父をずっと思い続けている女性に出会った。その女性がミャンマー側に住んでいた時に日本軍がやってきて、村長だった父親に「若者を3人出せ」と要求した。要求を受け入れるわけにはいかない父親は身代わりとなり、「よい人がいたら再婚するように」と母に言い残して日本軍と共に去った。幼かった彼女は父の顔を覚えていない。戦後父は日本に行ったという便りが届いたが連絡がつかなかったという。孫もいる年齢の彼女だが日本軍に連れていかれた父親を思い続けていた。

ミャンマーからインドに向かった悲惨なインパール作戦に比較して雲南の戦場について語られたことは多くはないが、ここにも戦争の犠牲となった数知れない人々がいたことを覚えておきたい。

写真１　倭塚（雲南省騰衝）『滇西抗日戦争史』より

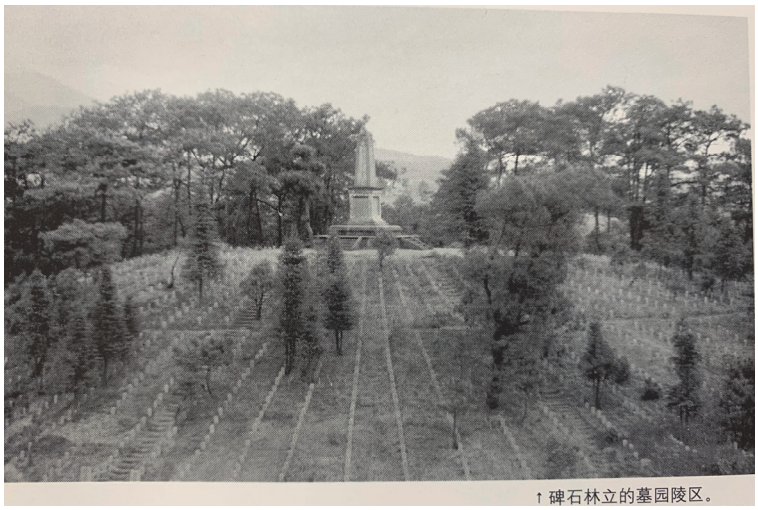


写真2　1996 年に改修された墓苑、『中国遠征軍　滇西大戦』より

（ふるしま・ことこ：　1927　年生。一般社団法人中国研究所所員、公益社団法人日中友好協会顧問。長年日中友好運動に取り組んでいる。　著書　「中国西南の少数民族」　サイマル出版会　1987年　「攀枝花（パンジイホア）の咲くところ、雲南タイ族の世界」　創土社　2001 年）

舞鶴港

柳生じゅん子

吹雪の車窓に舞鶴港が近づいてきた

目をこらすと
旧満州から引き揚げてきた私達家族がいる
鍋や薬缶をぶら下げたリュックを背負い
不安や混乱で両手が塞がった父がいる
健気についていく六歳の兄
コーリャン食に痩せ衰え　遅れまいとする祖母
背中にリュック　弟を前に抱いたねんねこ姿の母
手をひかれている四歳のわたしもいる
幼い肩に力を入れ　見あげると
父母から励ましの笑顔をもらっている

思わず　吐息をつけば
窓枠の隅で遠景になっていた黒い船に
満蒙開拓青少年義勇軍が乗って行った
敗戦後　逃げのびてきた開拓団の人達の中に
やせて　麻袋を着て歩く
ひとりぼっちの少年の姿を忘れられないと母は言う
どれほどの少年達が帰国できたのだろうか

曇ったガラスを指でふくと
幾筋もしたたり落ちるものがある
検疫所へと堕胎手術に並ぶ断髪の女性達
故国の山河に触れたとたんに力尽きた人
孤児になった少年　赤ん坊もいる
掲示板は尋ねびとで溢れ（いつまでも）
海の向こうで奪われたもの（戻したもの）
置いてきたもの（永久に返ってこないもの）
絡繰りの波打際から
翻弄された者達が押し出されてくる

侵略　植民地　開拓民　難民　逃避行
綴る端から忘れられていく言葉
何ひとつ覚えていない　この港
けれど　過ぎたことはひと色に埋めようと
降りしきる雪の日だから　よく見える
母がくり返し　遺産のように紡ぐから
六十年たっても　輪郭を持つ
小さな荷物を背に
わたしは　ここから踏み出している

母の夕陽

柳生じゅん子

どうしてあんなに大きく朱かったのかしら　満洲の夕陽は。地平線に燃え落ちていく火の玉を見ていると　ここは日本なんかじゃないと　つくづく思った。嘘の固まりだったものが　ドロドロと溶けて　とっくに家の入口まで流れて来ていたのに　私は気がつかなかったのね。

八月になると早々と軍人家族や官僚　銀行の上部の人の家族は　内地に引き揚げ始めていたの。満鉄（南満州鉄道）職員の私達の間でも　朝鮮経由で帰る手筈を整えていたのよ。奥地の開拓農家の人達や兵隊さん達は十五日過ぎても敗戦を知らずに取り残されて　どんなに悲惨な目に会ったかというのにね。その頃内地に　ものすごい爆弾（原子爆弾）が落ちたと聞いて　お父さんは広島の姉さんをとても心配していたわ。終戦が遅れたのは　この何日間に　世界中の思惑が渦巻いていたせいだなんて。

十五日の玉音放送は　よく聞き取れなかったけれど日本が負けたことは解った。すぐに郵便局に走った人もいたのに　遅れて行ったらもう払うお金がないと言われて頭の中は真っ白。世の中の不安がいっぺんに押し寄せてきて情けなかった。家族六人　日本に帰れるだろうかと思って。子供達があまりにも小さかったからね。夜になると朝鮮民族の人達が　マンセー　マンセーと鉦や太鼓を打ち鳴らしながら行進するのがとても不思議だった。無知というのは恥ずかしいことね。
次々とどんな事件が起きた時も　夕陽は　その日の空と大地を染めるの。あれは私の知らない世界に向かって生きたまま滑り降りていたのね。満州族や朝鮮民族の人達　夕陽を一日の糧のように大切に見つめてきた何千何万の人達の　懐をくまなく照らすために　あんなに盛りあがっていたんだ。日本人は初めからその中に入っていなかったのよ。

それからは　夕陽を見ると　どこかがひび割れていく心地だった。でも陽が沈むともっと恐い事が起きていたの。それまで炭鉱で現地の人達を酷使していた日本人は　坑内に連れ込まれたまま戻ってこなかったり　小さな社宅は暴動に会ったの。夜はソ連兵が襲ってくるからと　女の人達は天井裏に潜ったり　皆　頭を丸坊主にしてね。私は悔しくて髪を切らなかったけれど焦げ茶色の毛糸で編んだ帽子を暑いのにかぶり　いつも子供をおぶってい

た。年頃の娘さんを持った親は心労で病気になったわ。ニンゲンの恐ろし本性というものを数えられない程見たり聞いたりしたのよ。

忘れることのできない一年間を超えて　ともかく家族揃って引き揚げるのに　囲いさえない無蓋車に乗せられた時も　あの夕陽に見送られたわ。コーリャン畑やトウモロコシ畑を輝かせていくの。どんな時も諦めないニンゲンの底力だと思った。多くの死んだ人達の魂を包んでくれ　これから生きていく人への息吹のようだった。とてつもなく美しいものがいつまでもついて来て私達は追い出されているのだとわかった。けれどね。私は日本に帰ったら一生懸命に働いて生きて行こうって　そのとき決心したのよ。

（やぎゅう・じゅんこ：1942年生まれ。秋に中国東北部旧満州撫順へ。父は南満州鉄道勤務。1946年秋に、中国葫蘆島より引揚げ、福岡県に住む。母の語りを作品化するために「満州研究会」に通った。日本現代詩人会・日本詩人クラブ・日本社会文学会・日本文芸家協会　各会員）

日本敗戦後の方正での生活を振り返って

中島 茂

1945年12月収容所から、中国人「隋」家に救われ新年を迎えました。

それは２番目の姉（千世子）が隋家の兄弟４人の内２番目の人と結婚することで、中国人家庭に入りました。当時私の家族は、母と姉二人と弟の５人でした。

隋家は、方正県庁のある街の中に家がありまして、家族総勢７人居たので合わせて１２人が一つの屋根の下で一冬過ごしたのです。あまり狭いので翌年母が付近の豆腐屋を営む一人の中国人と再婚することになって、私と弟を連れて隋家を出て暮らすことになりました。

そのころ日本人が日本に帰れるとの動きがありまして、どうしようと思っていたところ、隋家に居た二人の姉がどこかえ隠されてしまい、母は帰ることをやめました。（親戚の一部に、この時に帰った人もいます）

その後中国では内戦が始まって、何びとも身動きができない状態となり、つづいて「朝鮮戦争」が勃発し、その戦争が終わるまで私たち開拓民は帰国するすべがなかったのであります。

私と弟は、１９４６年の夏に入るとすぐに「豚追い」（近所の家の飼い豚を集めて郊外で放牧すること）をはじめました。これは「鞭」１本で豚を管理するという大変な仕事です。雨の日でもやるので、泥まみれになり半泣きで豚と争う毎日です。

そして冬には養父と馬車に乗って、ちょうど元の収容所付近の小高い山へ薪取りに行きました。

一旦山に入って作業をする間は、ほとんど寒さは感じませんが、道中の馬車の上ではもう足が痛くなるほど凝ってしまい苦しい思いをしました。

戦後の土地解放で、全住民は一定の土地が与えられまして、私たち日本人にも土地がもらえました。その与えられた土地も実は元の収容所付近でした。私も養父と２年ぐらいキビや大豆などの耕作を手伝いました。年によっては夏の洪水でその年の収穫が全滅することもありました。

その次は、姉の家の「牛追い」を２年ほどしました。「牛追い」は豚追いほど苦労はなかったが、遊ばせる「豚」とは違い、仕事の合間で「餌」になるような草場を探すのに結構苦労しました。

実はこの小高い山を「炮台山」と言い、その麓に収容所で亡くなった人たちの遺骨を積み重ねて置いた二つの大きな山があったのです。私は当時を思い出したり、妹もここに居るのかと思い、怖いというより悲しい思いでいっぱいでした。

この間言葉は、翌年中国人の家庭に入るとすぐに中国語でないと生活にならないので、日本語は忘れ、覚えかかった中国語の片言でも使って近所の子供と遊ぶことに必死でした。

当時現地の子供の遊びの一つに、冬は鉛の塊を平らで丸くしたもの（重さは300g～500g）を、５m位先の線まで投げて順位を争うものとか、鞭でコマを廻す遊びもあったかな。また部屋の中ではトランプ遊びが盛んでしたね。お正月になるとどこからとなく太鼓の音がして「ヤンガウー」という土地の踊りで歌ったり踊ったりする催しがありまして、寒さを忘れて見物したり、周りでマネして遊んだものです。

２番目の姉は、二人目の子供をお産するときに持病の腎臓病が悪化して子供とともに亡くなりました。逃避行をはじめすべてに家族の大黒柱となってきた姉を失って、本当に悲しい思いをしました。その前後に母が大病しましたが、一命を取り戻すということもありました。

中国人の家は、土と草を練って四角に固めたもので壁をつくり、屋根は特殊の柔らかい草を厚く敷いたもの（ちょうど日本の古い家のようなもの）、部屋は「オンドル」という床下暖房で、壁に使った土の塊で二通りのトンネルをつくり、そのトンネルを「かまど」で使った煙を通して暖を取り部屋と寝床を温めるのです。（他にストーブを炊いて暖を取ります）

方正の暮らしが始まったころは、現地の人たちから当然のように冷たくされ、外に出るのも怖いくらいでじっと部屋に閉じこもって、養父の仕事をそれなりに手伝っていました。内戦で共産党が勝って社会が安定し、いろいろ新しい施策が行われる中で、日本人に対しても扱いが寛大になり中国人と全く同じ暮らしができるようになりました。街に出ても誰からもいじめられるようなことはなく同じように買い物などができました。

こうして戦後４年を経たころいろんなことを経験し、もうすっかり中国人になりきっていました。

養父には怒られることはめったになかったが、一度兄弟げんかをしたとき見かねて私の尻を「天秤棒」で強く叩かれたことがありました。

方正の冬は寒くて零下３０度になることはしばしばで、例えば自分で排尿した尿が途中の半分くらい凍ったことが一度経験しました。また冬は一面が雪で平らに固く凍り、決まった道はなくなり人が思うように歩く道をつくれることもできました。

また仕事にはならなかったが、「アンペラ」編みを習い一応できて何枚か売れました。

新しい政府になって、字が読めない書けない人を地域に集めた「夜学」（業余学校）を始めたので、私はそこで中国語を学ぼうと数年通いました。そして昼間の学校へ行くようになってからもこの「夜学」へも行き「小先生」をしたので、子供や大人たちから喜ばれ、多くの友達ができました。

そんなころある日突然、高熱が続き一週間ほど生死をさまよって目を覚ましたら、全身の関節がふくらみ痛むのでした。この病気は、現地の人たちの約２割ほどが居て悩み苦し

む「風土病」でした。（カシンベック病）

この病気で痛み悩んでいたら、方正県の街の中にある病院で「薬剤師」として働いていた日本人の鈴木さんに会いました。この方は浜松の出身でよく家に母を訪ねていて、この方の紹介で現地の中国人学校の分校に就学することができまして、約２年間方正県の小学校で勉学しました。

中国語ができると言っても、日常会話の範囲でしたので、教科書という本の言葉は何もわからないものでした。でもすぐに友達もでき、授業もできるようになって、小学校の本館に移ってからは教師の代役をすることもありました。

学校では、足が少し痛くても、バスケットや運動会では走ることもでき、100m走りで２位になることもありました。

しかし同じ風土病（カシンベック病）で悩んでいた養父が仕事ができなくなったので、もう学校をやめて働らこうとしていたら、ちょうど近所の友達の世話で親が経営している印刷工場に就職することができました。　この職場である印刷所は、中国で名高い「新華社」の関連企業なのであります。

ここでも仕事を親切に教えてもらい、帰ってくるまで約２年間働いたが、石版刷りはもう自分が中心になって働ける技術も覚えたほどになっていました。仕事は結構多忙でしたが、県や国の重要文書（裁判所の布告）を常に作っていましたが、私に対しては何ら警戒することはなく、他の人たちと全く同じ扱いでした。

隣は新華社書店なので、休み時間とか休日には書店で本を読んで言葉を覚え、中国の政治・文化などを学ぶことができました。

またメーデーがありまして、新華社グループなのでいつも行進の先頭で、県の幹部たちと一緒に歩きました。

この間　借りて住んでいた家を買い取るなど、暮らしは困らない程度になっていました。実は「餃子」をつくって食べましたが、それは一般の家庭では年に２～３回ぐらいしか食べていません。（正月とお盆と何かお祝いごとのある時）そしてお風呂ですがこの間に一度も入浴したことはありません。そもそもその頃はどの家庭にも風呂はありませんでした。

（なかじま・しげる：1934 年下伊那郡泰阜村で生まれる。現在、長野県飯田市在住。命を育ててくれた方正県は第二の故郷、平和主義という人生観を教えてくれた所と思い、日中友好運動に携わる。今後も更に多様な活動を続けたいと 2018 年、方正友好交流の会に入会）

方正日本人公墓を訪ねて

堀内　博史

ハルビンの東に位置する方正というところに日本人の墓があることを知ったのは、北京に仕事で駐在していた2018年初頭の頃でした。きっかけはたまたま買った「地球の歩き方 大連　瀋陽　ハルビン 2019～2020」の 346 頁に「満蒙開拓団の痕跡を訪ねて」というコラムを見つけたことでした。私はまもなく2018年4月に帰任しましたが、いつかは方正を訪問し日本人のお墓に行きたいと思っていました。そして2019年6月ついに友人と２人で方正を訪ねることができましたが、その際には方正友好交流協会の大類様には大変お世話になりました。また方正では大変印象深いことがありましたので、直近の方正情報提供のためにも訪問に関する出来事を寄稿させていただくことにいたしました。

いざ出発間際に問題が

今回は木金を休んで 4 連休にして、ハルビンに滞在しながらハルビン市内や方正、そして長春を日帰りで旅することにしていました。ハルビンは成田から直行便が毎日出ており、航空会社が時々キャンペーンを行うので、この時の往きの飛行機代は3999円、帰りは13000円、あと燃料代、税金や追加の手荷物代などを入れても総額31539円の安さでした。

出発の２日前、ハルビンの弊社現地社員李雪娇(以下李さん)から「中日友好林園の事前予約はしていますか？　ここに入るには方正県外事弁公室の承認が必要ですよ」と連絡が入りました。私はネットで方正を訪れた人のブログを見ていたので、公園に鍵がかかっていることは知っていましたが、管理人に頼めば何とかなるのではと安易に思っていました。しかし、李さんからの連絡で、せっかく行っても本当に入れなければ残念だし、同行してくれる友人にも申し訳ない、出発までもう時間もなかったので、ネットでその存在を知った「方正友好交流の会」に直接連絡を取ってみることにしました。電話に出られた交流の会代表の大類様に事情を話したところ、突然の電話にもかかわらず快く方正外事弁公室にたずさわる日本語ができる方を紹介してくれたのでした。早々にその方に電話すると、訪問の目的などを聞かれましたが、「わかりました、方正訪問の前日にまた連絡をください」と言ってくださり無事にこの問題は解決したのでした。

思った以上の厳重さ

ハルビンに着き方正外事部へは李さんから連絡を取ってもらいましたが、再度訪問の目的確認と、パスポートの写真を要求されたのでその場で携帯から送りました。微信（中国版LINE）をつなげて画像を送付し終わるまでほんの数分でした。

ハルビン２日目の朝、私たちは李さんの運転する車で方正に出発しました。朝から大雨でしたので平日のハルビン市内は車が渋滞し、高速道路に入るまでに 1 時間以上、高速道路も大雨でスピードが出せず、方正まで 4 時間もかかってしまいました。高速鉄道で動いたほうがよかったかなと思いましたが、方正に近づくと嘘のように快晴になり、中日友好林園も方正駅からは歩ける距離ではないので、こうなるとやはり車は便利です。

中日友好林園の正門に着くと、李さんは外事弁公室へ連絡を取ります。5分ほどして管理人の女性が鍵を持って現れるのですが、その間に李さんから注意事項の説明がありました。
「写真を撮ってはいけません」(まあそうだな、でも注意されるまではいいかな)「お線香をあげてはいけません」(火事の恐れがあるからだめと以前聞いたな)
「手を合わせて拝んではいけません」(え？)
「頭も下げてはいけません、ただ見るだけです。」(・・・・)
思った以上の厳しさです。直接自分で外事弁公室と連絡をとるべきだったかなと少し後悔しましたが、李さんは言われたことをただ伝えているだけなのでそれは事実であろう。李さんの面子もあるのでここは言われた通り素直に従い、心の中で拝めばよいと自分を納得させました。

墓を訪問するのはよいがなぜ拝んではいけないというのだろうか。これはなにか政治の

力が動いているのであろうか。やや緊張で始まった日本人公墓の訪問でしたが、鍵をあけて園内を案内してくれた管理人の女性の素朴な笑顔に、そのような緊張感は全くありませんでした。おそらく写真を撮っても手を合わせてもおとがめはないと思われましたが、李さんに言われた通りにして静かに胸の中で合掌したのでした。

中国駐在員で話題に上がらない日本人公墓

私は尖閣問題の起こった2012年の4月上海に赴任し約3年、その後北京に移って約3年、通算して 6 年中国に駐在しました。その間多くの日系企業駐在員の方々、領事館、日本大使館などの政府関係の方々とも知り合うことができました。また中国東北地方にはハルビンをはじめ長春、瀋陽、大連に会社の事務所があり、それぞれに現地社員が数名いるので、ハルビンもこれまでに数回訪れていました。しかし、駐在 6 年間で方正の日本人公墓のことが話題になることは一度もなく、私は「地球の歩き方」を読むまでは全く方正のことを知りませんでした。それほど現在の中国駐在員の間ではなぜか方正は知られていない存在でした。

方正で出会った三人の女性

私はもう一度方正に行って、今度は一泊でもいいから滞在したいと思っています。その理由は方正で出会った三人の女性の素敵な印象からでした。

一人目は中日友好林園の鍵を開けてくれた管理人の女性です。小柄で年齢は40歳後半から50歳前半くらいでしょうか。その控えめで素朴な笑顔に人柄が感じられ、私たちを丁寧に案内してくれました。持参した日本のチョコレートのお土産を差し上げるとうれしそうに受け取ってくれました。帰り際に一緒に写真を撮りましたが、少し照れくさそうに緊張されているように感じました。

二人目は昼食に食べた麻辣烫(マーラータン)屋の従業員です。この女性も小柄で40代くらいに見えましたが、私が麻辣烫を食べ終わって彼女にトイレはどこかと聞いた時の応対の笑顔が本当に素敵でした。それはよそゆきでもなく自然と出てきている笑顔で、人柄がにじみ出ていておもわずうれしくなりました。

三人目は外貨両替に入った銀行の行員です。客が多くかなり待たされたあと応対してくれたのは若い女性行員でした。てきぱきと両替を済ませたあと、帰ろうとして立ち上がった私に彼女はなんと手を振って笑顔で見送ってくれたのでした。それは私が外人だからではなく自然に出た行動に思えました。

日本では当たり前なことかもしれませんが、中国では自分の知り合いならともかく、他人に対してそのような笑顔は普段あまり見かけません。さすがにわずか数時間の滞在で三人もの特別な笑顔に接すると、実はそれはこの方正では特別なことではなく、方正全体がそのような街なのではないかと思うのです。

最後に

私は 6 年間中国に駐在していましたが、まだまだ多くのことが分かっていないと痛感しました。そのため今からでも多くのことを知って、学んでいきたいと思っています。方正もいつか再訪したいと思います。その時また寄稿することができれば幸いです。

（ほりうち・ひろし：1960年８月生まれ。大阪出身、食品会社勤務。会社は2004年上海に工場を建設し、中国の人々にカレーを販売開始。カレー製品販売拡大のため2012年上海に駐在。2015年北京に移動。2018年4月帰任し現在、東京在職中）

ノモンハンへの旅

野田 尚道

毎年、８月になるとテレビで過去の戦争に関する番組が放送され、お盆の時期と重なることもあり、なかなか直接見ることが出来ないので録画をして後から見るようにしている。

昨年８月にＮＨＫスペシャルで『ノモンハン 責任なき戦い』の放送があり、同様に録画をして、お盆過ぎに見た。

関東軍の暴走によって無益な戦争が引き起こされ多くの戦死者を出したと記憶をしていたところ、今年になって、昨年縁があった旅行社から第六回戦争を語り継ぐ特別企画「ノモンハン戦跡・内モンゴルと北京一歴史に触れる旅一」の案内が届いた。

旅行期間を見てみると、8 月 22 日から 28 日となっている。手帳を確認すると、まだお盆以降のそこには予定が入っておらず、改めて録画した DVD を見直し、NHK が特別な許可を得て、事件が起きたモンゴルの草原に入り、ドローンで撮影した日本軍の塹壕跡や放置された装甲車、収拾されず放置された遺骨を見て、現地を訪ねてみたい衝動にかられた。

昨年第五回戦争を語り継ぐ旅で旧満州の旅をご一緒して数年来親しくさせていただいている会津若松の牧師さん夫妻にも確認すると案内が届いており、是非参加したいとの意向でもあり、今年事件から 80 年になるこの旅の参加を決意した。

8 月 2 日に旧荒川町の戦没者慰霊祭が行われた際に遺族会会長さんに元町民の戦没者の中で、ノモンハンで亡くなった方がいるか調べていただくと 5 名の方がおられることが判り、満蒙開拓民の現地慰霊同様、仕事柄 現地で目立たない形でも供養をしたいという気持ちにもなった。

今回の旅も参加者は添乗員を含め、北海道から九州まで自身が戦争体験者であったり、肉身が犠牲になったり、平和運動に関わりを持たれていたり、最高齢は戦時中飛行兵の教官であった矍鑠たる 95 歳から、沖縄・久米島に住んでいた村長をしていた祖父が上陸してきた米兵に殺されたという 50 代までの、それぞれ戦争に対する想いを持たれた 26 名の参加者であった。

初日の 8 月 22 日、北京到着後、訪れた中国人民抗日戦争紀念館では、日本で無かったことにしたい南京事件の展示があり、『南京大屠殺 30 万余人』と書かれ、軍刀を持った日本兵が今、正に中国人の首を斬り落とそうとする衝撃的な写真や首を斬り落とした後の軍刀の血糊を拭き取っている日本兵達の写真が何枚か展示され、軍刀を振りかざしている日本兵の後ろで笑いながら眺めている日本兵の姿に虐殺が日常茶飯事であったことを感じさせられた。

1937 年 12 月 14 日付東京日日新聞の記事もあり、「百人斬り超記録」の大見出しに百人斬り競争の両将校の写真入りで、「106 対 105 両少尉さらに延長戦」等と書かれたものが展示されていた。

喜劇王のチャールズ・チャップリンが製作した戦争に対する風刺映画の一つ『殺人狂時代』の中で、「戦争で大量に人を殺せば英雄になるのに、数人殺しただけで死刑になると

は！」と嘆くシーンがあったが、如何に戦争が人間の心を破壊し、残虐にしてしまうのか、この展示から如実に判る。

ノモンハンへは3日目の8月24日にハイラル市から約2百キロ離れた現地まで観光バスで移動したが、途中平原の中にあるノモンハン事件当時は僧侶を別の寺院に避難させ、旧満州国第10軍管区司令部となり、周辺に要塞や航空基地があったというチベット仏教ラマ教の総本山カンジュル廟を参拝し、その後今は国の保護を受けて定住しているという国境遊牧民の一家族のゲル（パオ）での生活様式を見学した後に訪れた。

残念ながら現地内部への立ち入りが出来ず、戦争の記憶を想起させる3千点以上の戦争遺物が収蔵されているノモンハン戦役遺址陳列館も修復中ということで拝観出来ないという有様で、無造作に置かれているソ連の戦車と高射砲の脇からハルハ河と一望千里の平原を前に、日本から持参したお菓子を大地に供え、無益な戦争のために犠牲になった5名の元荒川町民と日本・ロシア4万5千人の戦没者を想念しながら一人施食供養をさせていただいた。

内モンゴルの真っ平らな360度の平原は限りなく広大で、雲の表現の豊かさと地球が丸いことを改めて感じさせてくれた。このような穏やかな平原で起きたノモンハン事件とは果たして如何なる紛争であったのか。

ノモンハン、一望千里の平原に置かれたソ連の戦車

1939年5月11日から9月15日までの4ヶ月に及ぶ、旧満州国とモンゴル人民共和国との間でハルハ河を挟んでの国境紛争から勃発し、モンゴルと軍事条約を結んでいたソ連軍と日本軍（関東軍）が激突し、日本軍の主力部隊の八割約2万人、ソ連軍約2万5千人が死傷した正に戦争であった。

「敵を知らず、己を知らず」甚大な戦死者を出したこの事件の教訓を生かせず、日本は2年後の1941年から再び連合軍との太平洋戦争に突入し、軍民合わせて3百10万人の犠牲を出した。

戦後の1950年代から30年に亘って、米国の軍事史研究家による元日本陸軍将校達の150時間を越えるインタビューの音声記録とNHKが発見入手した日本 国内に残された44人分

の音声記録がNHKスペシャルで放送されていたが、大本営陸軍参謀も関東軍参謀も部下の作戦参謀の暴走を止めず、敗戦の責任を更に現場の部隊長に押し付けて自決をさせ、責任の自己回避をしていたその記録から判ることは、今も変わらない首脳部（政治家）が、起こした事件（忖度）の責任を取らず、部下（役人）に押し付けてのうのうとして生きている日本人の特質とも言える構図である。

戦後、日本が義務教育の中で過去の戦争犯罪の反省を一切せずに隠し続け、ドイツのような形で同胞同士の中で戦争責任の追求をして来なかったことが、侵略した国の人々を下に見て侮辱し続け、ヘイトスピーチ等今更ながら、摩擦を起こす結果を招いていると思う。

もう一点日本の政治家で気がかりなことは、近年の中国の政治による人民の意識誘導と同じことが日本でも行われているのではないかと危惧することで、江沢民首相の時から愛国教育を取り入れ、中国各地に旧日本軍の拠点や残虐行為が行われた場所に抗日紀念館を建て、過去の日本の軍国主義を教材に国政に対する不満の鉾先をそらそうとしていたことである。その中国が同じ軍国主義を推し進めていることは皮肉なことである。

現在、日本の政治家の顔ぶれを見ると、米国に脅されて安保条約を持ち帰った吉田茂首相、安保条約と密約で日本の主権を侵害している日米地位協定を守り続けた岸信介首相の孫世代が、今度は祖父達の負の遺産が表に出ないように米国に脅されながら守り続けている感があり、正に政治の私物化である。

少子化の日本、いずれは自衛隊員の成り手が無くなった時には、又も密約での米国からの要求で「徴兵制」を復活させるのではないかと危惧している。

周恩来首相の無二の親友であった岡崎嘉平太氏が、1972年に日中国交が回復した際に招待を受け、中国でのスピーチの中で「周恩来総理が、日本の侵略を深い恨みに思っているが、この恨みを忘れる努力をしている。これからは日本と手を握ってアジアを強くしよう。外に向かって侵略するのではなく、将来もし再び外からアジアを侵す者がおったら協力して払いのけようと述べられたが、日本は忘れる努力をしている中国に対して忘れない努力をし、恨みを忘れてもらえる努力をしなければならない。忘れる努力と忘れない努力が身を結ぶ時に新しい日中、そして、アジアの時代が拓けてきます」と述べた。

二千年来の友好関係の歴史を持つ両国の政治家には、今一度立ち止まり、この深い意味を持つ「名言」を肝に銘じた外交関係を構築して欲しい。

ラグビーワールドカップでの日本の活躍は目覚ましく喜ばしいことであり、お祭り好きの日本人は来年のオリンピックで盛り上がるであろうが、イベントに意識誘導させられながら、更に政治への関心を薄れさせられ、その間に「9条改憲」、「緊急事態」新設を目論み、米国との侵略戦争への道を開こうとする日本与党政治の危うさは見逃せないことである。

「後の祭り」にならぬよう、主権在民の下で政治の監視をしていかなければならない。

（のだ・しょうどう：1954年生まれ。新潟県村上市の曹洞宗・東岸寺住職。沖縄・日本から米軍基地をなくす草の根運動運営委員。また、宗派や分野を超えたネットワークで、自殺志願者や自殺者の遺族に対する相談所として寺を開放し活動している）

日中友好協会福岡県連合会「東北三省をめぐる平和の旅」

（報告者　後藤富和）

74年前に別れた両親に「会いに来たよ」　中国残留孤児　川添緋砂子さん

日中友好協会福岡県連合会は2019年9月14日から６日間、「東北三省をめぐる平和の旅」に取り組みました。参加した川添緋砂子さん（８３歳）は、市を流れる大河「松花江」の岸辺に立ち、今は亡き養父母に「会いに来たよ」とお孫さんとともに線香を捧げました。

哈爾濱市は川添緋砂子さんが幼少期を過ごした街。郵便局員の父は、佐賀県唐津市北波多町から転勤で旧満州の市に、そこで川添さんが生まれます。

1945（昭和20）年8月、ソ連の空爆に遭遇。当時9歳（小3）の川添さん、二人の妹と両親、一家五人の逃避行が始まります。草や木の根を生のまま食べ、夜は木の下で寝ました。ソ連軍に遭遇し、牡丹江の収容所に。母はそこで出産し死亡。その後移された哈爾濱市の収容所で父も息を引き取りました。飢えと寒さで餓死寸前、亡くなった父親を立って見送ることもできませんでした。その日の夜、「まだ生きている」と中国人5、6人が探しに来てくれました。父が亡くなる直前、中国の友人に川添さんたち姉妹のことを頼んでくれていたのです。妹も他の中国人に引き取られて行きました。今でも生死不明です。どこかで生きていることを願っています。この戦争は本当に私の家を破壊し、家族を殺してしまいました。

お孫さんとともに線香を捧げる川添緋砂子さん

「残留孤児・養父母連絡会」（黒竜江省哈爾濱市）を訪問

戦後中国大陸に残された日本人孤児と中国人の養父母のみなさんで組織された「養父母連絡会」（黒竜江省哈爾濱市）を訪問しました。

七三一部隊の旧本館が今は中国残留孤児・養父母の記念館になっており、その中に「養父母連絡会」の事務所がありました。ここ哈爾濱市は、日本の国家「満州国」（当時）の中心都市の一つです。かつて多くの日本人が暮らしていました。彼らは日本の貧しい農村から国策である「満州開拓移民推進計画」（１９３６年８月２５日、閣議決定）によって新天地「満州」に移民しました。でもそこは中国の人々が暮らしていた土地でした。

終戦時、日本政府は「満州」で暮らす日本人を見捨てました。その結果、親を失った(親と離れた)日本人の子ども達が残されました。中国残留孤児です。中国の人達は「日本鬼子」である孤児達を自分の子として育てたのでした。

中国残留孤児・養父母の記念館となっている七三一部隊の旧本館

記念館で説明を聞く旅行団のみなさん

残留孤児・養母らと懇談

旅行団２６人が記念館に入ると、養母の李淑美さん(95歳)が待っていました。

終戦後、食べるものがなく最後に残ったのは肉まん1個と1杯のお粥だけで、日本人が、お金と引き換えに子どもを中国人に売り渡すような状況だった。李さんは、お金で子どもを買うなんてできないと、その娘を引き取って育てることにしました。この娘の母親は5歳の娘を連れて帰ることができず、娘を預けたまま日本に帰国したのです。1980年頃、外事弁（日本の外務省）から連絡があり、日本の母親が娘を探していることを知りました。娘は1981年、日本に一時帰国しました。その後、娘は日本に帰ることになったのです。1996年以降、娘との連絡は取りにくくなっています。それは娘が中国に里帰りすれば日本政府からの支援金(生活保護のこと)が打ち切られるので養父母へ会いに来るのは困難なのです。「我が子のように育てた娘に会いたい気持ちは募るばかりです」と。

帰国できないままの孤児も多い。それは帰国の条件が厳しいこと、中国で築いた生活を捨てなければならないこと、時間が経って証拠が少ないことなどの理由からです。

最後に川添緋砂子さんから、李さんや哈爾濱紅十字会(赤十字)日本留華孤児(中国残留孤児)

養父母連誼会の王立新さん、胡暁彗医師にお礼の言葉を述べ、別れを惜しんでいました。

養母の李淑美さん(右)

養母の李淑美さんと川添緋砂子さん

養母・孤児のみなさんと懇談する旅行団

七三一陳列館で感じたこと

七三一陳列館は日本軍による鬼のような所業と同時に、戦争の犠牲になった日本の子ども達のことも丁寧に展示していました。

この両展示を見て「反日」と感じるとすれば、その人の心は相当歪んでいます。どこにも日本憎しといった内容の展示はありません。むしろ、この両展示を見て心に沸き起こるのは「戦争は善良な人を鬼にし、弱い者が犠牲になる」という普遍の原理です。日曜日なので多くの親子連れが来ていましたが、この子達の胸に去来するのも日本憎しではなく、戦争は嫌だという思いでしょう。

日中両国は二度とこのような悲劇を繰り返してはならないとの思いを強くしました。

七三一陳列館には、日本のエリート医学者が中国人を生きたまま解剖し、血を入れ替え、凍傷にさせ、子どもにも妊娠中の女性にも容赦なく細菌を植え付けるなど残虐な人体実験例が展示されていました。

関わった医師たちは、戦後なんらの罪に問われることなく医学・薬学界の要職を占めました。

ほとんどの中国人はこの事実を知っています。でも、加害国である日本人には知らない人もいるし、事実を否定する人もいます。福岡空港でたまたま同じ飛行機に乗った60代男性は「戦争資料館みたいなのがあるけど、日本人はあんなとこ行かん方がいい。あれが事実やったら日本はとんでもないことをしたことになる。とんでもないことをしたと非難はされていない。ということは、あれは事実じゃない」と豪語していました。

こんなデタラメなことを日本では分別がある年齢の方が堂々と語っています。歴史の真実に向き合うこと、事実を伝え続けることの大切さを感じました。

７３１部隊関連施設　日本軍が証拠隠滅のために破壊したボイラー室の跡

７３１部隊陳列館

陶器で作られた細菌爆弾

凍傷実験展示

日中友好協会福岡県連合会のよびかけ
中国残留邦人帰国者２世　　「人間らしく生きたい」！！
～～国会請願署名に全国１万２千筆超～～

中国残留邦人帰国者２世の国会請願の内容は、「『新・支援法』を改正して支援給付金と老齢年金の満額支給の全部若しくは一部を適用する、又は、新支援法とは別の生活支援スキームを創設するなどして、生活保護とは異なる老後の生活保障を行うこと」など３項目です。

昨年の３月から始めた署名は、日中友好協会の全面的な支援のもと今年の１０月６日現在、全国的に総計１万２千筆を超える署名が寄せられています。

帰国者１世に励まされ「２世の会」が発足

帰国者１世のみなさんの運動が実り、２００８年４月１日、「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律の改正法（新・支援法）」が施行され、老齢基礎年金の満額給付やいわゆる支援給付制度の創設等の新たな支援策が実施されました。ところが帰国者２世については一切適用されず、２世の生活は経済的に困窮し、多くが生活保護に頼らざるをえない状況です。

人間らしく生きたいという思いが募り、苦難のたたかいを体験した１世のみなさんに励まされて２０１４年２月２３日、「福岡県中国帰国者２世の会」が発足したのです。熊本、長崎にも広がっています。

弁護士・日中友好協会など支援の輪が広がる！

中国残留孤児帰国者１世と２世の会、支援する弁護士や日中友好協会員らが参加して、福岡市天神のパルコ前をはじめ、博多駅やメーデー会場などで請願署名への協力を呼びかけました。

2019年10月6日、天神署名行動に参加した中原昌孝弁護士は、「日本の敗戦時、中国残留孤児は、幼くして中国に取り残され、40歳、50歳を超えて、ようやく祖国日本に帰国できましたが、日本語も話せず、ふさわしい就職先も斡旋されないまま、低賃金・過酷な労働を余儀なくされ、貧しい生活を強いられてきました。しかし、このような境遇は、国の満州移民政策や日本軍による民間人の置き去り、国の引揚事業の放置と遅れという戦前、戦後の国策がもたらしたものであって、中国帰国者自身の責任によるものではありませんでした。そこで、「残留孤児」１世が裁判を起こして勝ち取った「新・支援法」が帰国２世には適用されていません。高齢化を迎えた今日、かつての1世と同様に、生活保護に頼らざるを得ない人が６割以上もいます。国がこれまで2世に対する有効な支援策を全く講じてこなかったことによるもので、中国帰国者自身の責任といえるものではありません。」と訴えました。

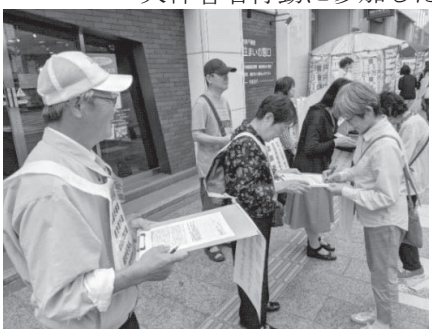
戦争は二度とあってはいけない！

川添緋砂子九州帰国者の会事務局長は、「戦争は私たちのような犠牲者をつくりました。帰国者２世も戦争の犠牲者です。帰国が遅れたのは国の責任です。」と帰国者２世が人間らしく生きたいという願いがかなえられるよう署名への協力を呼びかけました。

署名を訴える川添緋砂子さん

横断幕を持つ木村琴江会長と日高秀子さん

天神署名行動に参加したみなさん（２０１９年１０月６日）



署名のお願いをする小島北天さん

署名を訴える中原昌孝弁護士

署名の問い合わせ

日中友好協会福岡県連合会

星野　信（ほしのまこと　７６歳）　携帯電話　０９０－６４２８－００１２

日中友好協会全国理事

日中友好協会福岡県連合会副理事長

満蒙の地「方正」のうた

開拓団逃避行の歌

国は違えど同じ犠牲者

作詞.構成　　千秋昌弘

作　曲　　森　二三

はじめに

第二次世界大戦では、8000 万人余の人が亡くなりました。ホロコーストで 570 万人、中国人約 2000 万人、日本人約 300 万人、

満洲で戦争中亡くなった日本人は 24 万 5 千人にものぼり、これは広島・長崎 21 万人、沖縄戦 19 万人、東京大空襲 97000 人を大きく凌ぐ、非常に多くの犠牲者となりました。

開拓団の総ては、日本政府に捨てられ、満州国政府に捨てられ、関東軍に捨てられてきました。そのことは何故か今日まで日本政府も国連も世界世論も取り上げず今日に至っています。しかし非業の死を遂げた事実は、消すことのできない冷酷な事実であります。

中国東北部満州では、1945 年 8 月 9 日ソ連軍の参戦以降、関東軍からも見放され、敵の攻撃のさなかに、何の武器も持たぬ、女性と年老いた老人、子供達が敵前に放り出されたのです。終戦すら知らされず、飢えや、零下 35 度の寒さ、疲労、疾病で命を落とし、日本へ、故郷へ帰りつきたい一心で死の彷徨、逃避行は続いたのです。

ソ連軍による爆撃や強姦、現地匪賊の略奪、暴行。

日本軍が侵略戦争で行ってきたことが、そっくりそのまま、何の罪もない満蒙開拓団の逃避行の人々に押し寄せてきたのです。

過酷な逃避行を生き抜いた人たちも、80 歳、90 歳になって、今語らねば、と、辛い、酷いあの日々を、後世に語り継いでくれています。

今、歴史の事実を、事実として受け止め、知らされて来なかった、事実を受け止め、ここから、今から、出発していこうではありませんか。

第 1 章　　大陸の花嫁

（ BGM 1 ）

1931 年関東軍が引き起こした満州事変から中国侵略が始まりました。

翌 32 年には中国東北部に満州国を作り、国策として貧しい日本中の農山村から 1100 団の開拓団 22 万人余に加え、8 万人余の満蒙開拓青少年義勇隊が満州の地に送り込まれました。

M 1　大陸の花嫁

満洲は広く
耕す畑は
地平線まで続くよ
開拓団が
花嫁を迎えるよ
鉄道と
資源を活かして
アジアの国と
共に栄えるよ
国中挙げて
満洲へ

関東軍が守ってくれる
満洲へ

第二章：開拓団逃避行の歌

（BGM２）

終戦直前の８月９日、ソ連軍の参戦により、開拓団は、爆撃、略奪、暴行、強姦、飢えと寒さ、伝染病に苛（さいな）まれ、終戦も知らされず、日本への帰国を夢見ながら、死の彷徨、逃避行を続けました。

橋という橋は、後退する関東軍がソ連の侵攻を少しでも遅らせようと破壊していったため、開拓団は激流に立ち往生し、老人たちは自ら激流に呑まれ、幼子（おさなご）と一緒に川に呑まれる母たちや、幼子（おさなご）を手離して流してしまう母も数多くいました。

ハルピン郊外、黒竜江省方正（こくりゅうこうしょうほうまさ）でも、命がけの逃避行が続いていました。

M2　方正はいくさを物語る（開拓団逃避行の歌）

見渡すばかりの
トウモロコシ
地平線に広がって
過去のいくさを物語る

ここ方正（ほうまさ）から
ハルピン目指す
開拓団の
逃避行

子ども
年寄り
妊婦も混じり
ハルピン目指す

飢えと寒さに
乳飲み子は死んだ
道端に穴を掘り
やむなくわが子
葬（ほうむ）った

生きておくれと
現地に子どもを預け
逃避行は続く

葬る穴は
日に日に深くなり
ハルピン
着いた

第３章　残留妻と子どもたち

(BGM3)

やっと辿り着いたハルピン収容所には3500人余の日本人がいました。

飢えと寒さと病気で、翌春（よくはる）までに2000人余が死んでいきました。

このままでは、家族全員が死んでしまうと、自分の身を中国人に売り、
必死に生きた一人の女性、その間に生まれ、中国人として育つ子どもたち

M3-Ⅰ　お母さん会いたいです

お母さん、
会いたいです
逃避行の末に
家族の命と
引き換えに
身売りした母
その間に生まれた私
母は籍に入れてもらえず
それでもたくさんの子を産みました。
父はリーベンクイズ（日本鬼子）と叫び
母の里帰りに
私だけは手放さず
母と会えなくなりました
私は７人目の末娘
私にとっては
かけがえのない両親
あの戦争が家族を引き裂いてしまいました
日本と中国が仲良くなって
家族を救って下さい
お母さんに会いたい
オカアサン
会いたいです

M3-Ⅱ　娘に会いたい

娘を日本に呼びたい
里帰りの時
日本に溶け込んだ
日本でやっていける子

娘から手紙がいっぱい
父親の許しなしに
帰れない
独り立ちしたら
帰れるようにして下さい

お母さんに会えなくても
強い人間になります
生きてさえいれば
きっと

第４章　残留孤児

（BGM４）

敗戦後、方正には北満洲から 8000 人が越冬することになりましたが、そのうち 3000 人は、越冬は困難とハルピンに向かいました。途中で 2000 人が凍死・餓死しハルピンに辿り着いたのは 1000 人だけでした。

方正では 5000 人が越冬しましたが、3000 人が凍死・餓死し、1000 人は残留婦人となり中国人と結婚し、残り 1000 人の子どもたちは、方正の農家に孤児として引き取られて行きました。

M４-Ⅰ　戦後 40 年ぶりに帰国した残留孤児

40 年ぶりに帰った日本
日本語自由に話せずに
いじめと差別
夫は喋れず仕事なし
子供 3 人高卒にと
食費も切り詰め
切り詰めて
必死で生きる

姉や弟のように
逃げまどう中で
殺されないように
父や母のように

飢えと寒さで
死なないように

残留孤児の歴史
繰り返さないように
お願いします

Ｍ４－Ⅱ　　二人の母に感謝

私は病気の母と妹と
逃避行を続けていました
養父母は見かねて
家に招き入れてくれました

私と妹はそれぞれ
中国の家に
貰われました
あのままでは
きっと誰か
命を落としていたに違いありません

私は中国で
大人になりました
すっかり日本語を忘れてしまいました

帰国できる日を楽しみに
日本語を学び
今は日本で生きています

日本のお母さんありがとう
中国のお母さんありがとう
私は残留孤児として
多くの人の力になって
生きていきます

二人の愛に
心から感謝します

第５章：国は違えど同じ犠牲者

（BGM５）

満蒙開拓団の逃避行では８万人、引き揚げ直後の疲労死を含め９万人、３人に一人が命を

落としました。
　現地に残った残留妻や残留孤児の苦しみは、今も完全に解決はされていません。
　日本に帰国した家族も、苦労が絶えませんでした。

　集団自決で、奇跡的に生き残った女性は、日中国交正常化後、方正（ほうまさ）の日本人公墓を訪れ、祈りを捧げました。

M５　方正の青い空（国は違えど同じ犠牲者）

　満蒙の小さな丘
　赤いカンナとヒマワリが
　日本人公墓
　飾ってる

　敗戦直前
　軍隊は逃げ
　開拓団は逃避行
　飢えと寒さに
　命を落とす

　国は違えど同じ人間
　敵味方なく
　みな犠牲者
　あのいくさ
　もう
　繰り返すまい

　方正の青い空
　地平線に連なって
　平和の風よ
　吹き渡れ

第６章　日本人公墓

（BGM6）

　土塊（つちくれ）の中で野ざらしにされた遺骨は、方正地区残留婦人により発見され、「ここで死んだ日本人民もまた侵略戦争の犠牲者である」と、中国政府の手によって方正地区日本人公墓として 1963 年に建立され、4500 体の遺骨が埋葬されました。大陸で唯一の日本人公墓は、日中友好交流の象徴であり、架け橋でもあるのです。

M6　日本人公墓

方正は
おだやかに
迎え入れてくれた

養父母の墓に
掌を合わせて
敵の子を育てた
広い心に
ありがとう
掌を合わせて

中国が建てた
方正の
日本人公墓は
話しかける

歴史から消すことなく
なぜここに眠っているのか
いつまでも
忘れないで
忘れないでください

第７章　新しい時代

M7　新しい時代

新しい時代の
扉が開く
中国も日本、
朝鮮もロシアも.
アメリカもどの国も
平和の歌を
歌いだす

青い空.青い海
青い地球は
みんなのもの
いくさの歴史乗り越えて
友好の輪が
歌いだす

手をつなごう
笑顔交わそう
世界中のすべての人と
揺るがぬ平和
ともにつくろう

今
新しい時代が
歌いだす

（ちあき・まさひろ：1943 東京生まれ。元大阪府大東市市会議員。現在、大阪の男声合唱団「昴」の団長。また、関西紫金草合唱団ではテノール歌手。各地でリサイタルを行い、二度と過ちを繰り返さないためにもと、日中友好交流に取り組んでいる）

朝日新聞（2019 年 6 月 15 日付）より転載

極寒の地に果てた開拓団の人々

無職　丸山　勝子（福岡県　86）

子供の頃、旧満州（中国東北部）の撫順駅の近くに住んでいた。敗戦から間もないある日、線路上を延々と、長蛇の列をなして歩いてくる人たちを見た。道程の長さ、悲惨さは明らかだった。髪はぼさぼさ、顔も手足も泥だらけ。着衣はぼろぼろで、腰にむしろを巻きつけただけの人もいる。満蒙開拓団の人たちだった。

隣組で話し合い、母たちが米などを持ち寄って炊き出しを始めたが、焼け石に水とはこのこと。いくら用意しても足りない。自分たちの食糧まで欠乏してしまうという不安に襲われ、炊き出しは数日で中止となった。

その人たちは私が通っていた小学校に移ることになった。治安が悪く外出禁止となったので情報はそこで途絶えた。だが、極寒の冬が過ぎようとする頃、耳にした。「小学校は講堂も運動場も死体の山だ。凍死も餓死もあったようだ」

大好きな煉瓦造りの学舎、楽しく遊んだ校庭のスケートリンク。懐かしく蘇る数々の映像も最後は重々しく闇に沈んでしまうのだ。

10月21日（月）

週刊 うたごえ

中国の日本人墓地の歴史

開拓団逃避行の歌
「満蒙の地『方正（ほうまさ）』のうた」

千秋昌弘（男声合唱団昴団長、元大東市会議員）

合唱構成「紫金草物語」（大門高子：詞、大西進：作曲、山下和子・張勇：編曲）を持って何度も中国公演を行ってきた大阪・男声合唱団昴団長千秋昌弘さん。昨年、日中交流ツアーで訪れた「方正」で戦前の満蒙開拓団の犠牲者が眠る日本人墓地を知る。この事実を伝えようと「満蒙の地『方正』のうた」を作り（その1曲、楽譜7面）、歌い広めている。歌の背景、千秋さんから。

▲ハルビン東方約180キロの方正に、日本の方を向いて建つ日本人公墓

私は、これまで合唱構成「紫金草物語」公演で何度も中国・南京、北京をを訪れ、ソロもさせてもらってきましたが、昨年10月、「方正」を訪れ初めて日本人墓地の存在を知りました。

日本の侵略戦争の犠牲、開拓団の終戦直後の逃避行は8万人（引き揚げ後の疲労死含むと9万人）もが亡くなっていた。知らなかった、知らされてこなかったこの事実を今からでも知らせなければと、体験者からの話、資料を元に「満蒙の地『方正』のうた」（千秋昌弘作詞、森二三作曲。セリフ、5曲約17分。YouTubeでアップ）を作りました。

▲両脇の方正公墓と新石碑

国策で送られた30万人の「開拓団」

1931年、日本軍・関東軍が引き起こした満州事変から日本の中国侵略が始まります。日本は翌32年、中国東北部に満州国をつくり、国策で貧しい日本中の農山村から1100の開拓団22万人、加えて8万人の満蒙開拓青少年義勇隊を満州に送り込みました。

終戦直前の8月9日、ソ連軍の参戦で開拓団は、爆撃、略奪、暴行、強姦、飢えと寒さ、伝染病に苛まれ、終戦も知らされず、日本への帰国を夢見ながら、死の彷徨、逃避行を続けました。

▲千秋さんのソロステージより

命がけの逃避行そして…

ハルビン郊外黒竜江省方正でも命がけの逃避行が続いていました。翌1946年春、やっとハルビン収容所に辿り着きましたが、3500人余のうち2000人余が飢えと寒さ、病気で死んでいきました。このままでは家族全員が死んでしまうと、自分の身を中国人に売り、必死に生きる残留妻。その間に生まれ、中国人として育つ子どもたち。方正収容所でも46年春までに5000人余のうち3500人が死んでいきました。

土塊の中で野ざらしになった遺骨は、方正地区残留婦人により発見され、「ここで死んだ日本人民は、侵略戦争の同じ犠牲者だ」と1963年、中国政府によって方正地区日本人公墓が建立され、4500体もの遺骨が埋葬されました。

地元民に守られる日本人公墓

その後の文化大革命時、「日本人公墓を潰せ」の声が上がりましたが、「ここで眠っているのは軍人ではない。国は違えど同じ犠牲者だ」と、現在も守られ、方正地区日本人公墓は静かに建っています。

「国は違えど同じ戦争の犠牲者」と墓を建立

開拓団は、日本政府に捨てられ、満州国政府に捨てられ、関東軍に捨てられてきました。そのことは何故か今日まで、日本政府も国連も世界世論も取り上げずに至っています。しかし、非業の死、冷酷な事実は消すことはできません。

私はこの歌を平和のつどいなどで独唱しています。混声版もあります。ぜひ、集会や学習会で活用し、各合唱団で歌い広げていただけたらと思います。

☎090・8939・5743。fabpy908@dsk.zaq.ne.jp。

▲昨年の日中友好ツアーで「紫金草物語」他を。（ハルビン公演、指揮：本並美徳）

『日中未来遺産』を上梓して

―藤原長作氏の「記憶」を日中の未来に向けた「遺産」に―

岡田 実

『星火方正』25 号に、拙文「「平和の時代のベチューイン」藤原長作と「旅日僑郷」方正県を訪ねて」を掲載していただいたのは 2017 年 12 月であった。

翌 2018 年 12 月、中国は「改革開放」40 周年を迎えた。中国はこの 40 年間、世界第二の経済大国へと急速な発展を遂げたが、その初期、“草の根”で黙々と汗を流し、農村の発展を支えた日本人たちがいたことは、日中双方の国民にあまり知られていない。

2019 年 7 月、日本僑報社から上梓した拙著『日中未来遺産―中国・改革開放の中の“草の根”日中開発協力の「記憶」』（拓殖大学研究叢書）は、「戦争の記憶」が色濃く残る中国で、顕著な成果を挙げた日本人４人の「開発協力の記憶」にスポットライトを当て、その軌跡を辿ったものである。

中国唯一の「日本人公墓」がある黒龍江省方正県で寒冷地稲作技術を伝えた藤原長作氏、中国全土でコメの増産に貢献した原正市氏、スイカの品種改良に心血を注ぎ、北京の人気銘柄に名前の一文字が採用された森田欣一氏、“一村一品”運動が中国でも広く受容された平松守彦氏……。

現在を生きる我々が、未来へと伝えていかなければならない日中の「記憶」とは何か。これが本書の「問い」でもある。

拙著の読みどころについては、筆者の贅言を費やすまでもなく、近藤大博氏が「サイエンス・ポータル・チャイナ」に寄稿された以下の書評をご覧いただきたい。

書評：『日中未来遺産―中国・改革開放の中の"草の根"日中開発協力の「記憶」』

近藤大博（日本国際情報学会会長）

まず、本書は、タイトルがよい。

中国の改革開放下、「民間ベースでの"草の根"日中開発協力」が行われてきた。本書には、日中両国民間で、それらが正当に評価され、「ある歴史的出来事を記念・顕彰する行為」＝「コメモレイション（commemoration）」として認知され、「公共の記憶」として定着するようにと願いがこめられている。それが実現すれば、「日中の未来に向けた『遺産』となり、日中和解プロセスを進展させる基盤となる」との、筆者の信念を、十二分に明示する、そして感受させるタイトルだ。

筆者は、日本人４人の「開発協力」を紹介し、日中の未来を考える。

第一章は、敗戦時、日本人開拓団の5000人余の犠牲者を出した黒竜江省方正県を舞台とする。開拓団の遺骨は、方正県政府により、「日本人公墓」として手厚く葬られている。また、生死の境にいた日本人女性や子ども数千人もが、中国人の家庭に引き取られた。

こうしたコメモレイションの地で、岩手県の農民・藤原長作が、日中友好事業に身をささげた経緯を詳述している。藤原は、古稀の年、1981年を皮切りに、方正県に6回にわたり自費で赴き、無償で寒地水稲乾育栽培技術を伝授し、水稲増産に貢献した。

第二章は、藤原とほぼ同時期に、活動を始めた原正市を取り上げている。原は、北海道農業試験場を定年退職後、1982年から99年までの17年間に、合計49回もの訪中を行い、三市二四省を巡回し、中国全土のコメ増産に寄与した。原は、「洋財神（外国から来て懐を豊かにしてくれた神様）」とまで称賛された。

第三章は、北京市民に大人気のスイカにまつわる。1987年、その年、71歳になった千葉県の森田欣一が、北京蔬菜研究センターに協力し、育種と交配で、大きく、皮が薄く、甘いスイカ作りに成功したのだ。そのスイカは、北京の「京」と欣一の「欣」から、「京欣一号」と命名された。

第四章は、平松守彦が大分県知事時代に提唱した一村一品運動についてである。同運動は、中国で農業政策の綱要に取り入れられ、2010年以降、再度脚光を浴び、新たな展開を見せた。現在も、「一村一品、一郷（県）一業」と推進され、農村観光を含む多様な開発につなが

っている。

上記 4 人が、中国で何度となく表彰されていること、藤原や原は、記念碑や胸像まで建立されていることを、本書は紹介している。また、1998 年、江沢民主席は、史上初の国家主席として公式訪日した際、北海道に赴き、原、森田など農業関係者に、謝意を込めて面会している。

筆者は、終章にあたる「おわりに」で、「断片化・潜在化されたコメモレイションをいかに『公共の記憶』として再構築するか」が課題だと問題提起し、「よりバランスのとれた新しい日中の『公共の記憶』を醸成していく」ことが肝要だと、熱く説いている。本書が、日中両国民に、「未来遺産」として、広く共有されることを期待したい。さらには、中国語訳の出版をも期待したい。

科学技術振興機構ウェブサイト「サイエンス・ポータル・チャイナ」より
https://spc.jst.go.jp/enjoy/bookreview/books_19_02.html

藤原長作氏の活動については、北京日本人学術交流会の代表である山口直樹氏も関心を寄せられ、『星火方正』25 号の拙文を引用しつつ、以下の論考を発表されている。ご一読いただければ幸いである。

山口直樹「日本に伝わらず埋もれている稲作技術者、藤原長作の業績を考える」『葦牙（あしかび）ジャーナル』No.139、2018 年 12 月 15 日発行

また、山口直樹氏のご紹介により、中国国際放送局（CRI）の王小燕氏のインタビュー番組に出演する機会を得て、藤原長作氏、スイカ栽培の森田欣一氏などについてお話をさせていただいた。山口氏、王氏に感謝申し上げたい。

今後も、日中開発協力史の「語り部」として、藤原長作氏をはじめ、日中協力に汗を流した日本人のことをできるかぎり多くの日中両国の国民に知っていただくための努力をしていきたい。

稲作技術者・藤原長作氏が中国に残したもの
http://japanese.cri.cn/20181009/75dfd45c-d43b-abb7-a942-4543e79ca33f.html

中国で愛されるスイカを遺した日本人・森田欣一の記憶
http://japanese.cri.cn/20190903/41435425-f0da-400b-8fe8-5f24dbe5defa.html

（おかだ・みのる：拓殖大学国際学部教授。民間企業に勤務後、国際協力機構（前国際協力事業団、JICA）に奉職。現在、NPO 法人日中未来の会、一般社団法人国際善隣協会などで日中民間交流活動に参加している）

創作書簡集『11 通の手紙』を上梓して

及川 淳子

劉暁波との出会い

「日本政府の公式見解を聞きたいのではなく、日中間の歴史問題について君自身がどう考えているかを知りたいんだ」。

彼はゆっくりと言葉を選びながら、まっすぐに私の目を見てそう言った。低い声がよく響き、特徴のある話し方で、穏やかに諭すようだった。それは、2005 年晩秋の北京で作家の劉暁波を訪ねた時のことだ。1989 年の天安門事件に深く関わり、幾度も逮捕されながら、海外亡命という道を選ばずに中国に留まって執筆活動を続けている理由が知りたかった。徹底した非暴力を貫いて、天安門広場でハンガーストライキを決行したことや、武力衝突を回避すべく戒厳部隊と学生たちとの間で交渉役を担った経験談などを期待したが、それよりもまず先に、私が日本人と知って冒頭の問いかけとなったのだ。

歴史認識の問題、歴史教科書の問題、同年春に中国で発生した反日デモなどについてひとしきり意見を交わした後で、「日中間には不幸な戦争があった。だからこそ、アジアの民主国家である日本は、中国の民主化を支援してほしい」と彼は語った。そして、「劉暁波・中国の反日ムードに関する評論」と記した一枚のフロッピーディスクを手渡された。それは、いまでも私の手元にある。それから数年後に、彼がノーベル平和賞を受賞するとは思いもしなかった頃のことだ。

劉暁波との別れ

つい数日前までメールで連絡を取っていた人が拘束され、二度と会うことが叶わなくなった。2008 年、民主化を訴える文書「08 憲章」を仲間たちと共に発表した劉暁波は逮捕され、国家政権転覆扇動罪で懲役 11 年の重刑に処せられた。

釈放されて次に会えるまでの長い年月を文字で埋めようと考え、私は彼の政治評論を中心に日本での翻訳出版に取り組んだ。読みたいものを読み、書きたいものを書き、会いたい人に会いに行き、そして心のままに語り合う。そうした当たり前の「自由」について考えるようになったのは、劉暁波との出会いと別れを経験したからだ。2010 年に獄中でノーベル平和賞を受賞したが、劉暁波は囚われの身のまま 2017 年に事実上の獄死を遂げ、ついに帰らぬ人となった。

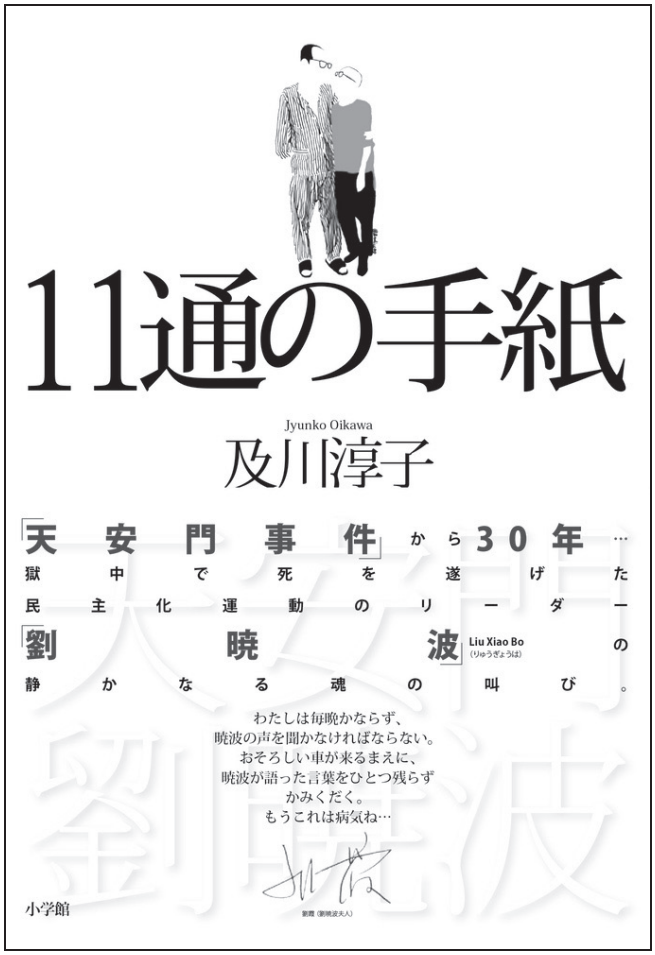
時折、「君自身がどう考えているかを知りたいんだ」という彼の言葉を思い出すことがある。自分の言葉で考え、自分の言葉で語り、自分の言葉で書いて、そうして生きていくことの尊さも、劉暁波との限られた交流を通して学び得たものだ。至上の価値である「自由」のために、自らの「自由」さえも引き換えにして闘い、まさに命を賭した劉暁波の思想と行動を、どのように書くべきか。劉暁波の遺骨は当局の指示で海に散骨させられてしまっ

たために、墓碑を刻むことさえも許されない。それならば、せめて「紙の墓碑」として小さな本を編みたいと考えた。

「紙碑」を刻む

本書は、劉暁波と天安門事件をモチーフにして「創作書簡集」というスタイルで綴った散文だ。劉暁波から学生へ、新聞記者へ、若い兵士へ、子どもを亡くした母親へ、11 人に宛てた手紙という想定で、言論の自由、報道の自由、学問の自由、思想・良心の自由、様々な「自由」の価値について平易な言葉で記した。研究者が「創作」という表現方法を用いることに当初は迷いもあったが、学術論文では書けないものを手紙に託したいと考え、『11 通の手紙』を上梓した。

手紙の冒頭に記した「あの日」は 30 年前の天安門事件だけでなく、「自由」や「平和」が奪われた日でもある。だが、「あの日」は中国の過去だけではない。「あの日」が私たちの未来にならないために、本当の「自由」について考え、行動することの大切さを、劉暁波からの手紙に託して伝えることができればと願っている。



（おいかわ・じゅんこ：中央大学准教授。専門は現代中国社会。本書は小学館刊、定価：本体 1200 円＋税。共著に『六四と一九八九』白水社、12 月末刊行予定、『劉暁波と中国民主化のゆくえ』花伝社など、著訳書、論文は多数）

『不条理を生き貫いて　34人の中国残留婦人たち』（津成書院）を上梓して

藤沼　敏子

１．インターネットと書籍と両方で記録する意義

この本は、私のホームページ『アーカイブス　中国残留孤児・残留婦人の証言』http://kikokusya.wixsite.com/kikokusya　から生まれたものです。中国残留孤児・残留婦人等とその支援者、関係者の方々の協力を得て、2000年7月から2019年8月まで、２００人前後の方にインタビューをさせていただきました。その中の中国残留婦人等（「中国残留邦人支援法」対象者。男性、サハリン残留邦人も含まれる。終戦時13歳以上だった方々）34人のインタビューをまとめたものです。

実は、1993年頃よりインタビューをはじめましたが、残念なことにビデオが古すぎてその頃のものはほとんどデジタル処理ができませんでした。また、十数人からはビデオの公開に同意が得られませんでした。しかしどうしても公開してほしいと諦めきれなかった方が、第19章の「孤児たちに慕われた代書屋さん」です。生前、本人がインターネットでの公開を強く望んでおりました。ご遺族と何度かの協議の上、個人が特定されないような小さな削除と変更をして掲載に至りました。インターネット公開されておりませんので、第19章だけは、インタビュー内容の真実性を検証することができません。

以前に帰国者関係の論文を読んでいて、オヤッと思ったことがあります。ある先生への聞き取りがなされたとする日にちには、その先生は移動になっていたはずだったのです。単純な勘違いならいいのですが、その文章を読んで、聞き取り自体が本当に行われたのかどうかさえ、怪しくなりました。また、1995年頃、第2種県営住宅の自治会館で開かれていた日本語教室のボランティアをしていらした、当時８０代だった方からは、南京大虐殺で自分は悪いことをたくさんしたというお話を伺いました。それからしばらくしてボランティアに来なくなり、数年たってから彼の話を残しておきたいと思い、ビデオカメラを持って氷川神社の裏参道にある彼の家を尋ねると、家は壊され塀と門冠りの松だけが残っていました。彼から聞いた話を友人に話してもうまく伝わらず歯がゆい思いをしました。そのボランティア先生は、軍隊では高い地位にあり、高校の校長先生を退任後、罪滅ぼしで中国帰国者にボランティアで日本語を教えていると話されていました。聞いた話は私の記憶の中にありますが、記憶を他人に伝えることがどんなに大変なことかを自覚しました。信憑性を担保するものが何もないからです。

巷にはオーラルヒストリー本、聞き書き集、引揚げ体験記などが溢れています。私はそれら

を読むのが好きでたくさん集めました。それらはほとんどが真実であろうと思います。しかし、上述のとおり、信憑性を担保するものは何もありません。私は疑い深いので、筆者の意向に沿ったオーラルヒストリーになっていないか、聞きたくないことには耳を塞いだ聞き書き集になっていないか、誇張と取り繕いが一片もない引揚げ体験記と言えるのか、といった疑問が湧きます。

この本が、これまでの一般的な聞き書き集と決定的に違うところは、インタビューはノーカットで編集なしでインターネット公開されていますので、本の内容を動画ビデオで検証することができるという点です（第１９章を除いて）。読者がご自身の目や耳で、ビデオを通して証言者の表情、顔に刻まれた皺、息遣い、証言内容を確認することができます。

また、ホームページやYouTubeでは、「声を残すこと」はできますが、体系的に何が言いたくて証言を集めてきたのかが明確に伝わりません。当初は、高齢化し鬼籍に入られる方が多い中、とにかく「声を残すこと（＝インタビューすること）」にだけ力を注いできましたが、インタビューに協力してくださった方々はほとんどが高齢者でインターネットにアクセスできません。お元気なうちに書籍化してお返ししたいと思うようになりました。
彼女たちの経験が多くの方に読まれ、平和の尊さを伝えることができたら、ご自分の辛酸に満ちた不条理な人生を生き貫いてきた意義を、見出し肯定することができるのではないかとの希望を持っています。

２．残留婦人とは

「開拓地」に入った当時の人々

本の最初に上記の２枚の写真を載せました。右は、高島金太郎氏提供、大八浪泰阜村開拓団の昭和16年の写真です。左は、古源良三氏提供の同じく16年の白山郷開拓団の写真です。
最初、表紙に使う写真を選んでいるとき、収穫の喜びにあふれている残留婦人たちの写真を使いたいと思い、左の写真を選んだのでした。この写真に写っている男たちは、昭和18年４月から、次々と召集令状が来て、団を去ることになります。女たちと子供たち、老人たちは、敗戦直後の混乱の中でソ連機の機銃掃射に遭ったり、暴民に襲われたり、収容所で病死したり餓死したり、一時現地人のお世話になるとかしましたが、その中の約半数の方が帰国することができました。終戦直後の混乱を何とか生き残り、諸般の事情で帰国できなかった人は、残留婦人、残留孤児となりました。

しかし、右の写真を見たら、多くの方が残留孤児を想像することでしょう。残留婦人を想起する人はたぶん少ないと思われます。この写真に写っている少年少女たちが、この時９才以上だったならば、終戦時13歳以上となり、間違いなく残留婦人（邦人）となり、「自分の意志で残った（自由意思残留者）」とされました。そして彼女たちの多くは童養媳（トンヤンシー）[1]

になり、早い人は15歳で結婚し、やがて数十年、日本社会から忘れられて、貧しい農村で暮らすことになったのです。

敗戦時12歳ながら、残留婦人とほとんど同じ経験をした方も数名いらっしゃいますが、その方々は、近刊予定『あの戦争さえなかったら　〇〇人の中国・サハリン残留邦人たち（仮タイトル）』の中に、収録させていただきます。なぜこの仕訳に従うかというと、残留婦人等と残留孤児では、日中国交回復後の帰国支援に大きな違いが生じたためです。残留婦人たちは自由意志残留者、引揚げ帰国は個人的問題で国がかかわる筋合いはないと、支援の手は長く届かず帰国できませんでした。１９９４年にできた中国残留邦人等支援法（旧支援法 ）で、希望すれば永住帰国できるようになりましたが、それまでの彼女たちの辛酸は想像を超えるものがあり、この仕訳がその原因であり、二世も高齢になってから帰国するという事になり、新たな二世の生活問題 を生み出した原因にもなっています。

また、厚労省が発表している残留婦人の帰国者数は国費帰国者のみです。親類や支援団体などの援助、中国で旅費を工面して帰国した多くの自費帰国者がこの人数からは漏れています。この本にも自費帰国した残留婦人のお話がたくさん載っています。新支援法ができた後も、支援金を貰っていない、あるいは、貰えていない帰国者が結構いるので、支援金受給者の数からも正確には把握することができません。

３．満蒙開拓から何を学ぶか

満蒙開拓の実相や樺太がサハリンとなって、その後日本に帰れなくてそこに住んでいた人々の動向などから、実は現在につながる重要な課題が浮かび上がってきます。貧しい農村の人々がどのように満蒙開拓に行くことになったのか。どのような役割を国から担わされたのか。敗戦直後の旧満州で何があったのか。開拓民はどのように国に捨てられたのか。引揚はなぜ多くの犠牲者を餓死させるほどに遅れたのか。引揚げ主要港で、なぜ堕胎が国の音頭[2]で実現したのか。なぜ、残留邦人たちは長い間帰国を阻まれたのか。満蒙開拓とは何だったのか。

ひとりひとりの証言は、出来事としての個人の歴史を語っています。その背後から自然に浮かび上がってくるもの、見えてくるもの。それらから、私たちの「今を見る目」が開かれるのです。教科書などで知ることのできない原史料として、証言は私たちに「歴史」を教えてくれます。憲法の前文に込められた平和の尊さを思い起こさせてくれます。

ですから、活字の苦手な若い方には、彼らが確かに存在した証（あかし）、YouTubeの残留婦人たちの生の声を聞いていただきたいと思っています。教科書に書いてない満蒙開拓の史実を知っていただきたいと思います。

私は歴史学者のような歴史を描きたいのではありませんが、絶えず満蒙開拓とは何だったのか、先の戦争とは何だったのか、という考えが頭をよぎります。市井の人々にとっての満蒙開拓、先の戦争とは。

歴史を次に継承していくには、歴史学者に任せるのではなく、市民レベルで「何があったのか」を記録し検証していかなくてはなりません。それには、語る人（証言者）と聞く人（私）がいて、それを本で読んでくれる人、インターネットで聞いてくれる人が必要です。時の権力者と日本の軍部、関東軍とのパワーゲームの様相を描いた満蒙開拓ではなくて、「小さな人」の声を集め、「小さな人」の声を通して満蒙開拓と先の戦争の真実に近づきたいと思います。あの戦争がどういうものだったのか。「小さな人」たちは、どう生きたのか、死んだのか。あの戦争を生き貫いて、今を奇跡的に生きている34人の残留婦人たちの生の声、生き様を後世に伝えるのが、本書のねらいです。

４．性被害について

最近、黒川開拓団のことがマスコミで取り上げられ注目を集めています。この本では、多くの方が性被害の状況を見聞きし語っています。注意深く行間を読んでいただければ、ご本人のことだとわかる場合もありますが、その事を敢えて記したいとは思いません。コーリャン畑の

トイレに行って汚れ物を拾ってきて、自分は生理だとソ連兵に見せて難を逃れる話は、その日常的な証言の背景を想像するとリアリティーで迫ってきます。多くの方がそれぞれの収容所などで、ソ連兵から「女を出せ」と言われ、数人が犠牲になったという話は日常的にありました。

例えば、証言一部抜粋「方正（の収容所）さ行ったら、ソ連の兵隊が来てよ。うちの姉ちゃんが、ちょうど20歳過ぎて、結婚したばかりの姉ちゃん。それが、日本人のじいちゃんが、誰かに合図したんだな。５人だか６人だか、犠牲になった。ソ連人は、女ば誰かれかまわず、女であれば引っ張って行って。うちの姉ちゃんは犠牲になって、引っ張られて行って、２、３日して亡くなった。５、６人連れてかれた中の１人だったの、うちの４番目の姉ちゃんは。どうして殺されたかもわかんねえ。その中の何人ぐらい帰ってこられたのか、なんだか、わからねえわ。」

以前、「身捨つるほどの祖国はありや（寺山修司）」というタイトルで、2016年08月24日のホームページのブログに「命だけ残しなさい」の言外の意味について書かせていただきました。下記に一部転載補稿致します。

これまでのインタビューで、集団自決に追いやられ、奇跡的に生き残った方が数人登場しています。当時の時代背景、皇民化教育で育まれた価値観や倫理観、例えば「生きて虜囚の辱めを受けず」や「凌辱よりは死を」の、玉砕を美化した考え方が支配的だった当時にあって、それを否定して生きることは難しかったものと容易に想像ができます。それは、軍隊にあっては桜花作戦（人間爆弾、タコツボ作戦）や特攻隊などに如実に現れていて、異を唱えることは、死をも意味する結果になったかも知れません。真岡郵便電信局の乙女たちの集団自決の評価からもわかる通り、純潔を守るため集団自決を選ぶことが大和撫子の誇りとして、広く長く讃えられました。

しかし、そんな時代にありながらも、「命だけ残しなさい」を合言葉に、たくさんの残留婦人たちが生き貫いていました。その辛酸極まりない生活は、「生き抜く」のではなく、強い意志で何があっても生きることを貫く。「生き貫く」なのです。それは、ある場合には死よりもつらいことだったに違いありません。

私はとても鈍感な所があって、いろいろなことに気づかない。ずいぶん後になって、同じことを言っている人が数名いることに気が付きました。「命だけ残しなさい」その言葉が澱になって、どこかにずっと引っかかっていました。ある日、取材ビデオを見返していると、「命だけ残しなさい」の言外の意味が浮かんできました。

嫌な言い方ですが、残留婦人たちは、「侵略戦争のツケを払わせられた」という言い方をよくされます。命以外のもの、処女性、純潔性、貞操感、人としての誇り、家族への愛情、夫への情念、自尊心、信念、夢、、、それらをすべて捨て去ってもなお残る命への執着。誰も責められません。むしろその中で身を任せて生きることのほうが、どれだけつらかったか知れません。

ある人は、生きるために「嫁らにゃしょうがないもんで」現地の人の嫁になって、命を繋ぎました。またある人は、逃げないように顔に焼け火箸を当てられて大きな火傷の跡を付けられ、家畜のように奴隷のように生きてきました。またある人は、第一夫人がいて、第二夫人として引き取られ、寝床は家畜と一緒だった。想像を絶する辛酸を舐め、自分ではどうすることもできない悲惨な生活を生き貫いて来て、今、残留婦人たちは日本で暮らしているのです。

５．祖国は何をしたのか

しかし、祖国はけっして優しくなかった。最初の頃は、中国人と結婚したため、日本に国籍があっても、外国人として扱われた。そして、親族の同意がなければ・・・、身元引受人がいなければ・・・、交通費を工面しなければ・・・、日本に帰ることさえできませんでした。

成田空港に泊まり込んだ「１２人の強行帰国」は記憶にある方も多いと思います。世間の注目を集め、それがきっかけになって、紆余曲折の末、初めて支援法ができて、生活保護以外の生活支援策ができたのです。それまでは、孫に数十円の小遣いをあげても、久しぶりに遊びに来た娘にお昼ご飯を出しても、「そんな余裕があるなら、生活保護を打ち切るぞ」と、ケース

ワーカーから咎めだてされるような生活でした。中国の養父母が病気になって、中国でゆっくり看病したいと思っても、中国に滞在している期間は、生活保護が打ち切られました。「自由がない」と、多くの方々が感じていました。

６．現在の残留婦人たち・残留孤児たち

支援法ができても、新支援法ができても、多くの課題は解決されていません。生活保護が唯一の生活保障手段だった頃、私たち[3]は「残留婦人たちを生活保護のまま死なせたくない」という思いが一致し、東京で中国帰国者裁判の先行裁判[4]を立ち上げました。裁判は全国の残留孤児裁判へと広がり、結果、新支援法ができましたが、帰国者の現実に即したものにはなっていませんでした。様々な制限付きのものでした。

親類の援助で、1972年の日中国交回復の数年前に帰ってきたAさん[5]は支援金の対象外です。息子と同居しているBさんも総世帯収入が多いので、支援金を受けられません。世帯分離も要件に合わないと拒否されました。1円でも高い時給のところに移動し、昼も夜も働いて、爪に火を灯すように節約生活をして、自分の家を持つことが彼らの夢でした。ところが、家を持っているから、財産があるから、支援金は受給できない。500万円以上の貯蓄があるから支援金は受給できない。生活保護を受給していた方はすんなり支援金に移行できました。しかし早期に帰ってきて早期に生活保護を打ち切り、一生懸命働いてお金をためて家を建てた人々は打ちのめされました。

例えば、Aさんの場合は、住宅ローンも財産の一部とカウントされ、支援金は受けられませんでしたが、とっくに住宅ローンを払い終わっていたBさんは、持ち家でも支援給付金を受けられたということです。また、CさんDさんは、帰国以来住んでいる公営住宅（かなり老朽化しており、近い将来取り壊しが予想される）に名目上住まいがあります。しかし、二人とも高齢で買い物や食事の支度などができなくなり、娘の家や息子の家で世話になりながら支援金は貰い続けています。息子がたまに郵便物を取りに行きます。デイサービスも子供の家に迎えに来るということなので、「一時的なこと」として、行政も大目に見ているのかも知れません。しかし、そのように帰国者に寄り添った好意的な行政ばかりではありません。

Eさんは、息子の建てた新築の家の一番いい部屋を与えられ、同居したとたん、支援金が打ち切られました。医療費の負担にも耐えかねて、またアパートを借りて一人暮らしに戻り支援金を貰うようになりました。Eさんは90歳前後です。息子家族が毎日車で食事を届けているとはいえ、このような不自然な別居を強いる新支援法って何でしょう。東京都の元ケースワーカーの友人に聞きましたところ、世帯分離は広く認められていて、皆さんそうなさっているとのこと。地方では、世帯分離が厳格に運用されているところもあって、Eさんのような悲劇が起こっています。反対にFさんの場合。娘さん家族は、Fさんが入居している公営住宅のすぐ近くに家を建てました。徒歩1分もかかりません。Fさんはほとんどの時間を新居で過ごしています。時々、公営住宅の電気メーターと水道メーターを動かすというアリバイ作りのために、公営住宅に行きます。

このような不自然な現実を生む新支援法の盲点は、支援金支給にあたって、様々な制限を設けたことに起因しています。特に所得制限などを全廃し、すべての残留婦人たち、残留孤児たちに支援金を支給すべきだと思います。日中国交断絶の長い間、帰国したくても自分の意志では帰国できず、不条理を生き貫いてきたのですから。国は在外邦人の帰国援護を、国交正常化後も怠ってきたのですから。

7. これからの出版予定

この本は、全体で４冊の連作の１冊目です。発刊順は以下のとおり（書名は変更もあり）。

というように、第1作で告知しました。

第１作『不条理を生き貫いて　　34人の中国残留婦人たち』（アマゾンで発売中）
第２作『不条理を生き貫いて　　74人の中国残留孤児たち』（近刊予定）
第３作『不条理を生き貫いて　　40人のWWⅡ　奇跡の証言集』（近刊予定）
第４作『中国帰国者の福祉　歴史と援護政策』（未定）

しかし、書名に変更があり、第２作は『あの戦争さえなかったら　　○○人の中国・サハリン残留邦人たち（孤児編）』（仮タイトル）となる予定です。原稿量が多く、2冊にすべきか悩みましたが、孤児の自伝や聞き書き集はたくさんあるので、なんとか1冊にまとめるため、取捨選択という非常につらい作業をしています。マスコミに取り上げられたことのない集団自決を奇跡的に生き残った方の話や孤児として何度も自分が売買されて大人になった方の話や、子ども時代に近所に住んでいて一緒に遊んだ友達が、大人になってから兄弟だったとわかった方の話や、家畜のように奴隷のように育った方の話、未認定の孤児の話などが掲載されます。また、2000年に撫順在住の養父母と中日友好楼の養父母にもお話を伺いましたので、孤児と合わせて掲載予定です。

第３作『WWⅡ　○○人の奇跡の証言集』（近刊予定）

中国残留孤児・残留婦人のインタビューに全国を回っていると、現地の支援者から、「中国帰国者とは関係ないのだけれど、こんな人がいるから、インタビューしてみたら」と、薦められることがありました。また、友人から、「私の母はハルピンで看護婦をしていました。今も元気です」などと聞くと、飛んでいきたくなりました。台湾の温泉が好きで、中長期滞在していると、様々な伝手（つて）で様々な情報が入りインタビューすると、知らないことが多く、私自身とても勉強になりました。思いがけないところから思いもよらない経験をしている方に繋がって、ホームページでは「周辺の証言」として、54人の方に、インタビューさせていただきました。すでに鬼籍に入られた方も多く、振り返って考えると、私のインタビューはインディー・ジョーンズのつり橋のように、渡った（インタビューした）そばから後ろの橋が崩れ落ちるような「奇跡」のインタビューになっていました。それで、第３作は、『WWⅡ　○○人の奇跡の証言集』（近刊予定）というタイトルにしようと思っています。

第４作『中国帰国者の福祉　歴史と援護政策』（未定）

第4作を書くために、これまでやってきたように思うのですが、すでに疲れ果ててしまって、正直、第4作に辿り着けるかどうか、体力・知力ともに自信がありません。第3作を書きあげたら、少しパソコンから離れてゆっくりしたいと思います。むくむくと第4作を書きたいと思うまで、のんびりと怠惰の限りを尽くしたい。睡眠障害や腰痛を直し、朝起きて夜寝て、ほったらかしの庭の手入れと家の中の断捨離もしたい。ずっと「むくむく」が起きないかも知れない。第4作を書きたいというのは私の意志であったはずですし、誰も期待などしていないかも知れないけれど、「書かないかも知れない」と宣言することで、私のストレスは軽減され腰痛は直るかも知れないと思うのです。

（ふじぬま・としこ：日本語教師時代に中国残留婦人と知り合い、日本語教育から中国帰国者の福祉問題に関心が移り、大学院に進学。上智社会福祉専門学校、植草短大等で非常勤講師を務める。2013 年、満蒙開拓平和祈念館オープンに伴い、帰国者へのインタビューを再開。）

---

[1] 童養媳 tóng yǎng xí（トンヤンシー）成年前の幼女，少女を買い育てて将来男児の妻とする旧中国の婚姻制度の一つ。親，子供の世話以外に雑役に使われ，一種の家内奴隷ともみられる。

[2] 拙稿『年表　中国帰国者問題の歴史と援助政策の展開』(1998) の 15 頁。(注 4)コロ島を出港する船の中には女性専用の相談室が設けられていたという⑮。『引揚援護｜の記録(続･続々)』(昭和 25･30･38 年)では、検疫所内に特殊婦人相談所があったことへの言及がある。「上陸地患者状況調」の傷病名欄の妊娠の名目で診察を受けた者 6,386 名、内入院したもの 2,157 名。別の資料「引揚婦女子医療救護実施要領」に｜よると、6 つの上陸港の最寄りの国立病院及び診療所に第 1 次婦女子病院が設けられ、600 床を越える受け入れ体制が整えられて「諸種の事情のため正規分娩不適切者には、極力妊娠中絶を実施すること 」とされていた⑮。しかし 、当時は堕胎罪が存在していた。

[3] 残留婦人鈴木則子さん、NPO 中国帰国者の会事務局長　長野浩久氏、石井小夜子弁護士(他男性弁護士 1 名)、庵谷磐氏、元夜間中学教師　岩田忠先生、筆者

[4] 家業都合により、途中降板。

[5] 便宜上、A さん B さん C さん・・・としますが、ホームページの A さん B さん C さんとは関係ありません。

『忘れえぬ人たち―「残留婦人」との出会いから』（日本僑報社）を上梓して

神田さち子

かけがえのない２葉

目の前に葉書とＦＡＸ一枚を置いてこの稿の執筆に取りかかります。それは私の新著「忘れえぬ人たち」（日本僑報社）に対して山田洋次映画監督からのコメント２葉なのです。

“過去の歴史を無かったことにしよう、もう忘れて未来指向で行こう、という今の国にあって、とても大切な御本だと思います“

“「もう何も日本に言いたいことはありません」という、痩せ細った小さい体の残留婦人が言われた言葉を、ぼくは中国引揚者の一人として重く受け止める――神田さち子さんが生涯をかけた作品“。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

戦争で人生を狂わせられた方々との出会い～今こそ書き遺しておかないと～。それは悪戦苦闘の始まりでもありました。

あの日の会議室

1996年９月残暑の蒸し暑い午後。私はノンフィクション作家・良永勢伊子さん（故人）の誘いで中野区のとある会議室へ足を運びました。そこは一時帰国中の中国残留婦人をお迎えしての懇親会場でした。そこで目にしたのは・・・・。異様なまでの静寂さに包まれ不気味さえ感じたのです。

忘れんといて下さい・・・・

弾まない会場内で時間ばかり経っていくようで私は思い切って一人の婦人に声をかけました。Ａさんは、最初はポツリポツリ。途中からせきを切るが如く話し始められました。「岡山の女学校を卒業したら両親、兄弟が住んでいる満州へと。敗戦。両親、兄弟全員死去。当時一人残された私は生きていくために

は結婚するしかなかったのです。そうですよ今そこに居る人私の“４番目の夫”。えっ？　愛情そんなもの何もありませんよ。只々お骨を拾って故郷のお墓に入れてあげたい。その為にはお金が必要。満州の奥地では結婚をするたびに僅かのお金が相手側から貰えます。勿論死別もありますが祖国日本へ、故郷岡山へ一片でもいい骨を持ち帰りたい、連れ帰らねば！！それだけ念じて働き結婚をして、今回中国人の夫を連れて一時帰国したのです」。

Ｂさんの場合。良永勢伊子さんが取材を始めたきっかけの方です。代々木の面接会場でもしや・・と思ったＢさんに会うと全くの別人だと判明。悲嘆にくれたＢさんの一時滞在先を良永さんは申し出ます。そこからＢさんの苦難の人生を知り本格的に残留婦人との関わりを始められて、私を中野へと誘われたのです。

私は忘れない

残留婦人らが会場を去られる時の一言が私に突き刺さりました。「もう日本には何も言うことはありません。でも私たちみたいな者がまだたくさん中国に残されていることだけは忘れんといて下さい」。曲がった腰、苦難の全てを背負い込んだような小さな背中。無表情にそう言い残して遠ざかるその後ろ姿を見送りながら私はハッとなりました。もしかしたらその後姿は私の母だったかも知れない。テレビで映し出された「マーマー会いに来てっ～～！」と泣く孤児は私の姿ではなかったか。

何度も訪中～中国公演へと

2002年から５回訪中。ハルピン、長春、大連、北京、合肥計９回「帰ってきたおばあさん」を演じてきました。現地で観劇した黒龍江大学生、北京外国語大学、北京首都劇場、安徽省合肥での観客態度そして最後に養母さんの「命に敵も味方もないよ」この珠玉の言葉を最後に記して私は「忘れえぬ人」を脱稿したのです。多くの方々が手にしていただける事を願いつつ・・・。

（かんだ・さちこ：舞台俳優。旧満州で生まれ、２歳で日本に引き揚げる。日本敗戦後の混乱で旧満州に置き去りにされた女性の人生、『帰ってきたおばあさん』を＜ひとり芝居＞で演じている。公演回数は200回になる。上梓した著書の定価は、1800円＋税）

残留孤児二世の移住と定着に関する博士論文を書き終えて

張 龍龍

1　残留孤児家族研究の旅

2013 年に残留孤児とその家族研究を始めてから７年経った。その研究の旅を振り返ると、2013 年４月に、筆者は中国を離れ、下関市立大学大学院修士課程に推薦入学した。入学後まもなく、北九州市のスーパーで、ある残留孤児と出会った。その時、はじめて「残留孤児」という人びとの存在を知った。「残留孤児」とは、ほとんどの中国人にとって馴染みのない言葉だった。日本と中国の社会を生きてきた残留孤児の生活史を記録したい、という単純な思いを抱き、その翌日、この考えを指導教員に伝えた。「修士論文のテーマとして取り組んでみたら」と指導教員に励まされ、そこから、残留孤児研究がスタートした。

その後の２年間、九州地方に在住する 32 名の残留孤児に質問紙調査（５名にインタビュー調査）を実施し、彼らの日本における生活過程を修士論文「戦後東アジアにおける人の移動に関する研究――中国帰国者家族の社会適応を事例に」（張 2015）としてまとめた。残留孤児二世の移住と定着問題は、修士論文では直接の研究課題とはしていないが、残留孤児と比較して、より複雑で深刻であることが判明した。

2015 年４月に早稲田大学大学院博士課程に進学し、研究の焦点を残留孤児二世の移住と定着に当てた。その際、主対象を関東地方へ移し、2015 年と 2016 年にふたたび残留孤児への調査研究に着手した。というのは、残留孤児の帰国と定着問題は、第二世代の移住と定着を理解するための根幹に関わるからである。

筆者は関東地方在住の 51 名の残留孤児に半構造化インタビューを実施し、彼らの帰国過程と帰国以降のアイデンティティ変容をつぎの２本の学術論文にまとめた。すなわち、「帰国援護政策と中国残留孤児の永住帰国過程――帰国動機に注目して」（張 2017a）と「地域社会における中国残留孤児のエスニック・アイデンティティ変容――Ｓ町に在住する早期帰国者の事例」（張 2017b）である。これが残留孤児二世研究の土台となった。

2015 年 12 月以降、残留孤児二世に対して質問紙調査と半構造化インタビュー調査を実施し、2017 年 12 月までに 89 名のデータを得た。これらのデータをもとに、つぎの３本の学術論文を執筆した。つまり、「1980 年代半ばまでに連れられて来た中国残留孤児第二世代――『子どもたち』の初期定着に注目して」（張 2019a）、「1980 年代後半以降に急かされて来た残留孤児第二世代――『青年たち』の来日と初期定着に注目して」（張 2019b）、「中国残留孤児第二世代の移住と初期定着――1990 年代に呼び寄せられた『成人たち』の事例」（張 2019c）である。これまで、残留孤児二世に関しては、断片的な情報しかなかったが、残留孤児家族研究を始めて７年目に執筆したこの３本の研究が、ようやくその全体像を明らかにした。

2　残留孤児二世をテーマとした博士論文

博士論文「中国残留孤児第二世代の移住と定着――政策の展開と家族戦略・ライフコース」は、1981 年に開始された残留孤児の帰国援護事業から派生した残留孤児二世の移住と

定着過程に着目した研究である。本研究は、残留孤児二世を異なる移住年齢グループに設定した。それは、1980 年代半ばまでに連れられて来た＜子ども期移住グループ＞（以下、＜子どもたち＞）、1980 年代後半以降に急かされて来た＜青年期移住グループ＞（以下、＜青年たち＞）、1990 年代に呼び寄せられた＜成人期移住グループ＞（以下、＜成人たち＞）、1990 年代末以降に移住を望んだ＜中壮年期移住グループ＞（以下、＜中壮年たち＞）という４つのグループである。

周知のように、1980 年代半ばまで経済や教育を含んだ多分野において、日中の格差が大きかった。こうした時代に置かれた残留孤児は、望郷の念に駆られ、「日本へ帰れば幸せになれる」と家族こぞって帰国した。しかしながら、多くの＜子どもたち＞は、移住の意欲を示しておらず、そのなかに親の帰国決定に反対した者もいる。

＜子どもたち＞は、移住後まもなく通常の学校教育に編入されたが、1986 年まで特段の支援が認められない状況にあった。それに加え、彼らは「校内暴力」に遭遇し、さらに過剰な同化圧力にさらされ、家族や教員との相談というとるべき策がほとんどなかった。

＜青年たち＞は、日本に移住して以降の苦労を想定しながらも、1980 年代後半における日本のバブル景気と中国出国ブームに移住決定を促された。また、他の移住グループと比較して、とくに＜青年たち＞の移住選択が残留孤児二世の移住年齢制限政策（残留孤児の帰国に同伴できるのは､原則として配偶者と 20 歳未満の未婚の子どもにかぎられるという政策）から大きなインパクトを受けた。残留孤児家族は、なぜ帰国（移住）するのかという問いを後回しにし、親子離別を回避できるように、ともかく 20 歳未満という国費援護期間内の＜青年たち＞の「渡日」実現を目指すという戦略を立てた。移住後、＜青年たち＞は、多元的なタイミングの重なりによって、成人移行期の早い段階で職業に対する関心を高めた。彼らは移住後まもなく家を離れ、正規の職に就くまで結婚・家族形成を行ったのである。

＜成人たち＞は、20 歳を超えては親の帰国に同伴できぬという政策のもとで、中国に取り残された。残留孤児にとって、これが新たな家族離散を意味し、帰国時点から日本での家族再統合が切望された。＜成人たち＞は親が帰国してから３年以内に呼び寄せられており、残留孤児は当初、目指していた家族再統合を短期間で達成した。しかし、＜成人たち＞の移住はあくまでも親の帰国に付随したものであり、彼らにとって明確な移住目的はなかった。国際移住にともない、それまで構築してきた生活基盤は事実上、破壊されてしまった。移住後、平成不況に遭遇した＜成人たち＞は、就職難という深刻な課題を抱え、失業と転職を繰り返していた。多くの者は連続の打撃を受け、彼らの個人の行動は、もはや家族のニーズよりも優先されるようになった。

1990 年代後半以降、中国では経済や教育などでの地域格差問題がますます深刻になった。こうした背景のもとで、とくに生活水準の低い＜中壮年たち＞は、生活の質を向上させるために、日本への移住を望んだ。他の移住グループに比べて、より高い年齢で移住して来た＜中壮年たち＞は、生活基盤を容易に構築できなかった。その大半は、移住からすでに十数年が経過したにもかかわらず、いまだに日本社会の底辺で暮らしている。とはいえ、彼らの多くは、底辺から脱出しようとする意欲を示さず、働くよりもむしろ生活保護を受

給し、現状に甘んじているのである。

3　社会的に弱い立場に置かれた人びと

残留孤児と二世の帰国・移住に関する政策は、1997 年までの 16 年間に 9 回にもわたって変更を繰り返し、その変更のたびに、帰国・移住条件は変更された。残留孤児全体の帰国実態をみると、2018 年 11 月 30 日までに身元調査で認定された残留孤児の総数は 2,818 名であり、そのうち 2,557 名が 1970 年代末から 2010 年代までの約 40 年間にわたって断続的に帰国した。これは、政策の失敗か、それとも効果か、評価しがたい。しかし、2,500 以上の世帯（家族）が、政策と帰国条件の変更のたびに苦労していたに違いない。日本政府は残留孤児と国費で移住した二世の帰国・移住それ自体に対しては策を講じながら、その後の定着指導については当初より民間ボランティアに任せであった。民間ボランティアにかろうじて支えられている残留孤児と二世は、帰国による家族離散や不況による失業などの危機に直面した際、その時点での家族の資源を活用し、臨機応変に家族戦略を変えながら、それに立ち向かってきた。

こうした残留孤児家族だけでなく、大きな社会変動や災害などに遭遇した人びと、たとえば、原発避難者は、もっとも社会的に弱い立場に置かれ、声を上げることができなかった。彼らは、社会変動や災害に遭遇した後の生活再構築にあたって、あくまでも家族単位で、家族戦略を立てながら対処していくという策しかない。とくに日本社会において、彼らは、いわば社会的マイノリティであり、自らの生活を社会に訴えることができず、多くの人びとは、我々研究者の研究観察対象にすらなっていない。日本社会は、「和」のある社会、もしくは共生社会の実現までどれくらいの時間を要するのか、考えられる。

引用文献

張龍龍, 2015,「戦後東アジアにおける人の移動に関する研究――中国帰国者家族の社会適応を事例に」下関市立大学大学院経済学研究科修士論文.

――――, 2017a,「帰国援護政策と中国残留孤児の永住帰国過程――帰国動機に注目して」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』62：67-82.

――――, 2017b,「地域社会における中国残留孤児のエスニック・アイデンティティ変容――S 町に在住する早期帰国者の事例」『社会学年誌』58：91-106.

――――, 2019a,「1980 年代半ばまでに連れられて来た中国残留孤児第二世代――『子どもたち』の初期定着に注目して」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』64：99-114.

――――, 2019b,「1980 年代後半以降に急かされて来た残留孤児第二世代――『青年たち』の来日と初期定着に注目して」『社会学年誌』60：113-29.

――――, 2019c,「中国残留孤児第二世代の移住と初期定着――1990 年代に呼び寄せられた『成人たち』の事例」『ソシオロジカル・ペーパーズ』28：1-16.

（じゃん・ろんろん：1988 年生まれ。山東省出身。早稲田大学文学学術院助手。専門は移民社会学、家族社会学、ライフコース研究）

朝日新聞（2019年8月8日付朝刊）より転載

TOKYO語り場

戦争体験の継承

「今と地続き」伝え方腐心

吉田裕さん 東京大空襲・戦災資料センター館長

「東京大空襲・戦災資料センター」は2002年の開館以来、大空襲を生き延びた作家の早乙女勝元さん(87)が館長を務めていましたが、今年6月、戦後生まれの私が引き継ぎました。荷は重いですが、私なりにできることがあるのではと引き受けました。

私の世代は、両親や先生の多くが戦争を体験し、子どもの頃は社会に生々しい戦争の傷が残っていた。駅前で傷痍軍人が白衣を着てアコーディオンを鳴らすなど、何となく戦争の空気を追体験してきました。

一方、軍国主義時代に育った父親世代との価値観のずれが大きく、親が戦争体験を語ろうとしても背を向けてきた面もある。親子間で戦争体験が受け継がれてこなかったと感じます。今の中高生はさらに戦場の現実、リアルなところを見たり聞いたりする機会がなくなっていると思います。

過去と現在をつなぐ回路をどう作ればいいのか。一昨年出版した自著「日本軍兵士」では、今と戦争は地続きだと若い世代に伝えるため、兵士たちの「体と心」を自分に置き換えられるようにしました。例えば、兵士は自分の体重の半分以上の装備を持って歩いていたと書いたところ、「10～20キロの水を担いでみた」という読者も。追体験してくれたんですね。

庶民が自分の体験を語り、記録に残す運動が始まったのは1970年前後。外交史や政治経済が中心だった研究の世界でも、戦争を民衆史としてとらえ直す動きが起こり、若手研究者も育っています。

戦争を知る世代が少なくなりました。軍隊に関する基礎知識が社会に共有されないことには危機感を持っていますが、マンガで戦場のリアルを描くような新しい表現も出てきている。あきらめず、接点を見いだす努力をしていきたいと思っています。

（聞き手・青木美希）

よしだ・ゆたか 1954年生まれ、埼玉県出身。歴史学者。一橋大名誉教授・特任教授。著書に「日本人の戦争観」「アジア・太平洋戦争」など。当時の戦争指導者や軍官僚がいかに人の生命を軽んじていたかを描いた「日本軍兵士」（中公新書）は、アジア・太平洋賞特別賞、新書大賞を受賞。

証言発掘 近現代史に迫る

羽田澄子さん 記録映画作家

1945年8月15日の玉音放送は、旧満州・大連の南満州鉄道の中央試験所で聞きました。「正義の戦いのため、最後の一人まで闘う」という教育を受けていた私は「まだ生きていられる」とホッとしました。それと同時に、「戦争をやめる選択肢があるなら、なぜもっと早くやめなかったのか」とも思いました。

その後、満州奥地から逃げてきた開拓団の人たちが次々にやってきました。ボロボロの服をまとい、体中シラミだらけ。「途中で赤ん坊を置き去りにした」という話も聞きましたが、多くの人が現地に残された実態を当時はよくわかっていませんでした。

2002年、中国残留日本人孤児たちが日本政府に賠償を求め集団訴訟を起こしました。開拓団は国策として満州奥地に送られたのに、敗戦後、国から見捨てられた。命を落とした開拓民のため、中国の人たちがお墓を建ててくれたことも知りました。同時代に満州にいた人間の責任として記録映画の制作を決意し、08年に「嗚呼（ああ）満蒙開拓団」を完成させました。当時を知る人たちの証言を得られるラストチャンスでした。

10年には大連と旅順を再訪し、その記録を映画「遙（はる）かなるふるさと 旅順・大連」にしました。思い出の地ですが、単純に「懐かしい故郷」とは言えません。当時の日本人社会は、中国人の下働きで成り立っていたからです。そんな歴史にもかかわらず、かつて暮らした家を突然訪ねると、住人たちは気さくに家の中を見せてくれました。

戦争は二度としてはいけない。満蒙開拓団のように、戦争で犠牲になるのは立場の弱い人です。特に政治に関わる人はそれを肝に銘じるべきです。私の記憶は年々薄れていきますが、私の映画が日本の近現代史を考えるうえで役に立ってくれればと願っています。

（聞き手・伊藤恵里奈）

はねだ・すみこ 1926年、旧満州・大連生まれ、旅順で少女時代をおくる。日本の女性映画監督のパイオニアで、記録映画の第一人者。50年、岩波映画製作所の設立時に入社。90本を超すドキュメンタリーを手がける。定年退職して独立後に「早池峰の賦」「痴呆（ちほう）性老人の世界」などを監督する。

読売新聞（2019年8月9日付朝刊）より転載

満州 奪われたピアノ

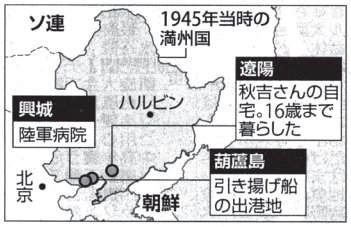
秋吉敏子さん 89歳 苦難の証言収録

世界的なジャズピアニスト秋吉敏子さん(89)＝米国在住＝が、戦時中の旧満州（現中国東北部）での生活や、引き揚げの苦労を語った証言映像が今月、完成した。当時10歳代だった秋吉さんの生活を一変させ、後の人生に大きな影響を与えた戦争体験。「若い世代に知ってもらいたい」と、平和祈念展示資料館（東京）のインタビューに応じた。9月から同館で上映される。

「戦争で全部なくなった」

■看護師を志願

「戦争で傷ついた兵隊さんたちの看護っていうのかな。最初行った時は卒倒しそうになったけど。みなさん、腕がなかったりね…」。約40分の映像の中で秋吉さんは、1945年の夏、興城の陸軍病院で初めて傷病兵を間近に見た時のことを振り返っている。当時15歳。負傷者を手当てする先輩看護師の動きを見ながら「見習い看護師」として包帯の巻き方などを学んだという。



㊤秋吉さんの証言映像の一場面。見習い看護師として活動した記憶などを今年4月に語った（平和祈念展示資料館提供）㊦ピアノを弾く秋吉さん（2017年）

紡績会社に勤めていた父・仲吉さんの四女として遼陽で生まれた秋吉さんは、小学2年の時に現地でピアノを習い始め、夢中になった。しかし戦況は刻々と悪化。45年5月、楽譜を荷物の中にしまい込んで陸軍の看護師に志願した。結果的に、戦地に配属される前に終戦を迎えた。

■自宅にソ連兵

病院から自宅に戻ると、終戦直前に侵攻してきた旧ソ連軍の兵士の姿があった。「(ソ連兵が)家に入ってきて物を盗って、家の前で商人に売って、また盗って。その真っ最中に帰ってきた」と、秋吉さんは証言する。自宅にいた姉2人は畳の下のスペースに隠れて難を逃れた。その後も兵士に自宅に押し入られ、大切なピアノも持ち去られた。

本土への引き揚げ船の乗り場がある葫蘆島に移動したのは、46年7月頃。

「『船がくます』と連絡があると、道のない丘をリュックサックを担いで行く。船が来なくて収容所に戻る。10歳代の私にとって一番つらかった」。本当に帰国できるのかという不安にさいなまれた日々を振り返る。

引き揚げ後は大分県に住み、米軍基地の近くにあったダンスホールで「ピアニスト求む」のはり紙を見つけて応募。即採用された。

「戦争で全部なくなっちゃって。ピアノを弾きたかった。ジャズに出会い、私には性に合っていると思ったの」。離れていた時間を埋めるように、ピアノにのめり込んだ。

米国留学を経て、74年に和楽器を大胆に取り入れたアルバム「孤軍」がヒット。99年に日本人で初めて国際ジャズ名誉の殿堂入りを果たした。

■若者に向けて

若い世代に関心を持ってもらうため、ナレーションはミュージシャンの坂本美雨さん(39)が担当。坂本さんは「戦争は何げない家族の日常を奪うと改めて感じた。悲しみを乗り越え、ジャズの道で生きると決めた秋吉さんの強さに心を打たれた」と話す。

当時の状況を想像しやすいよう写真やイラストも挿入され、「あしたのジョー」で知られる漫画家のちばてつやさん(80)は、重い荷物を背負って荒野を進む人たちのイラストを提供した。

秋吉さんは読売新聞の取材に、「当時のことを憶えている限り話した。戦争を知らない若い世代にも、見てほしい」とコメントした。映像は9月1日から館内で1日1回、上映される。

体験者 高齢化進む

戦争体験者が高齢となる中、証言の映像化は各地で進められている。

大規模な地上戦で、民間人を含め約20万人が犠牲になった沖縄県。県南部の豊見城市は昨年までの2年間で、80～100歳代の計31人から学童疎開や従軍体験などの証言を集め、今年3月に動画配信サイト「ユーチューブ」で公開した。

民間団体「陸軍少飛平和祈念の会」(東京)も昨年から、80～90歳代の元飛行兵の証言の撮影を始めた。8月には証言集を自費出版する予定だ。戦中戦後の暮らしを伝える「昭和館」(東京)でも遺族らの証言映像の撮影に力を入れており、計349作品を公開している。

東京新聞（2019年8月12日付朝刊）より転載

迫るソ連兵「自決しか」

旧満州から引き揚げ　小谷洋子さん(86)

下

横浜支局　福浦未乃理(26)

「満州はわかる？」

小谷洋子さん(八六)＝横浜市港南区＝が、模造紙に描いた自作の旧満州（現中国東北部）の地図を広げた。

一歳の時に家族で満州に渡り、敗戦から約一年後の一九四六（昭和二十一）年十月、十三歳で日本に引き揚げてきた小谷さん。当時の歴史はある程度知ってはいるものの、実際に話を聞くのは初めての私を見て、ひと呼吸置いて語り始めた。

四五年八月十日、ソ連軍が前日に満州に侵攻したというニュースがラジオ放送で流れた。東西の国境線から小谷さんたちが住むハルビンに到着するまで、一週間ほどとうわさされた。

「どうやって死のうか」。自宅の応接間で繰り広げられた大人たちの会話に、小谷さんは隣の寝室から耳を澄ませた。若い男は皆徴兵されて戦う力もない。自決する以外の選択肢はないようだった。

青酸カリを飲むか、日本刀を使うか、広場に集まって手りゅう弾で爆死するか…。「父は何も言わなかったが、一週間で死ぬんだなと思っていた」。女学校からの帰り道、友人同士で「お宅はどうやって死ぬの？」「今度会うときはあの世で」と明るく振る舞ったが、一人になると恐ろしさが込み上げた。小谷さんは記憶をたどるように一点を見つめ、「すごく怖かった」と二度繰り返した。

しかし、八月十五日に日本の降伏が知らされ、状況は一転。「死なくていい」とほっとしたが、玉音放送の一時間後には町中で銃声が響いた。敗戦国としてソ連兵を迎え入れることになり、父に「何をされるか分からないから」とバリカンで丸刈りにされ、男物の服を着た。

ソ連兵が扉をたたくたびに自宅裏にある物置に身を隠した。壁の隙間から、ぶかぶかの防寒服を着たソ連兵が数㍍先で機関銃を抱えてうろついているのが分かり、「胸がドキンドキンと言って、外に音がもれるんじゃないかと思った」。物音を立てれば、見境なく撃たれてしまう。そうして死んでしまった人や、ソ連兵に犯されて自決した女性がいることも聞いていた。

◆

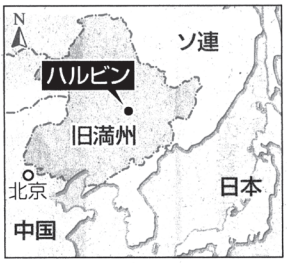
次々と聞く壮絶な話に、私の顔はこわばっていた。「その場にいたら、私はどうするのか」と考えようとしたが、正直、死と背中合わせの日々を想像することもできなかった。

「ただ、自分たちが加害者だったのも確か」と小谷さんは言う。当時は意識していなかったが、日本が建国した満州国に暮らしていた自分も、「支配する側」にいた。日本軍の中にも、ソ連兵のように戦場で略奪や暴行をした兵士もいた。「戦争とは愚かしいもの。大義名分をかざして、正しいと思って始めるんだろうけれど、傷つけ合って、殺し合ってしまうものなんだよねえ…」

小谷さん一家は、自宅に住み込みで働いていた中国人の助けなどを得て、四六年十月、引き揚げ船で帰国を果たした。結婚を機に相模原市へ、その後、横浜市港南区に移り住み、七十歳まで雑誌記者として働いた。五年前から「ちっちゃな種をまくために」と語り部を始め、市内の小中学生に訴えている。「戦争をしないってことが大事なんだねえ。始まってしまったら、その大きな波からは逃れられないから」

小谷さんの隣に座って話を聞きながら、私が「知っている」と思っていたのは、年表のような歴史だったと気付いた。そこに多くの人が暮らし、一人一人が生死の境をさまよった事実に思いを馳せたことはなかった。

「始まってしまったら逃れられない」。小谷さんの言葉が深く突き刺さった。戦争を身をもって体験した人々がいなくなった時、戦争の愚かさをどう伝えていくことができるか。私たちの世代は、それが問われている。



小谷洋子さん㊨は旧満州の地図を示しながら、死を覚悟した当時の体験を福浦記者に話した＝横浜市港南区で

ソ連の対日参戦　太平洋戦争終結前の1945年8月8日、ソ連が日ソ中立条約を破り宣戦布告。9日に旧満州に侵攻し、関東軍は敗走した。当時の満州は約155万人の日本人が暮らしており、多くの人がソ連軍から逃れて命からがら日本に帰国したが、戦死や逃避行中の病死、餓死などで約24万人が犠牲になったとされる。

ご意見・ご感想　お寄せください

メールはshakai@tokyo-np.co.jp　手紙は〒100 8505（住所不要）東京新聞社会部。ファクスは03（3595）6919。

読売新聞（2019年8月12日付朝刊）より転載

満蒙開拓団「死の谷」伝える

中国・方正の郷土史家

終戦直後、数百人犠牲の地

中国東北部の黒竜江省方正で1945年8月の終戦直後、当時のソ連軍から逃れようとした日本の満蒙開拓団の数百人規模が渡河に失敗し、命を落とした。地元の郷土史研究家らは、民間人が犠牲になった戦争の残酷さを示す史実として伝えていくべきだと訴えている。

（方正　東慶一郎、写真も）

上黒竜江省方正で、当時の様子を語る張忠告さん（右）と姚淑芝さん
下多くの開拓団員が渡河に失敗して流された大羅密川。川幅は当時より狭くなっているという

方正の市街地から山間部へと分け入る。胸の高さまで伸びた草の茂みを抜けると、主要河川・松花江の支流となる大羅密川に突き当たった。

幅約20㍍の川面は茶色く濁り、水深はかなりありそうだ。「悲劇の現場」は、日本ではほとんど知られていないが、地元では「死の谷」と呼ばれている。

当時、ソ連軍による旧満州への侵攻を受け、国境に近いジャムスや依蘭などに入植していた開拓団員が、避難先として黒竜江省の省都ハルビンから東に約180㌔に位置する方正を目指した。避難ルートで避けられないのが大羅密川の渡河だった。

川は、長雨の影響で増水していた。開拓団員は自分たちの衣服を結び合わせた命綱を両岸の木にくくりつけて渡河を試みたが、多くの人が途中で力尽き、急流にのまれた。正確な死亡者数は不明だが、郷土史研究家の曹松先さん(64)の調査によると、800人以上が犠牲になったとの説もあるという。

現場近くで農業を営んでいた張忠告さん(94)は、渡河地点の下流に大量の遺体が流れ着いた光景を鮮明に覚えている。「女性や子供、老人ばかりで、幼い子供を背負った状態の女性も見かけた」という。中国東北部は夏の終わりが早い。当時は降り続く雨で、冷え込みが始まっていた。

張さんの妻、姚淑芝さん(89)は「夫から話を聞いたときはかわいそうで仕方がなかった」と話す。張さん一家の近くに入植していた「九州村開拓団」の団員とは交流もあったという。「彼らも私たちと同じ農民で、みんな、良い人たちだったのに」と声を震わせた。

終戦から74年が過ぎようとする今、方正でも、この悲劇を知る人は確実に減少している。現場に近い集落で住民に話を聞くと、60歳代までは親たちから伝え聞いて知っていたが、40歳代以下ではほとんどが知らなかった。

方正には、開拓団員らの遺骨を合同埋葬した日本人公墓や中国残留孤児を育てた養父母の公墓が残され、日本からの訪問団を受け入れている。

曹さんは「戦争で犠牲になるのは庶民であるということを、伝え続けていかなければいけない」と、今後も日中両国民に語り継ごうと考えている。

満蒙開拓団　農村の過剰人口や食糧不足の解決策として、「満州国」などに国策として送り込まれた約27万人の日本人移民。戦争末期には成年男子のほとんどが軍に徴集された。ソ連侵攻後の過酷な逃避行や収容所生活などで約8万人が犠牲になったとされる。開拓団の軌跡をまとめた「満州開拓史」などは、終戦後の方正には8000人以上が避難し、うち約4500人が飢えや寒さで命を落としたと伝えている。

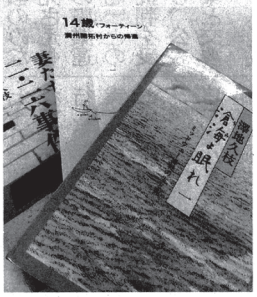
東京新聞（2019年8月26日付朝刊左頁23面）より転載

右ページ（87ページ）から読んで左ページ（86ページ）に移ってください。

こちら特報部

戦争二度と許しちゃいけない

国に捨てられた 敗戦時の苦難が原点



上「今の政治はひどすぎる」と語る澤地久枝さん＝東京都渋谷区で　下澤地さんの代表作「妻たちの二・二六事件」「14歳」「滄海（うみ）よ眠れ」。「14歳」は、敗戦時の満州での難民生活を記憶を頼りに書いた

澤地さんが個人の力を頼みにするのは、国家に対する不信があるからだ。「国ってものはあてにならない。平気で国民を捨てる。ウソをつくんです」。そう言い切る原点は、敗戦時の難民生活にある。

幼い時に両親と満州国（中国東北部）に渡り、一九四五年八月の終戦時は十四歳で女学校の三年生だった。満州の関東軍は逃げるように先に撤退し、澤地さんら日本の民間人は取り残された。「私もお国のために死ぬ」と信じていた軍国少女でも、神風は吹かなかったことを理解した。

ソ連軍の侵攻で日本兵の武装解除が始まった。「家の窓から外を見ていると日本兵たちが戦陣訓の歌を歌いながらソ連軍に捕らえられていった。シベリア送りになったと聞きました」

澤地さん一家の抑留生活は一年に及んだ。古いアパートに何世帯も身を寄せ、食料は不足した。栄養失調で人が死んでいった。

中国人による暴行、ソ連兵の「女狩り」があった。澤地さんの家では母が必死で抵抗し、レイプは「未遂」に終わった。それでも恐怖とショックで澤地さんはその晩、トイレで吐いた。「私にとっては、戦後こそが戦争だったんですね」

記憶は何十年たってもよみがえった。「心や体に深い傷を残す戦争をどうしたら伝えられるかしら」。ぽつりと澤地さんが言う。「若い人に『戦争のこと知ってる』って聞いても、知らないっておうむ返しよね。あの戦争で何があったのか、やっぱり、体験者がそれぞれの家で伝えていかなければならないと思うのね」

五〇年六月二十五日。朝鮮戦争が始まった日を澤地さんは忘れられない。早稲田大学第二文学部の学生だった。仲間とピクニックに出掛けた先で開戦を聞いた。「大戦が終わってわずか五年でまた隣国で戦争が始まった。他国で流れた血の上に戦後日本の復興があったことを、忘れてはいけないと思うの」

かつては自民党の政治家も戦争の悲惨さを語った。ところが、安倍首相は改憲を悲願とし、自民党は改憲草案で自衛隊を国軍と位置付け、憲法九条を骨抜きにしようとしている。「九条を守ることは常識だった。今はすっかり変わって…。沖縄ではアメリカの言いなりに、巨大な新基地がつくられようとしている」

昨日できたことが今日はできない

「日本はまた戦争をする国になると思っていたけれど、今の政治はひどすぎる。国民は真綿で首を絞められていて、昨日できたことが今日はできない、そんなことが、日に日に増えているのではないかしら」

あいちトリエンナーレ（名古屋市）での「表現の不自由展」が中止された出来事もその一つだ。「京都アニメーションの放火事件が起きたばかりだったから中止になった。ひと言の脅しでできなくなるなんて」

そして澤地さんは「風流夢譚（むたん）事件」を振り返る。雑誌「中央公論」に掲載された小説での天皇らの描写に憤った少年が、中央公論社社長宅で家政婦らを殺傷した事件だ。「あの後、天皇制を論じることが一気にタブーになってしまった」

来年は復興をテーマにした東京五輪・パラリンピックがある。「熱狂の中で原発事故の被害を消し去る。問題のすり替えです。お祭り騒ぎの後に何がやってくるのか」と澤地さんは暗たんとした思いに駆られる。それでも安倍政権への抗議をあきらめない。

満州から東京に帰り、バラック生活から始まった戦後。今の東京からは想像もつかない焼け野原の中で、少女らしく生きることは許されなかった。澤地さんにとって、戻りたくない時間なのだ。「戦争を二度と許しちゃいけない。そのためにならまだ頑張れるわよ」。来月、八十九歳を迎える。絶望のときこそ、しゃんとして、澤地さんは希望を見いだそうとする。

デスクメモ

死者が多数の時、ひとりひとりに思いをやるのは難しい。澤地さんは違った。三千四百人を超えるミッドウェー海戦の全戦死者を特定し、名前を示して人生を追った。戦死者は数字でなく人間だと知らせる偉業だ。実名匿名が議論になる今だからこそ、記者として先輩に習いたい。（裕）

2019・8・26

東京新聞（2019年8月26日付朝刊右頁22面）より転載

こちら

「アベ政治を許さない」デモ4年

作家・澤地久枝さんに聞く

安保法きっかけ 憲法無視の暴走見過ごせず

東京・永田町の国会議事堂前に毎月三日、「アベ政治を許さない」と書かれたポスターを掲げる人の群れが現れる。安倍晋三首相に退陣を突きつけるデモだ。先頭に立つのはノンフィクション作家の澤地久枝さん(八)。シュプレヒコールもない。組織もない。一人ひとりの意志だけに支えられた行動は四年を超えた。猛暑の夏も体の限界に挑むように澤地さんは路上に立った。戦後七十四年。日本を見つめてきた作家は、何を思うのか。

（佐藤直子）

「アベ政治を許さない」と書いたポスターを手に抗議する澤地さん（前列左から2人目）と参加者たち＝東京・永田町で

たった1人でも立つ

じーじーじーとセミの声が響く。八月三日。正午すぎの都心の気温は三二度を超えた。強い日差しの中を議事堂正門の向かいの歩道に人が集まる。帽子をかぶり、長袖シャツ姿の澤地さんがあいさつを交わす。つえを手にした男性。北海道帯広市から、茨城県牛久市から、初めて参加したという女性たち。夏休みの小学生も交じっている。

午後一時。約百人が一斉に「アベ政治を許さない」のポスターを高く掲げた。顔に汗をにじませ、みな黙って議事堂を見つめる。十分がたち、通算四十七回目となったこの日のデモは終了。参加者が近況報告をして解散した。

「すごい暑さでしたからね、ここでひっくり返るわけにはいかないと思って、しっかり足を踏みしめていました。これで立っていられないんなら、やめだなって」。澤地さんは東京都内の自宅で八月のデモをこう振り返った。

さわち・ひさえ 1930年、東京生まれ。4歳のときに満州国吉林に移住、敗戦後の46年に帰国。18歳で中央公論社に就職し、9年間の編集者生活を経て作家デビュー。「妻たちの二・二六事件」「記録 ミッドウェー海戦」「密約 外務省機密漏洩事件」「14歳〈フォーティーン〉」など著作多数。作家小田実氏らと2004年に結成した「九条の会」や、原発事故後の「さようなら原発集会」の呼び掛け人となる。

七月の参院選で自民党は議席を九減らした。しかし、投票率が50％に届かず、過去二番目の低さだった。澤地さんはそれが悔しい。「政権支持率はまた少し上がったでしょ。一人ひとりが抗議の意志を示すことが、いよいよ大事になってきましたね」

作家として澤地さんが問うてきたのは、人間をぼろぼろになるまで追い詰めていく国家や戦争のむごさだった。戦前の二・二六事件や戦中のミッドウェー海戦の遺族らに焦点を当てた作品は、声なき声に耳を澄ます作業であり、日本人が忘れてはならない昭和の罪責を描く作業だった。それは「九条の会」や、3・11後の脱原発運動へのかかわりにも通じている。

二〇一三年十二月に特定秘密保護法を成立させた政府は、一五年に集団的自衛権の行使を認める安全保障関連法案を強引に成立させようとしていた。憲法を無視した政治の暴走を見過ごせず、澤地さんは自ら呼び掛け人となって、法案が衆院を通過した直後の七月十八日、最初の「許さない」デモを決行した。

安保法が成立すると国会前の人の波は引いていった。澤地さんは「悪法を廃止しよう」と訴え、憲法公布記念日（文化の日）の十一月三日にデモを再開。それ以来、毎月三日に必ず国会前で立ち続けている。

「アベ政治を許さない」の文字は、昨年死去した俳人金子兜太（とうた）さんの筆によるものだ。「兜太さんの字は力強い。見ているとね、兜太さんが生きてるみたい」

国会前のほか、有志が同時刻、全国一斉に同じポスターを掲げる。自分の町の駅頭で、あるいは家の窓から、道ゆく人に見えるように。「政権にノーを言うことに勇気が必要になりましたけど、たった一人になっても立とうと思う。私はこう思うのよって。ギリギリの意志の表明です」と澤地さんは言う。

（公社）日中友好協会発行月刊紙『日本と中国』より転載

友好訪問

なりたかった自分へ、今からでも遅くない

受刑者の更生のために本を活かす

NPO法人「ほんにかえるプロジェクト」発起人　汪楠（ワンナン）さん

日中国交正常化の1972年、吉林省長春市に生まれた。母はバスガイド、父は地元の病院の副院長も勤めた外科医。教育熱心な家庭で、父は毎朝家の壁に掛けた黒板に「お題」を書き、その日のうちに詩を作るよう息子に指導した。

小学校でも成績は常にトップだったが、親の離婚で状況が一変した。父はのちに残留孤児の日本人女性と再婚、その父に誘い出されて86年、姉と共に神戸行きの船に乗った。

「中国に帰れ」

日本がバブルに沸く中、東京のアパート二間に継母とその子供を含む一家7人で生活を始めた。いつも腹をすかせていた。通い始めた中学校では言葉が分からず、馴染めるはずもない。同級生から「中国に帰れ」と怒号を浴びる中、周囲への不信感が募った。故郷で神童と呼ばれた自分が、来日した途端にビリへと転がり落ちたのも悔しかった。

日本語学級で学ぶ残留孤児二世らでグループを結成、同じ境遇の二世らがいじめられると仕返しに行き、一躍ヒーローとなる。このグループはのちに「怒羅権（ドラゴン）」と名を変え、準指定暴力団にまで成長した。

2000年に窃盗容疑などで逮捕された。盗んだ金は総額で億を超える。岐阜刑務所で13年の刑期を終え、出所後から1年足らずの15年9月、受刑者に本を送ることで更生を支援する「ほんにかえるプロジェクト」を立ち上げた。

「刑務所の中で大量の本を読み、様々な世界と考え方を知った。支援者との面会や手紙で社会への不信感が薄らいだ」。本を読めば、他人の考えも理解できるようになる。支援者とのやりとりの中で、人を信頼することを学んだ。社会とつながりを持つ上で大切な要素だ。「更生とは人間の尊厳を取り戻すこと。一人ではできない。孤立しないように社会と接点を作ることが必要。自分がどんな人間になりたかったのかを思い出して、今からでも、それに向かって歩んで行ければ」

本と手紙の力

自宅兼事務所の家には、寄付された約7千冊の本が並ぶ。多くのボランティアの手助けを得て、のべ4千冊以上を受刑者に送ってきた。関わった受刑者は200人以上、手紙を受け取れば必ず返事を書く。「なるべく手書きにしている。面倒だけど、これが大事」

「父親は文化大革命で辛い思いをしたかもしれない。でも自分は日本に来たくて来たわけじゃない。だから最初は恨みがあった」

一方で、社会の隅に追いやられた立場から日本を見渡すと、支援を求める人が多くいることに気づいた。現在は路上生活者や外国人労働者の支援にも携わり、心理療法であるロゴセラピーの資格取得を目指し勉強を続ける。

決めたことは努力して達成するタイプ。その人柄を慕う人も多く、「金はないけど、今は充実している」。そんな自分の姿を見せることもまた、受刑者を励まし、再犯の防止につながると信じている。（フリーランスライター・吉井忍）

＜プロフィール＞

1972年吉林省長春市生まれ。差別や親との確執により非行に走り、暴走族や暴力団を経験。鑑別所などを含め20年以上の収容生活を送る。NPO法人「ほんにかえるプロジェクト」発起人。「中国帰国者の会」などにも携わる。

週刊金曜日（2019年11月1日付）より転載

開拓民も日本軍国主義の犠牲者

丸井　健太郎（87歳）

映画『山本慈昭　望郷の鐘　満蒙開拓団の落日』を見た。

教師・山本慈昭（内藤剛志）は、阿智郷開拓団として、妻・千尋（渡辺梓）と2人の娘を伴い、教え子である国民学校の生徒を引率し、満州（中国東北部）北哈嗎へ赴く。1945年5月のこと。

校庭で児童たちは、宮城（皇居）に向かって、遥拝。歌声は明るく響く。

今日も学校へ行けるのは／兵隊さんのおかげです　お国のために／お国のために戦った…

ほんの、ひとときの安らぎ。

8月8日ソ連、対日宣戦布告。事態は暗転。団員は「方正」へ、逃避行。目的地は、日本の陸軍部隊・関東軍の駐屯地。山道を歩く一行に降りしきる雨。8月15日の敗戦も知らない。

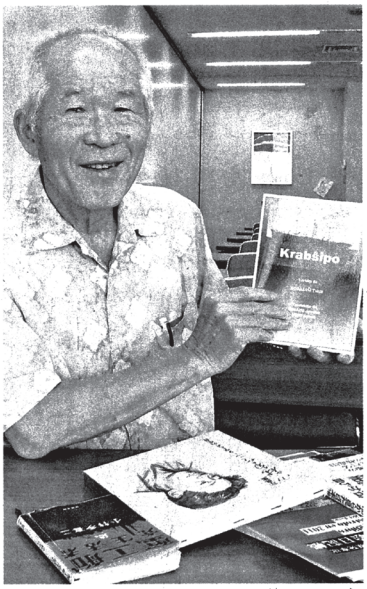
一行が命がけで辿り着いた方正。関東軍は退却した後だった。児童たちが、兵隊さんを称えて歌った軍隊は、荒野に開拓民を捨てた。男性は捕虜となり、女性と子どもたちが残された。阿智郷開拓団175人のうち、帰国できたのは47人。慈昭は妻と娘たちに生き別れ、シベリア抑留を経て47年に帰国。その後、孤児捜しに生涯を捧げ、94年「中国残留邦人帰国促進・自立支援法公布」の実現につながる。自身も4歳で別れた長女と再会。長岳寺で「望郷の鐘」を突く住職・慈昭。90年、88歳の生涯を閉じた。

方正には日本人開拓団犠牲者のため中国政府が建てた「方正地区日本人公墓」と「中国人養父母公墓」がある。周恩来総理が公墓建立を許可したと、伝えられる。「開拓民といえども、日本軍国主義の犠牲者。女性や子どもたちに罪はない」

開拓団員は27万人とも、32万人とも言われている。

ひと

初のエスペラント訳『蟹工船』を出版



堀　泰雄さん（77）

「ヘイ！　ニ・イラース・アル・ラ・インフェーロ」―日本語原文の冒頭のせりふ「おい、地獄さ行（え）ぐんだで！」と、調子がよく合っています。

カムチャツカ沖での過酷な労働と労働者のたたかいを描いた小林多喜二の小説『蟹工船』を、ユダヤ人の眼科医ザメンホフが1887年に発表した人工言語エスペラントに、日本で初めて翻訳し、このほど出版しました（ホリゾント出版hori-zonto@water.sannet.ne.jp、800円）。岡山県在住の島津泰子さんと共同の翻訳です。

「エスペラントに心酔した島津さんが〝『蟹工船』は今の日本にそっくり。翻訳して世界に知らせたい〟と。私は戦前の特殊な舞台の話で翻訳は無理と忠告しましたが、聞き入れず、訳文を次々送ってきました。それで私も引き込まれ、手伝うことになりました」

群馬県在住の堀さんは、父親もやっていたエスペラントにほれ込み、特に40代から熱心に関わり始めました。世界エスペラント大会には欠かさず参加、自分の出版社を立ち上げ、エスペラントの自著などを出すほどに。

その魅力とは「母語話者がいないので、誰もが対等に話せること」だといいます。「私は高校の英語教師でしたが、英語が母語の人々にはかないません。英語で発信するのは気が引けます。エスペラントにはそんな壁がなく、話者も世界中にいる。だから世界を変える力があると思います」

文・写真　清水　博

『しんぶん　赤旗』（2019年6月20日付）より転載

堀泰雄さんはエスペラントで福島の原発被害状況などを継続的に発信しているエスペラント界の貴重な人材である。

Kial mi ekis porti jupon？

Briano Russel

Oni foje demandas min se mi estas Skotlandano, ĉar mi estas viro kiu ofte portas jupojn. Dum mia infaneco, mi nur vidis ridadon pri transvestuloj aŭ Reĝinjoj - viroj kiuj portas jupon. Do, fakte jes, mi rekonas ke estas iom stranga afero ke mi decidus porti tion, kaj mi ŝatus rakonti la kialon.

Mi loĝas kun anglo kiu preskaŭ ĉiam portas skotan porviran jupon - tiel nomata ”kilto” - kaj li ofte diris al mi ke estis multe pli komforta ol pantalonoj, somere porti tion. Li lasis kilton al mi ke mi provu, sed sentis vere strange surstrate porti ĝin, ĉefe pro la sento de la miradoj de la aliaj homoj. Finfine, mi ne havis jupojn, do mi nur portis kelkfoje dum kostumfestoj, kiam oni ofte decidis porti ion ajn strangaĵon por krei eksternormalan etoson. Ankaŭ mi estas cisgenrulo, mi sentas min tute vire, kaj allogas min preskaŭ nur virinoj.

Tamen, mi dum multaj jaroj estis instruisto, kaj iam mi vidis filmeton kiu rakontis pri knabo kiu portis jupon, kaj ke li suferis kiam la aliaj gepatroj kaj infanoj ridis al li. Feliĉe, kelkaj plenkreskuloj en tiu filmeto diris ke knabo rajtas porti jupon se li volas. Tamen, kiam mi vidis ĝin, mi pensis, sed neniu el la plenkreskuloj mem portis jupon por kundefendi ties rajton. Ekde tiam mi decidis ke mi portus jupojn, kaj komencis akiri jupojn, ne nur kiltojn, sed ankaŭ florajn, virinecajn jupojn. La virinoj en multaj kulturoj jam luktis delonge kaj gajnis la rajton porti pantalonojn. Ankaŭ ni, viroj, devas lukti ke ajna homo rajtu porti ajnan vestaĵon - ĉu ina ĉu iĉa aŭ eĉ senvesti!

Nuntempe kiam mi promenas surstrate en Barcelono, barbulo kun jupo, estas stranga sento: miksaĵo de timo, honto, kuraĝo kaj fiereco pro mia elekto. Mi sentas min pli atakebla pro mia elekto, sed tamen tiel mi sentas iomete tion kion devas senti multaj aliaj homoj kiuj ne tiom privilegias kiel mi: iĉo, blankulo, eŭropano, cisgenrulo, edukito, sanulo, kaj plenkapablulo.

Atribuite-Samkondiĉe 4.0 Tutmonda (CC BY-SA 4.0) Brian RUSSELL

なぜ私はスカートをはくようになったのか？

ブリアーノ　ルッセル

私はよく人から、スコットランド人かと聞かれます。なぜでしょう？　私は男ですが、よくスカートをはいているからです。ご存知のようにスコットランドの男たちは、キルトという男性用スカートをはいています。

子どものころ私は、異性装者やドラァグクイーン、つまりスカートをはく男性をおかしい人だと思っていました。それ故、自分自身がスカートをはこうと決めたなんて、変なことだろうと実際思ってしまいます。そこで、私がなぜスカートをはくようになったのか、その理由についてお話しましょう。

私は、ほとんどいつもスコットランドの「キルト」という男性用スカートをはいているイギリス人と一緒に住んでおります。その彼は、夏にキルトをはくのは、ズボンをはくよりずっと快適だと、私によく言うのです。

彼はある時、私に試着用にとキルトをくれました。しかしそれを自分がはくのは本当のところ、変な気分でした。他の人たちが、私を見て驚いていると感じるからです。そんなこともあってスカートをはかなくなりました。スカートをはくのは、仮装のお祭りで、みんなが盛り上がって変なものを着たりする時に、時々はくだけになっていました。私はシスジェンダー（大類注：異性愛者）で、自分のことを普通の一般の男性だと感じており、ほとんど女性にだけ魅力を感じます。

しかし、長かった私の教師生活のなかで、ある時、スカートをはく少年を描いた短編映画を観ました。その少年は、よその親たちや子どもたちに笑われることに苦しんでいました。幸い、その映画に登場する何人かの大人たちは、「男の子だって、スカートをはきたければ、はいていいのだよ」と語っていました。

けれども、私がそれを見た時、そういう大人たちの誰もが、自分でスカートをはいて、男性がスカートをはく権利を共に守ろうとはしていない、と私は考えました。それから私は、スカートをはこうと決め、キルトだけでなく、花柄の女性向けのスカートも買うようになりました。

すでに女性たちは長い闘いの末、ズボンをはく権利を勝ち取っています。私たち男性も、誰もが、どんな服でも身に着けて良いという権利のために闘わなければなりません。女物であれ男物であれ、一糸まとわぬ姿であっても！

今のところ、髭面でスカートをはいた私がバルセロナの街を歩くと、奇妙な気分になります。恐怖、羞恥、勇気、そして私の選択からくる誇りのような入り混じった感じです。自分がスカートをはくことを選択したために、攻撃されやすくなったとも感じますが、一方で、私も多少はそういう感覚にさらされる覚悟を持たなければとも思います。そうした感覚は、白人の男性で、またヨーロッパ人でシスジェンダーであり、教育を受け、健康で五体満足の私と違って、そのような特権を持っていないトランスジェンダー（性同一性障害の人）のような多くの人たちに強いられたものなのですから。

「表示 - 継承 4.0 国際（CC BY-SA 4.0）Brian RUSSELL」

ブリアーノさんとの出会いと彼の原稿について

大類 善啓

少数派の世界大会

この原稿を送ってくれたブリアーノ・ルッセルさんに出会ったのは、この夏（2019 年）、スペインのカタロニアの州都、バルセロナで開催されたエスペラント SAT 世界大会である。SAT（サートゥと言う）は Sen Nacieca Tutamondo（世界無民族協会）の略称であり、国家や民族を無くそうとするエスペランティストの、いわば少数派の世界組織である。

エスペラントの最大の世界的な組織は UEA（ウエア）と言って、毎年夏に開催する世界大会には 1000 人以上、時には 2000 人近いエスペランティストが参加する。もちろんベテランのエスペランティストの友人に聞けば、半分以上が初心者であり、観光を兼ねて参加する人も多いとのことである。

それに比べると SAT の世界大会は、UEA の世界大会に参加する人の 10 分の 1 という少なさで、今年の参加者は 100 人ほど、最終的には 220 人ほど参加したようだが UEA に比べると本当に少ない。日本からは私を含めて 7 人である。

SAT は国という単位を認めないから、参加者名簿を見ても日本からと明示はなく、あくまでも出身地の都市名で記されている。それを見れば、札幌から二人、東京からは私一人、京都から二人、大阪から一人が名簿に載っているが、大会概要の印刷後に申し込まれた名古屋からの男性を含めて計 7 人である。この人数からわかるように、国家や民族を超えて新たな世界を構築しようという考えを持っている人たちがエスペランティストのなかでも極めて少数だということがわかるだろう。

そんな SAT の世界大会の初級学習会に参加した初日の講師がブリアーノさんだった。長身の彼は長いパンタロンというかスカートをはいていて、この夏の暑い季節には涼しいだろうなと思った。

写真左がブリアーノさん、右・大類

ザメンホフ通りで

さて、大会のある日、スペイン内戦の跡を偲ぶという遠足に出かけ、バルセロナの中心から離れて、かつての闘いの塹壕跡を見た後、これもバルセロナの郊外にあるエスペラント博物館を訪れた。ここには、ある篤志家のエスペランティストが集めたエスペラント関係の図書などが集められている。中には日本で刊行された書籍も 3 点ほどあった。博物館と言っても、その名前からイメージされるような大きな館ではなく、いわば一軒家のよ

うなものである。以前はバルセロナの中心地にあったようだが、土地の高騰などがあり、維持するのが難しく、郊外に引っ越したというわけである。

その館を出たところの通りがザメンホフ通りと言い、そこでブリアーノさんに会った。京都からご夫婦で参加されていて、以前から親しくお付き合いしている田平正子さんに通訳してもらい、ブリアーノさんに、前から聞きたかったこと、なぜスカートをはいているのか、なぜはくようになったのかと聞いた。それぐらいは私もエスペラントはできるのだが、どんどん会話が続くようになると私の語学力では到底会話が続かないと思って、正子さんに助けてもらったのだ。

ブリアーノさんはこう答えた。「女性がズボンをはこうとしたら反対されたという歴史を知り、それならば、と（抗議の意思を込めて）スカートをはこう」としたのが動機だと語ったのだった。ブリアーノさんは、反骨精神の持ち主だと思った。

その晩ベッドに入ってうつらうつらしながら考えているうちに、ぜひブリアーノさんに＜なぜ私はスカートをはくのか＞という原稿を書いてもらうおうと思った。

原稿依頼を快諾

翌朝、食堂でブリアーノさんに正子さんの夫君である稔さんの助けを借りて、原稿の依頼をした。稔さんは英語教師である。ブリアーノさんは快く承諾してくれ、原稿は英語かエスペラントかどちらがいいかと訊ねたので、ぜひエスペラントで書いてほしいと言ったところ、一か月も経ずにメールで原稿を送ってくれた。その後、改めてプロフィールを送ってほしいと依頼した。但し、プロフィールなど書きたくないなら、それもいいと記しておいた。それについての返事がなかったから、ブリアーノさんは、原稿を書いた以上のことは書きたくないと理解した。

さて、この原稿の日本語初訳を相川拓也さんにお願いした。それを基に、私がより読者に解りやすいようにと思って手を入れたので、最終的な日本語訳の文責は私、大類にある。また本誌の読者の中には、なぜこのような原稿を『星火方正』に載せるのか、という疑問を持つ方もおられるだろう。私は、本誌は旧満洲の知られざる歴史を若い人たちに伝えていきたいと思うだけでなく、既成の秩序や体制の論理、体制の枠を超える精神や考えをどんどん発表できる媒体にしたいと思ったからである。

二年前だったか、北京からやってきた若い日本の研究者が、既存のマス・メディアに載らないような原稿がたくさん掲載されており驚いた、すごいと言ってくれた。また在日朝鮮人のある詩人は同じような意味で本誌を評価してくれたことがあり、とても嬉しかったことを覚えている。

ぜひ読者の方々、会員の方々、どんどん既成のメディアでは書けないような原稿を送ってください。お待ちしています。

（おおるい・よしひろ：本会理事長。著書に『ある華僑の戦後日中関係史―日中交流のはざまに生きた韓慶愈』（明石書店）、共著に『風雪に耐えた「日本人公墓」―ハルビン市方正県物語』（東洋医学舎）、『満蒙の新しい地平線―衛藤瀋吉先生追悼号』（桜美林大学北東アジア総合研究所）など）

方正（ほうまさ）日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

1945 年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない 1963 年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ４５００人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400 数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も 1984 年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は１９９３年に設立され、２００５年６月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員　一口　１,０００円　　団体・法人会員　一口　１０,０００円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６（社）日中科学技術文化センター内

電話　03ー3295ー0411　FAX 03―3295－0400　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130―5―426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス：http:/www.houmasa.com/

《報告》　　　　　　　ありがとうございました！

前号の会報 28 号入稿後、2019 年 4 月 20 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。（敬称略、受取った順に記載しました。2019 年月 12 月 5 日現在）

貞平浩　中澤洋　渡辺保雄　渡辺眞知子　さいたま市大宮日中友好協会事務局　榎戸吉定　亀山英雄　金成敬子　鈴木敏夫（杉並）　芹沢昇雄　野沢達雄　村田和代　渡辺一枝　山田敬三　竹井成範　篠原孝　伊藤昭　藤原作弥　末広一郎　阿石定子　篠田欽次　田沢仁　遠藤滋　高木雅之　田中正昭　神田秀一　小林浄子　佐藤すみ江　川村範行　川口憲横島照彦　加藤毅　久保和男　小倉光雄　唐下善次郎　島辰夫　戸田和歌　小出公司　阿部則司　石橋辰巳　飯沼信彦　中澤道保　長澤保　中村静枝　竹中一雄　樋口貴教　米濱泰英　中島紀子　平沢千恵子　山本喜多男　畑修三　宮城恭子　鵜沢弘　水沼安美　寺本康俊　高田京子　深山信雄　上村力　山内るり　掛谷敏男　江川玲子　杉田春恵　藤井盛　寺沢秀文　秋吉任子　中嶋定和　中井詔太郎　高橋守男　矢吹晋　広田彰夫　篠原淳子　石井妙子　山内良子　藤後博巳　栗原彬　唐沢修　鈴木春夫　佐藤千栄子　春日井治　大浜敏夫　高橋健男　山本武　中島俊輔　岡百合子　富士国際旅行社　望月信隆　土川克広　丹野雅子　師岡武男　十時哲哉　新谷陽子　松村静子　須貝佑一　原田清治　千島寛　佐藤ナヲ　村上弘充　堀泰雄　酒井武史　可児力一郎　下山田誠子　木戸冨美江　早川浩市　小野寺喜一郎　内山則男　伊原敏子　谷川弘　金成弘美　村田吉隆　福地桂子　及川淳子　村田忠禧　加藤まり子　久保田熙　丹保洋子　河村康彦　南雲英雄　田平正子　千秋昌弘　小林さゆり　江田洋一　横前明　齋藤忠雄　白井豊富　木村美智子　村杉正洋　牧野八郎　伊原忠　近藤燿子　黒岩満喜　西嶋拓郎　林郁　森美紀子　満蒙開拓平和記念館　岩間孝夫　木村護郎クリストフ　野沢淑子　小関光二　小池イヨ子　小柳公代　松村満美子　千田優子　及川康年　藤川琢磨

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

《編集後記》今号も多くの方々からの寄稿があり、なかなか充実した誌面になっているのではないかと思っている。寄稿された方々には改めて感謝します。今秋は、中国からの視察団ラッシュの応対で私も、本会事務局がある日中科学技術文化センターでの本業！？ の仕事が忙しく、編集業務も慌ただしかったが、ともかく発行することができてほっとしている。最後の原稿チェックにはいつものように森一彦の応援があり助かった。発送業務は仲間が８人ほどが集まってくれるが、できたら編集業務でもいろいろと手伝っていただける人があれば大いに助かる。ぜひ支援できそうだという方は、ご連絡ください。また田平正子さんには本誌に関連する雑誌記事などを送っていただき感謝！　（大類）

≪表紙写真撮影：寺沢秀文≫

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第 29 号）2019 年 12 月 12 日発行
発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６　日本分譲住宅会館　４Ｆ
㈳日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会